

宮城県文化財調査報告書第 87 集

## 松島有料道路関連調査報告書

# 館 山 館 跡 山 下 遺 跡

昭和 57 年 10 月

宮 城 県 教 育 委 員 会  
宮 城 県 道 路 公 社

## 序

自然の豊かな宮城県には、有形・無形の貴重な文化財が数多くあります。

なかでも埋蔵文化財は、昭和57年4月現在で、約5,300箇所の所在が確認されています。

地域の開発と埋蔵文化財の保護・保存の調整は、関係各機関と綿密な連絡のうえに実施しているところであり、年を追ってその効果が徐々にあらわれ、各方面からの理解を得られるようになってまいりました。

本報告書は、松島有料道路建設に伴い、館山館跡と山下遺跡の記録保存調査を実施した結果をとりまとめたものであります。

この報告書が、研究者及び関係者のみならず、広く一般の方々に活用され、文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、この調査に深い理解と多大の御協力をいただいた多くの方々に、厚く御礼申しあげます。

昭和57年10月

宮城県教育委員会

教育長 三 浦 徹

## 序

経済社会の発展は、産業活動の活発化と生活圏の拡大、県民生活の向上と余暇の増大をもたらし、これを反映して交通機能はますます高速化、広域化が要請されております。

県はこの対応策として基礎的条件となる主要道路網の整備を県政の重点施策として鋭意整備を図っています。

しかし、自動車交通の増大に伴う道路需要は、従来の公共事業ベースによる道路整備では到底補い難い現況にありますので、昭和47年から4月宮城県道路公社が公共事業を補完して道路建設等を行っています。

松島有料道路は、県道仙台松島線のうち県道大和松島線が重複する松島町初原地区から同町根廻地区間の渋滞解消を目的に建設するものであります。

昭和54年松島有料道路区域に埋蔵文化財のあることがわかり協議の結果宮城県教育委員会に委託し昭和56年6月から8月末にかけて館山館跡と山下遺跡の発掘調査を実施しました。

その結果、平安時代の集落跡や中世の館跡などについて貴重な資料を得ました。もとより現代文明社会は先人の努力によって築かれたものであり、これら歴史的文化遺産を保護することは、新時代への活用にもつながるものであり、この調査結果を通して今後の総ての活動の指針になれば幸いです。

最後に、この調査に当って御尽力をいただいた県教育委員会並びに地元の関係者に対し深く感謝を申しあげる次第です。

昭和57年10月

宮城県道路公社 理事長 芳賀幸夫

# 目 次

序

調査に至る経過 .....	1
I. 館山遺跡 .....	2
II. 山下遺跡 .....	75

# 例 言

1. 本書は松島有料道路関係遺跡の発掘調査報告書であり2遺跡について作成したものである。
2. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 調査及び整理において、次の方々から指導・助言を賜わった。  
    鵜田勝彦氏（古川工業高校）  
    藤沼邦彦氏（東北歴史資料館考古研究科長）  
    赤羽一郎氏（愛知県立陶磁資料館学芸員）
4. 各遺跡報文中、土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を利用した。
5. 報文中、建設省国土地理院行の地形図を使用したものは図中に示した。
6. 整理・報告書の作成は発掘調査時の調査員及び現文化財保護課員の協議を得て、「調査に至る経過」は平沢英二郎が、各遺跡の遺物整理と執筆は次の者が担当した。  
    館山館跡……澁谷正三  
    山下遺跡……菊地逸夫
7. 山下遺跡出土の鉄滓の分析については鵜田勝彦氏に原稿を依頼した。
8. 各遺跡の調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は宮城県教育委員会が保管しており今後東北歴史資料館において保存、公開の予定である。

## 調査に至る経過

仙台市と石巻市とを結ぶ道路網の一部を形成している県道仙台松島線のうち、松島町初原地区から同町根廻地区間は、県道大和松島線等が重複していることによって交通渋滞が著しい。

松島有料道路の建設は、この交通渋滞を積極的に解消し地域住民の利便と地域開発の発展を目的に計画された。

ところが有料道路計画ルートに埋蔵文化財がかかわりをもっていることがわかったので、昭和54年2月15日、宮城県土木部長は宮城県教育委員会教育長あて文化財の保存をめぐって協議をした。県教委は、昭和54年2月20日と2月28日に第1回の文化財分布調査を実施した。その結果、有料道路ルート上に館山館跡及び山下遺跡の広がりのあることがわかり、このことを3月5日土木部長及び松島町教育委員会教育長あて通知した。昭和54年5月1日、2遺跡の取扱いについて再度土木部長から協議があり、5月8日、松島町教育委員会教育長あて協議について通知し、6月12日、土木部、県道路公社、県教委、松島町教委の四者で具体的な話し合いを始めた。9月26日、再度四者会議をもち、工事方法と文化財の調査の方法等について、それぞれの立場から説明をし理解につとめた。また、館山館跡については、館跡全体の測量調査の必要なことを確認した。

昭和55年2月、路線敷に係る館跡の地形測量を実施した。

昭和56年4月25日、道路公社は県教委に対し正式に発掘調査を依頼した。県教委はこれを受けて費用の積算を含め館山館跡と山下遺跡の発掘調査の時期等の検討に入り、5月21日発掘調査の主体者になることを承諾その旨を土木部長と道路公社理事長あて通知した。

発掘調査は6月9日から開始8月26日まで実施した。当初予想した遺構のほか平安時代の住居跡、製鉄遺構などが発見され工事工程との調整をする必要があった。

昭和56年12月から遺物整理に入り、昭和57年2月には路線外に延びる館跡の遺構の測量調査も実施した。

# I 館 山 館 跡

## 調 査 要 項

**遺跡所在地：**宮城県宮城郡松島町初原字松本・反町・三居山・根崎

**遺跡記号：**GP（宮城県遺跡地名表登載番号：17014）

**調査期間：**昭和56年6月8日～8月26日

**路線敷面積：**約150,000 m<sup>2</sup>

**発掘面積：**約11,390 m<sup>2</sup>

**調査員：**文化財保護課・土岐山武・澁谷正三・菊地逸夫・古川一明

**調査協力機関：**宮城県道路公社

宮城県松島町教育委員会

# 目 次

I	遺跡の位置と環境	5
II	調査の方法と経過	8
III	調査地区の状況	9
IV	中世以前の遺構と遺物	16
1	竪穴住居跡とその出土遺物	16
2	その他の出土遺物と年代	22
(1)	縄文土器	22
(2)	土師器	23
(3)	須恵器	25
(4)	赤焼土器	25
(5)	灰釉陶器	25
(6)	石器	25
3	出土土器の分類と年代	27
(1)	出土土器の分類	27
①	土師器	27
②	須恵器	28
③	赤焼土器	28
(2)	出土土器の年代	28
4	住居跡の年代	29
V	中世以降の遺構と遺物	30
1	館跡の規模と構造	30
2	伝承	33
3	発見された遺構と遺物	33
(1)	西郭で発見された遺構	33
①	平場の状況と遺構	35
(2)	その他の遺構	42
①	土壇とその出土遺物	42
②	通路状遺構	42
(3)	発見された遺物と年代	42
①	陶器	42

②磁器	46
③金属製品	47
④古銭	47
4 遺構の年代と考察	48
(1) 西郭で発見された遺構	48
(2) その他の遺構	48
5 館跡について	49
(1) 館跡の性格と年代	49
(2) 歴史的背景	50
VI まとめ	55



## I 遺跡の位置と環境

館山館跡は、宮城郡松島町初原字松本・反町・三居山・根崎に所在し、松島町の中心である高城から北へ約1.5kmの地点に位置し、東北本線愛宕駅南西脇の丘陵上に立地している。

松島町周辺の地形を概観すると、西には富谷丘陵、東には石巻海岸平野、北には吉田川低地があり、南は松島湾に臨んでいる。富谷丘陵は奥羽山地の一部をなす船形火山地に連なり、全体として100～200m前後の定高性のある丘陵をなしている。また、この丘陵の東端及び南端は県道仙台―松島線に沿って認められる長町―利府構造線をもって区画され、東端で松島丘陵に連なり、南端で宮城野海岸平野に接する。

遺跡は富谷丘陵の東端及びそれに連なる松島丘陵の一部にまたがり、全体として南に向かって舌状に突き出した丘陵先端部に立地している。遺跡の立地する丘陵は南北長2.3×東西幅約0.8kmの規模で泉ヶ原から反町・三居山に向かって南へ舌状に延び、その先端部は反町周辺にみられる沖積地に接する。丘陵は縁辺が小河川や沢・谷によって開析されたため、丘陵頂部を基部として放射状に幾つもの尾根が形成され、全般的に急峻な地形をなしている。尾根と沢との比高は30～70mある。標高は最高所で82mある。現状は丘陵のほとんどが山林(杉林・雑木林)で一部に畑地がみられ、沢は水田・荒地である。

したがって、**本遺跡は背後に丘陵を控え、前方に沖積地を見下ろす急峻な地形を選んで立地していると言える。**

このような地形条件を生かした館跡は、松島町内では本館跡南東約0.5kmにある愛宕山館跡、同じく南約0.8～1kmにある大日山館跡、城内山城跡がある。ところが、これらとは異なった状況下にある館跡としては、町内磯崎にある館ヶ崎城跡がある。館ヶ崎城跡は現在西側だけが松島湾に面しているが、当時は三方海に囲まれていたと言われる。

また、中世においてこれらの館跡周辺は竹城保と呼ばれていたことは相馬文書・相馬岡田文書から知られる。と同時に、平安末から中世にかけての交通路として「多賀国府から竹城保・深谷保を経て牡鹿郡に至る」東海道が知られている(佐々木：1958)。東海道は竹城保に於いては現在の高城町から松島高校の裏側を通過し、一の瀬、左坂を通過していたと推定されていること(松島町誌編纂委：1973)から、町内にある館跡の殆んどは街道筋あるいは街道に近い位置に設けられていた可能性が考えられる。

以上の他に町内やその周辺には縄文時代から中世にかけて多くの遺跡が分布している。特に松島湾に面した丘陵上や島嶼には多くの貝塚が分布している。貝塚の中には、これまでの調査から縄文時代だけでなく弥生・奈良・平安時代にまで及んで営まれていたことが知られるもの



第1図 館山遺跡・山下遺跡の位置及び周辺の遺跡(国土地理院発行1/5万「松島」を複製)

もあり、出土遺物などから当時の漁労・狩猟活動の一端を知ることができる。調査された貝塚としては西ノ浜貝塚、福浦島貝塚、貝殻塚等がある。

一方、松島湾背後の富谷・松島丘陵上には館跡・古墳・十三塚・寺院跡等が分布し、集落跡と推定される遺跡は比較的少なく、反町遺跡、山下遺跡、小森遺跡（以上、奈良・平安時代）、永根貝塚（縄文・弥生・奈良・平安時代）、貝殻塚貝塚（縄文）が知られているにすぎない。このことは、分布調査が及んでいないため発見が進んでいないとも考えられる。

遺跡地名表

No	遺跡名	立地	種別	時代	No	遺跡名	立地	種別	時代
1	龍山館跡	丘陵	城館	中世	29	松島マリーナ跡遺跡	丘陵麓	包含地	古代
2	山下遺跡	丘陵麓	包含地	平安	30	館ヶ崎遺跡	海岸底地	包含地・製塩跡	縄文・奈良・平安
3	猪里沢遺跡	〃	〃	奈良・平安	31	館ヶ崎横穴古墳群	分離丘陵	横穴古墳	古墳
4	蝦穴横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳	32	館ヶ崎城跡	〃	城館	鎌倉
5	貝殻塚貝塚	丘陵	貝塚	縄文	33	銭神製塩跡	丘陵麓	製塩跡	奈良・平安
6	藤ノ巻横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳	34	新田遺跡	〃	包含地・製塩跡	平安
7	永根貝塚	丘陵	貝塚	縄文・弥生・奈良・平安	35	檜山十三塚	丘陵尾根	十三塚	室町
8	西光院脇遺跡	分離丘陵	包含地	縄文	36	松島寺跡	丘陵	寺院跡	鎌倉
9	要害城跡(古館)	丘陵	城館	南北朝	37	道珍浜貝塚	丘陵麓	貝塚	縄文
10	粟香塚	丘陵端	塚	江戸(?)	38	新富山貝塚	〃	〃	〃
11	瑞竹庵跡	丘陵	寺院跡	江戸	39	瑞藤寺洞窟遺跡	〃	洞窟	江戸
12	鷹場山遺跡	丘陵頂	館?	中世(?)	40	通珂崎遺跡	分離丘陵	包含地	縄文
13	堤館跡	丘陵麓	城館	中世	41	福浦島貝塚	島奥	貝塚・製塩跡	縄文・弥生・平安
14	金井袖遺跡	谷底平野	包含地	古代	42	焼島貝塚	〃	〃	〃
15	桐田遺跡	丘陵麓	〃	奈良・平安	43	九ノ島貝塚	〃	〃	縄文・弥生・古代
16	上下堤古墳群	〃	円墳	古墳	44	丹波沢南器跡	丘陵斜面	窯跡	平安
17	上下堤・畑中貝塚	〃	貝塚	縄文・古代	45	銭神貝塚	丘陵端	貝塚・製塩跡	縄文・古代
18	反町遺跡	丘陵斜面	包含地	古代	46	堀籠遺跡	丘陵麓	包含地・製塩跡	古代
19	音無遺跡	丘陵麓	〃	奈良・平安	47	火蓮沢遺跡	〃	包含地	縄文・平安
20	真言遺跡	〃	〃	〃	48	駒形遺跡	丘陵端	〃	古代
21	愛宕館跡	丘陵	城館	中世	49	大浜遺跡	海岸底地	〃	〃
22	元手樽製塩跡	丘陵端	製塩跡	奈良・平安	50	大浜貝塚	〃	貝塚・製塩跡	縄文・古代
23	大日山館跡	丘陵	城館	中世	51	梅ヶ沢貝塚	丘陵端	貝塚	〃
24	城内山城跡(袖堀城)	〃	〃	南北朝	52	名込遺跡	〃	包含地・貝塚	奈・平・古代
25	延命寺跡	〃	寺院跡	江戸	53	引通島遺跡	島奥	包含地・製塩跡	縄文
26	彌命院下・洞窟遺跡	〃	洞窟	不明	54	小森遺跡	丘陵斜面	包含地	古代
27	鷲島貝塚	分離丘陵	貝塚・製塩跡	縄文・弥生	55	諏訪古墳	丘陵端	円墳	古墳
28	国史跡・西ノ浜貝塚	丘陵麓	〃	縄文・弥生・古墳・平安					

## II 調査の方法と経過

松島有料道路路線は、その東端が松島町根廻地区にあり、ここを通過する国道45号線を基点とし、そこから、高城川、東北本線を横切って同町初原地区の北側に当たる標高50～70mの丘陵をS字状にカーブしながら通過し西端に至る。路線の西端は、同町上初原町営団地入口付近であり、通称利府街道で知られる県道仙台―松島線に通じる。今回の調査は松島有料道路路線が本遺跡の南側を東西に横切って建設されることになったため行なったものである。調査は主に急傾斜面や沢を避け、明らかに遺構が存在する箇所や遺構の存在が予想される箇所において実施した。

### (1) 調査地区の設定

松島有料道路路線は、本遺跡の南側を緩やかなカーブを描きながら約1kmにわたって通過する。はじめに、調査対象地区が広範囲であるため、地形に合わせて調査地区を便宜上5区に分けて設けた。すなわち、松島町し尿処理場東側に位置し、標高50cmの丘陵尾根部及び斜面をI区、沢地を挟んでI区の東方約90mの丘陵尾根をII区、II区の東側傾斜面を降りると南側に突き出した丘陵があり、そこをIII区、さらにもう一つ沢地を隔て南寄りにY字状に延びる丘陵尾根及び緩斜面をIV区、IV区東側の丘陵尾根に連らなり、そこから東方へ約100m離れた丘陵尾根及び沢、緩斜面をV区とした。

次に、各調査地区に存在する路線の中心杭2本を任意に選んで、それらを直結した線とこれに直交する線を軸線として、各調査地区毎に3m単位でグリッドを組んだ。グリッド名は、東西軸をアラビア数字、南北軸をアルファベットで表わした。

### (2) 調査の経過

調査は、昭和56年6月8日に開始した。路線敷面積は約150,000㎡である。

調査は、重機及び手掘りで、I・II・III・IV・V区の順に表土から地山までの堆積層を掘り下げた。

はじめに、4段の平場（上位の平場からD・E・F・G・平場とする）が認められたI区の西側から掘り下げたところ、表土下約20cmで地山及び整地層にいたり、E～G平場で柱穴列やピット群が、また、F平場とG平場をつなぐ通路が検出された。その後の調査は、柱穴の組み合わせや4段の平場の築造過程などを明らかにすることを目的として精査を続けるとともに、I

区東側、Ⅱ区、Ⅲ区の掘り下げを並行して行った。さらに、他の遺構の検出につとめた。その結果、遺構としてⅠ区西側では地山上面で掘立柱建物跡1棟、柱穴列1箇所、門跡が確認された。また、4段の平場は部分的に削平を施し、主に平場の縁辺に整地を施していることが明らかにされた。他にⅠ・Ⅴ区東側の緩斜面で竪穴住居跡が各々1棟、Ⅰ区東側・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区で通路状遺構が計6条確認された。遺物としては、Ⅰ区西側のE平場で古瀬戸の深皿及び中世陶器の大甕破片、Ⅰ・Ⅴ区東側の住居跡から主に土師器、Ⅲ区東側緩斜面第Ⅲ層から縄文土器や土師器、Ⅴ区の沢部第Ⅱ層から縄文土器・磁器・陶器・石器・金属製品・古銭・韃の羽口片等が出土した。

各遺構の精査後は、各地区毎に全体の平面図（遺構配置及び旧地形）を作成した。Ⅰ区西側については、 $1/100$ 、他は $1/250$ の縮尺で図化した。

調査は昭和56年8月26日をもって終了した。発掘調査面積は約11,390 m<sup>2</sup>である。

### Ⅲ 調査地区の状況

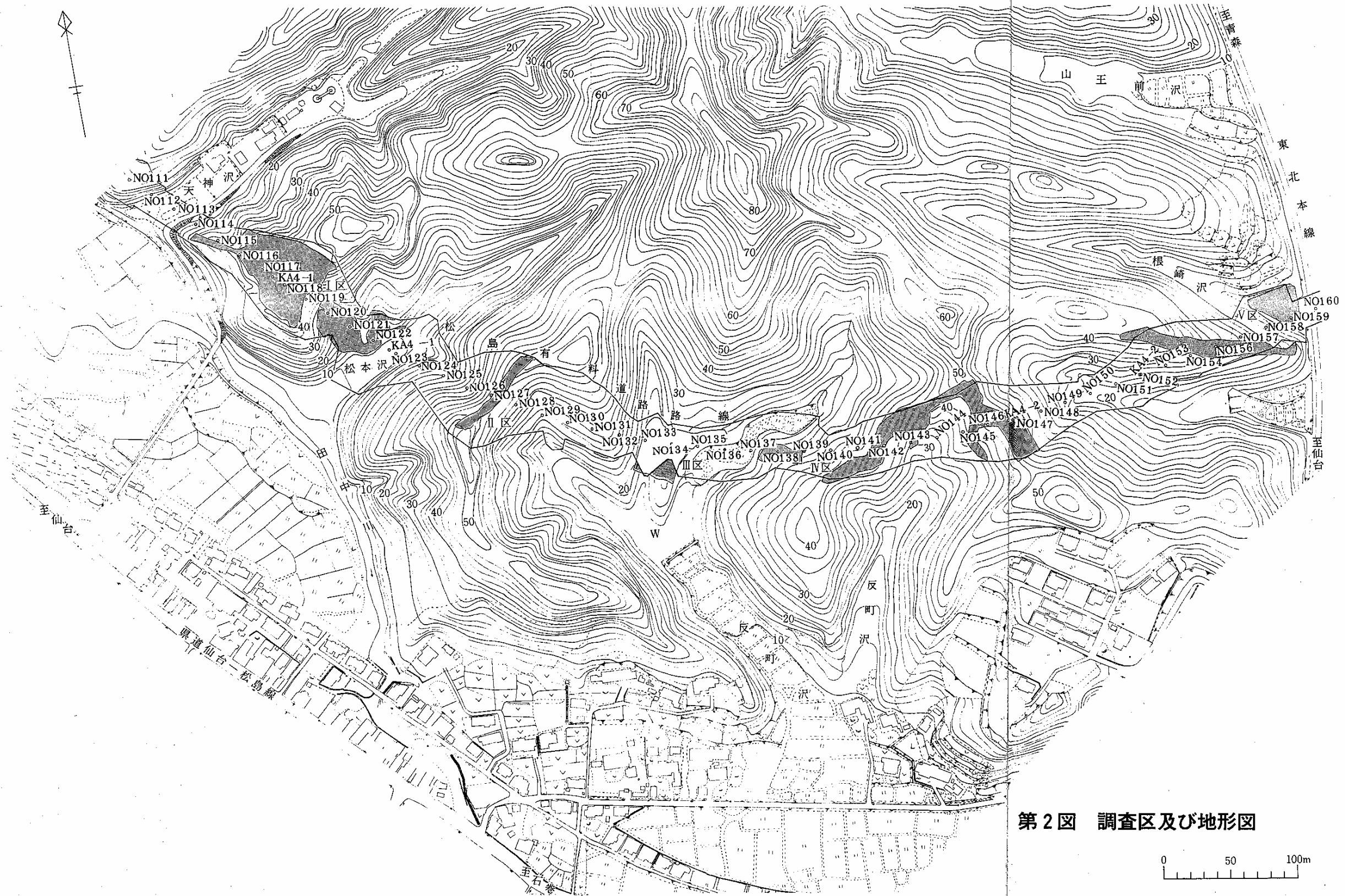
調査は調査対象地区が広範囲、かつ地形の制約などがあって5区の調査地区を設けて実施したことをすでに述べた。ここでは各地区の微地形、堆積土の堆積状況等について述べることにする。

#### 区

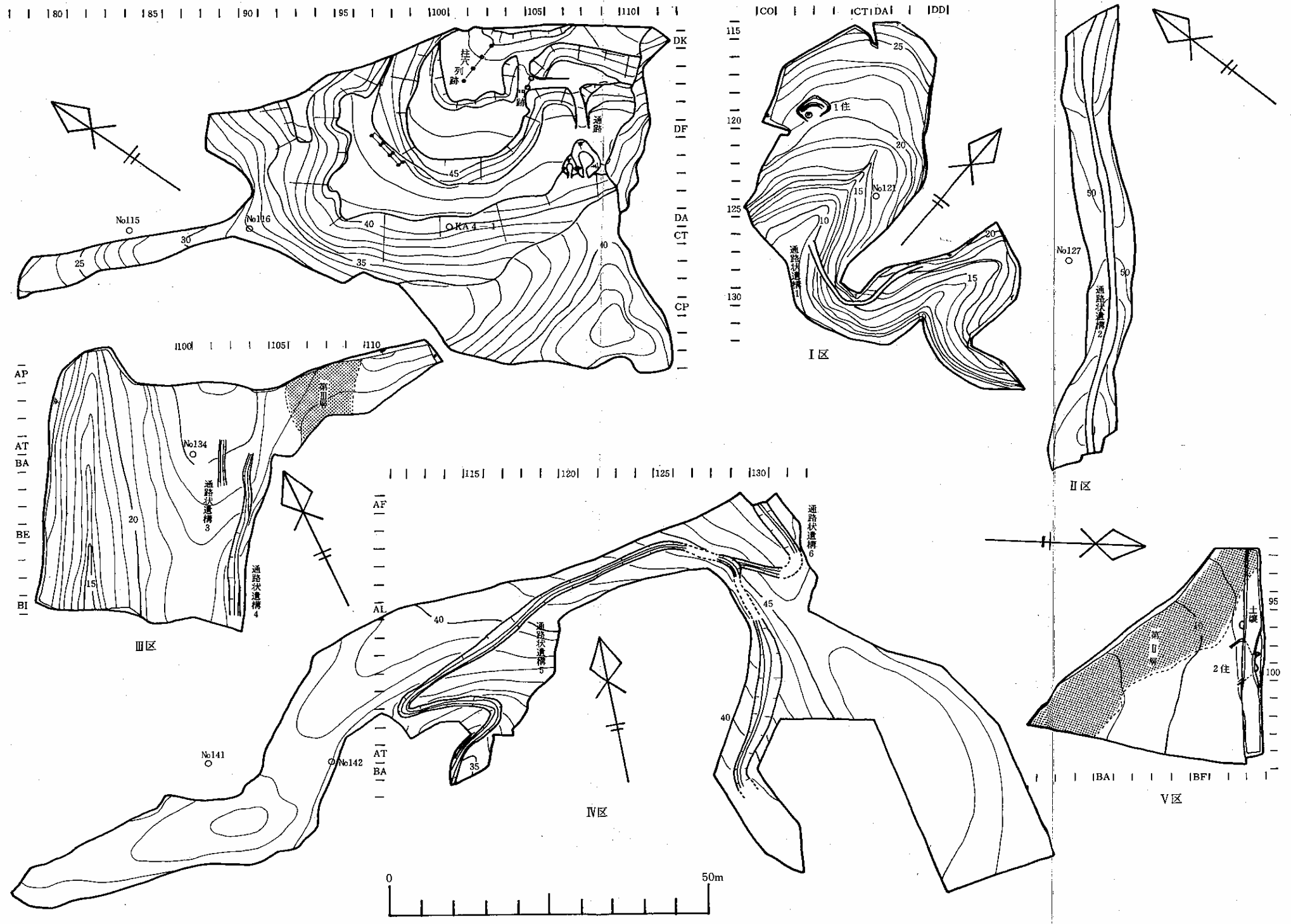
この地区は標高50mの南西に突き出した丘陵尾根にあり、尾根（Ⅰ区西側）とその東側斜面（Ⅰ区東側）を調査の対象とした。

Ⅰ区西側には南西方向に連なる4段状に認められる。また、最下位の平場である。G平場とその南方約25mの位置に標高45mの自然の平坦面があり、その間には西側に緩やかに傾斜する沢が認められる。基本層位は平場で表土・整地層・旧表土の3層が、沢で大別して表土、黄褐色土層、橙色土層の3層が認められる。遺構として、平場で掘立柱建物跡1棟、柱穴列跡1箇所、門跡、通路、ピット群が検出されている。平場表土、整地層上面から中世陶器片が出土している。

Ⅰ区東側はその中腹に緩斜面が認められるが、その他は急斜面を呈している。基本層位は緩斜面で大別して表土、黒褐色土層、黄  
められる。地表下約20cm～160cmで地山（岩盤）に達する。遺構として竪穴住居跡1軒、通路



第2図 調査区及び地形図



第3図 遺構配置図及びグリッド配図

状遺構1条が、地山の漸移層（黄褐色土層）上面及び地山面で検出されている。以上の堆積層からは遺物は出土していない。

## Ⅹ

この地区は標高54mの南東にL字状に突き出した丘陵尾根にあり、L字の「I部」に当たる尾根を調査対象地区とした。微地形は南西及び北西方向から緩やかに傾斜し、調査地区の中央部に平坦面が認められる。この地区は館に伴う通路が予想されたので掘り下げた。大部分は地表下約10cmで、調査地区の南東部で地表下約50cmで地山（岩盤）に達し、その間に黒褐色土層の1層が認められる。遺構として通路状遺構が1条検出され、遺物は出土していない。

## Ⅺ

南北に細長く伸びる小尾根とそれに接する西側の沢をⅢ区とした。

前者は標高26mで全体として南に緩やかに傾斜する。小尾根の北側（路線外）に空振・土塁等が認められ、この地区に館に伴う遺構が予想されたので掘り下げた。大部分は地表下約20cmで、調査地区の東端部では地表下約120cmで地山に達する。基本層位は東端部で大別して表土、無遺物層、遺物を含む層（第Ⅲ層）の3層認められるが、他は表土のみである。第Ⅲ層は厚さが約20cm～100cmあり、東西幅10mで路線外北側にまで延びている。第Ⅲ層から縄文土器・土師器・須恵器等が混在して出土している。したがって、旧地形の沢に二次的に堆積したものと考えられる。表土からは縄文土器が出土している。遺構として通路状遺構が2条地山面で検出されている。

後者は館に伴う通路の存在が予想されたので掘り下げたが遺構、遺物ともに認められなかった。

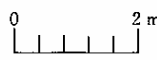
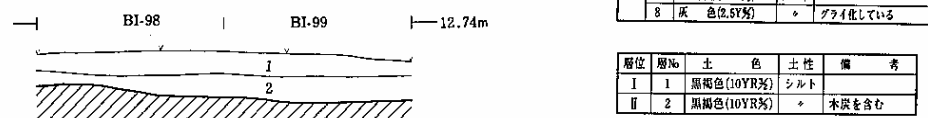
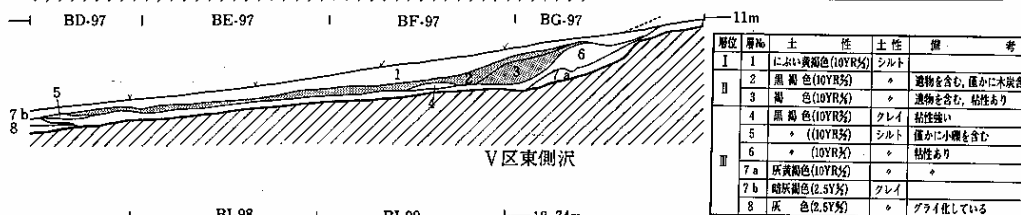
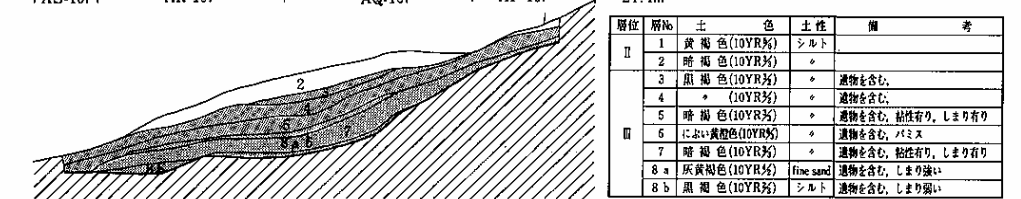
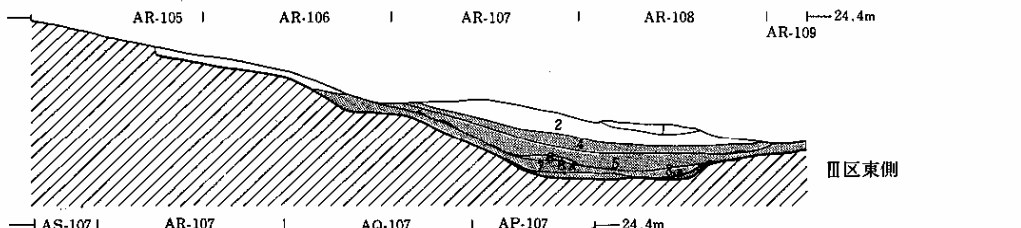
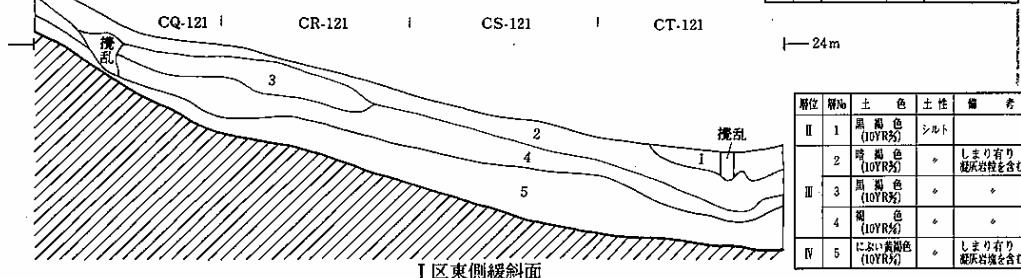
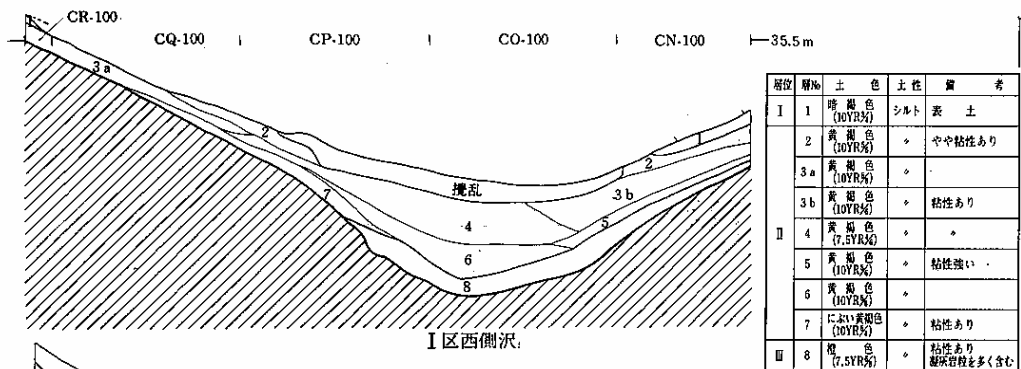
## Ⅻ

標高50mで全体的に南に突き出た丘陵尾根とその西側斜面の一部を調査の対象とした。

前者は南西方向に伸びる尾根と南東方向に伸びる尾根とからなり、調査地区の北側でV字状に交じわる。南西方向に伸びる尾根は北東側と南東側から緩やかに傾斜し、その中央付近に平坦面が認められる。南東方向に伸びる尾根は北西側と南東側から緩やかに傾斜し、その中央付近及び南東側に平坦面が認められる。したがって、ここでは尾根を人工的に削平して平坦面を形成している可能性があったので掘り下げた。地表下約20cmで地山に達し、その間に黒褐色土層が1層認められる。しかし、尾根を人工的に削平した痕跡は認められず、遺構として通路状遺構が2条地山面で検出されたただけである。遺物として表土から土師器が数点出土している。

後者は東から西に緩やかに傾斜している。ここでは、土師器片が採集されたので掘り下げた。地表下約20cmで地山に達し、堆積土は表土のみである。遺構・遺物とも認められない。





第4図 各調査区層位

## 区

標高 44m でほぼ東側に向かって延びる丘陵尾根とそれと並行する北東側の丘陵端部及びこれら丘陵間に認められる沢を調査の対象とした。

前者は西から東にかけて傾斜するやや急な斜面である。路線外北側に接して平坦面が認められたので掘り下げた。地表下約 20cm で地山（岩盤）の漸移層に達し、堆積層は表土のみである。遺構は認められず、遺物として表土から土師器が出土している。

後者は丘陵端部は北から南にかけ非常に緩やかに傾斜し、沢は北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。ここでは、土師器片が散布し、かつ緩斜面であることから掘り下げた。丘陵端部では地表下約 50～80cm で、沢では地表下約 40～80cm で地山あるいはその漸移層に達する。基本層位は丘陵端部で表土、黒褐色土層の 2 層が、沢で大別して表土、遺物を含む層（第Ⅱ層）、無遺物層の 3 層が認められる。第Ⅱ層は厚さが約 10～40cm あり、幅約 10m でさらに路線外に延びている。第Ⅱ層から遺物として縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器、磁器、陶器、金属製品、韃の羽口、鉄滓等が出土している。時期の異なる遺物が出土していることから、第Ⅱ層は二次堆積したものと考えられる。遺構として丘陵端部で竪穴住居跡 1 軒、土壇 1 基が地山の漸移層上面で確認されている。

## IV 中世以前の遺構と遺物

今回の調査で発見された中世以前と考えられる遺構としては、竪穴住居跡 2 軒がある。また、出土遺物としては、縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器、石器等がある。まず、発見された遺構及び出土遺物について述べ、次に、遺構の年代を検討していく。なお、出土遺物については縄文土器は文様がある程度明瞭なものを、土師器、須恵器、赤焼土器、石器は図示可能なものを取り上げた。その他の遺物については器種、器形、文様表出技法、調整技法等の項目を設け、破片集計表に一括してまとめた。

### 1 竪穴住居跡とその出土遺物

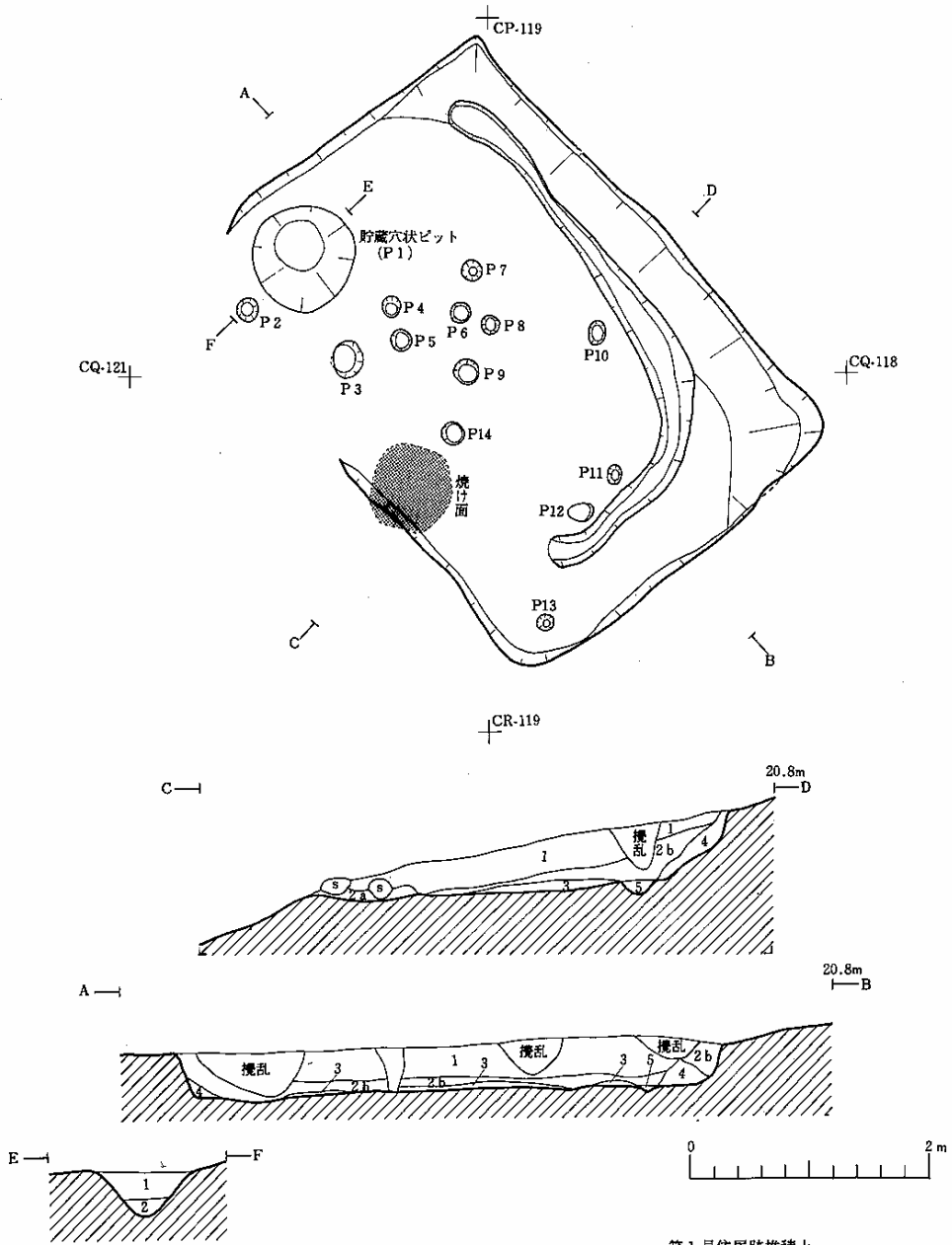
竪穴住居跡は I 区、V 区で各 1 軒ずつ検出された。ここでは、第 1 号住居跡（I 区）、第 2 号住居跡（V 区）として述べる。

#### 第 1 号住居跡（第 5 図）

〔平面形・残存状況〕 東壁の一部が削平されている。平面形は長方形を基調とする。

〔壁〕 第Ⅲ層を壁としている。壁の立ち上がりはゆるやかで、その上方で外傾気味となる。

〔床面〕 地山を床としている。床面はほぼ平坦である。また、13 個のピットが床面で検出されている。ピットは住居跡中央やや南寄りに多く集中しているが、柱痕跡が検出されず、しかも



貯蔵穴状ピット推積土

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10Y 5/)	シルト	燼土、炭化物を含む
2	褐色(7.5Y 5/)	○	凝灰岩粒を含む、遺物含む

第1号住居跡推積土

層No	土色	土性	備考
1	黒色(10Y R 3/)	シルト	
2a	黒褐色(7.5Y 5/)	○	粘性あり
2b	暗褐色(7.5Y R 3/)	○	
3	黒褐色(7.5Y 5/)	○	粘性あり
4	黄褐色(7.5Y 5/)	○	凝灰岩を含む
5	暗褐色(7.5Y 5/)	○	局所の埋土

第5図 第1号住居跡

### 第1号住居跡観察表

位置	規模	残存壁高	柱穴	カマド	備考
CQ・CR   119・120	長軸：4.48m 短軸：3.20m	東壁：8～17cm 南壁：13～38cm 西壁：15～42cm 北壁：23～44cm	不明	位置：東壁中央？	周溝あり

### 第1号住居跡ピット

項目 \ Pit No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>
形態・規模	円形： 90×35cm	楕円形： 20×18×17cm	楕円形： 30×25×20cm	円形： 16×12cm	円形： 16×11cm	円形： 16×13cm	円形： 18×13cm
P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	
楕円形： 16×14×12cm	円形： 20×6cm	楕円形： 20×4×9cm	楕円形： 16×10×7cm	楕円形： 20×14×23cm	円形： 14×15cm	円形： 20×13cm	

配置に規則性の認められないことから、その性格は不明である。

〔周溝〕断面U字状の周溝が西壁から北壁に平行してL字状にめぐっている。

〔カマド〕東壁中央部から西側寄りに、径約90cmの範囲で焼面が認められ、さらに、その上方の堆積土に焼土や炭化物、焼けてもろくなった凝灰岩が数個みられたことから、東壁中央付近にカマドがあったものと推定される。

〔貯蔵穴状ピット〕南壁東隅に認められる。堆積土は2層認められ水平に堆積している。堆積土から須恵器片が出土している。

〔堆積土〕住居内堆積土は5層に分けられる。堆積状況は東側に傾斜し、将棋倒し状を示している。

〔遺物の出土状況〕住居内堆積土（第1～5層）・床面・貯蔵穴状ピットから土師器（復示資料1点・口縁部資料17点・底部資料9点）、須恵器（口縁部資料1点）、赤焼土器（底部資料1点）が出土している。

#### 〈床面〉

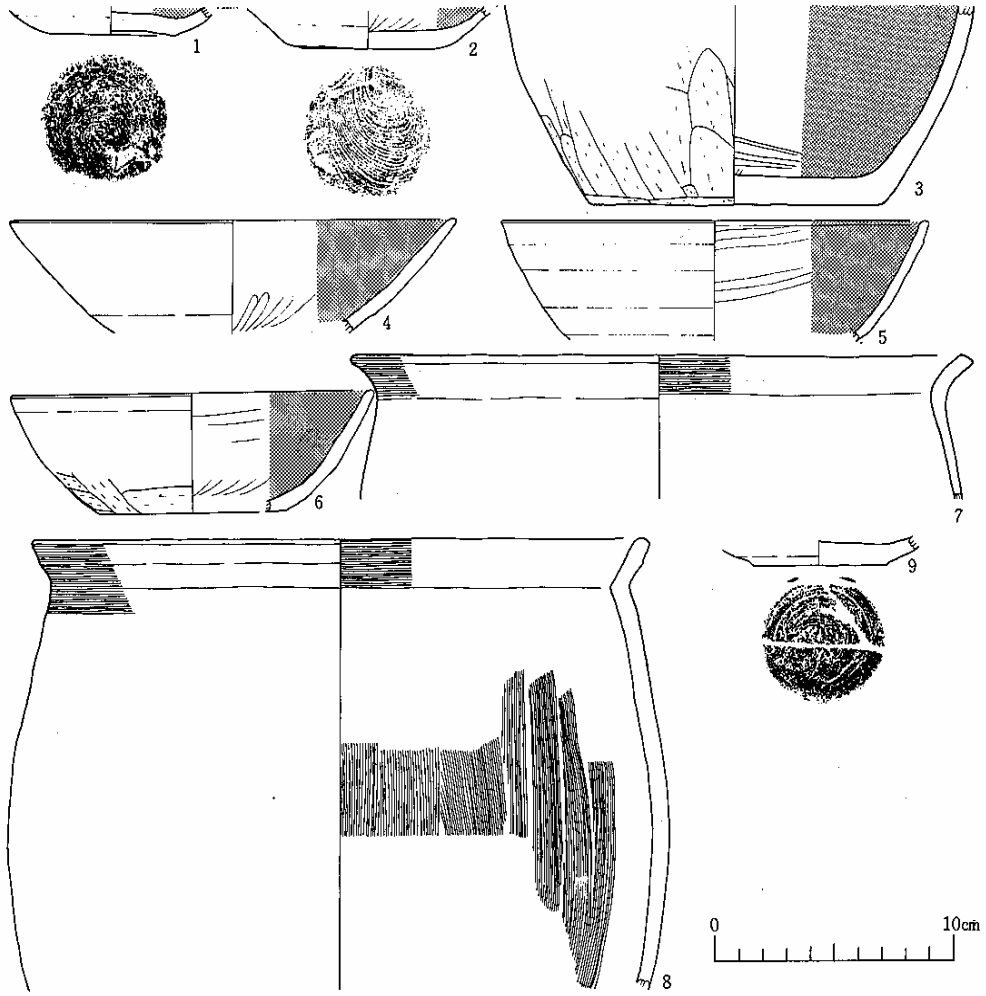
##### 土師器

坏（第6図1.2）ともに底部破片である。製作に際し、ロクロを使用している。底部の切り離しはいずれも回転糸切り技法によるもので、再調整は認められない。両者とも外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕（第6図3） 体部下半から底部にかけて残存している。外面は体部下半から下端にかけてヘラケズリが認められる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

#### 〈堆積土〉

##### 土師器



番号	種類	取り上げ層位	残存	分類	登録番号
1	土師器 坏	1住-床面	片	B II	4
2	〃	〃	片	B II	6
3	土師器 甕	〃	片	A	8
4	土師器 埴	1住-2層上面	片		1
5	〃	1住-1層	片		3
6	〃	〃	片	B I	2
7	土師器 甕	〃	片	A	10
8	〃	〃	片	A	9
9	赤焼土器 坏	1住-2層上面	片		7

第6図 第1号住居跡出土遺物

坏（第6図4～6） 製作に際し、いずれもロクロを使用している。器形は体部に僅かにふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が外傾する（4～6）。6は体部下半から底部に手持ちヘラケズリが認められる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

甕（第6図7・8）全体の器形は不明であるが、ともに口縁部は外反し、その端部は角ばつ

ている。7は口縁部内外ともヨコナデが認められるが、体部内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。8は口縁部内外面ともヨコナデが、体部内面に縦方向にナデが認められる。

### 赤焼土器

坏(第6図9) 底部破片である。再調整は認められない。底部の切り離しは回転糸切り技法である。

### 第2号住居跡(第7図)

[平面形・残存状況・拡張・重複] 北西壁及び北東壁の一部、南東壁が削平されているが、残存壁から平面形は方形を基調とするものと思われる。また、貼床下で溝1・2・3・4が検出されている。溝1は住居南西壁に認められる周溝の内側に平行して、溝2は住居南東側に認められる。溝1・2はその配置、形態などから周溝と考えられる。このことから一度拡張したと考えられる。溝3・4はそれぞれ住居中央部北西寄り、南東寄りに認められるが拡張前の住居跡との切り合い及びその性格は不明である。

[壁] 残存壁は地山である。壁の立ち上がりはゆるやかでその上方で外傾気味となる。

[床面] 拡張前の住居は地山を床面としている。拡張後は貼床を薄く施して床面としている。床面はかたくしまっており、平坦である。ピットが合計15個検出されている。そのうちP<sub>1</sub>～P<sub>11</sub>は拡張後の床面で、P<sub>12</sub>～P<sub>15</sub>は拡張前の床面で確認されている。前者は中央から東南寄りに、後者は北西隅に多くみられる。これらのピットは、柱痕跡が検出されず、しかも配置に規則性の認められないことからその性格は不明である。

[カマド] 煙道部の煙出しピット部分が残存している。その位置は、北西壁中央部から北西方向に約1mのところである。また、北西壁中央部付近に焼土及び木炭が多量に認められる。これらのことから、カマドは北西壁中央付近に存在したものと考えられる。

[周溝] 壁沿いに認められる。

[堆積土] 住居内堆積土は2層に分けられる。堆積状況は南東側に傾斜しているが、削平が著しいため水平状か将棋倒し状か不明である。

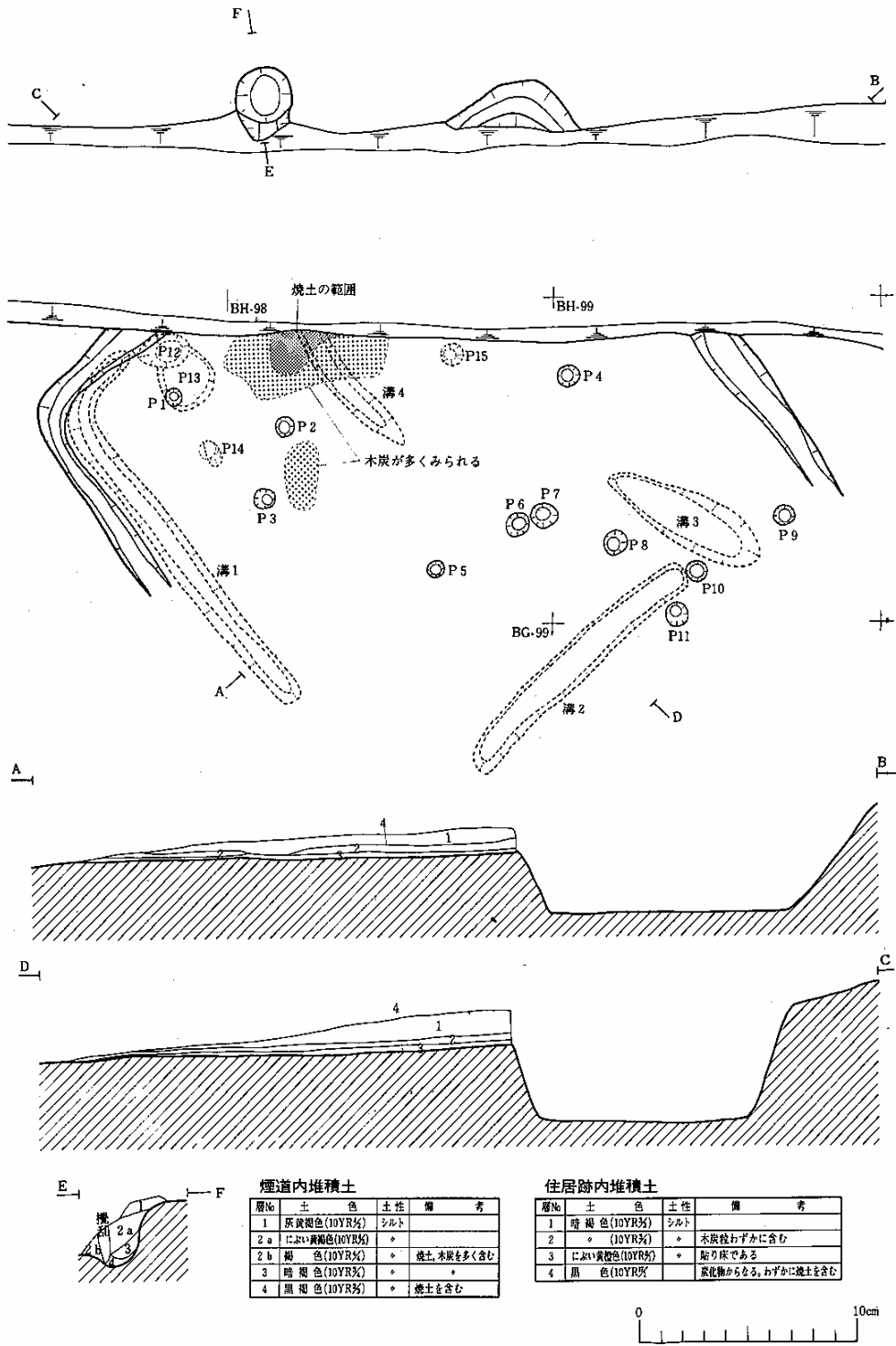
[遺物の出土状況] 住居内堆積土(第1・2層)・床面・貼床・周溝から土師器(復元資料1点、口縁部資料2点)が出土している。

### (貼床)

### 土師器

坏(第8図) 器形は体部に僅かにふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が外傾する。器高は低い。

外面は口縁部にヨコナデが認められる。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部は不明である。



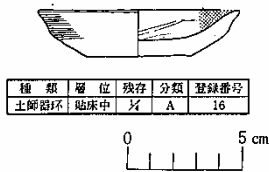
**煙道内堆積土**

層No	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR5)	シルト	
2 a	にがい黄褐色(10YR5)	○	
2 b	褐色(10YR3)	○	炭土、木炭を多く含む
3	暗褐色(10YR3)	○	
4	黒褐色(10YR3)	○	焼土を含む

**住居跡内堆積土**

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3)	シルト	
2	○ (10YR3)	○	木炭粒わずかに含む
3	にがい黄褐色(10YR5)	○	貯り床である
4	黒色(10YR3)		炭化物らなる、わずかに焼土を含む

第7図 第2号住居跡



種類	層位	残存	分類	登録番号
土師器環	地床中	欠	A	16

### 第2号 住居跡観察表

位置	規模	残存壁高	柱穴	カマド	備考
BN-BI   97~100	東西軸:5.5m	東壁: 5~24cm 南壁: 不明 西壁: 7~24cm 北壁: 28~30cm	不明	位置:北壁中央?	周溝あり。 煙出ピットし のみ残存し ている。

第8図 第3号住居跡出土遺物

第2号住居跡ピット

項目	pit No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>	
形態・規模		円形: 14×11cm	円形: 16×23cm	楕円形: 20×19×31cm	円形: 20×30cm	円形: 14×15cm	円形: 22×7cm	円形: 24×24cm	
		P <sub>8</sub>	P <sub>9</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>	P <sub>12</sub>	P <sub>13</sub>	P <sub>14</sub>	
		円形: 22×23cm	円形: 20×11cm	円形: 20×8cm	楕円形: 23×20×24cm	楕円形: 50×30×22cm	楕円形: 50×11cm	楕円形: 22×15×46cm	円形: 20×18cm

## 2 その他の出土遺物と年代

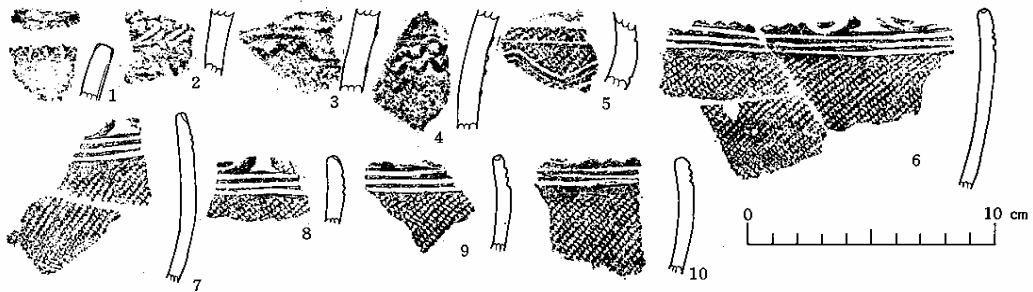
ここでは、Ⅲ区の表土及び第Ⅲ層、Ⅳ・Ⅴ区の表土、Ⅴ区の第Ⅱ層から出土した遺物を扱う。

### (1) 縄文土器 (第9図1~10)

縄文土器は、Ⅲ区の表土及び第Ⅲ層、Ⅴ区の第Ⅱ層から出土し、その量は83片である。これらの大部分は磨滅が著しく、しかも小破片が多い。したがって、ここでは文様の明確なものについて述べ、さらに所属時期を明らかにしたい。

1・6~10は口縁部破片で2~5は体部破片である。

1は口縁部内外に短い刻目が横位に施されている。地文は欠損のため不明である。2は末端ループ文(LR)が横位に施されている。胎土に繊維を含んでいる。3・4は地文として単節斜行縄



番号	種類	層位	部位	登録番号
1	縄文土器	Ⅲ区-第Ⅲ層	口縁部	71
2	〃	〃	体部	72
3	〃	〃	体部	74
4	〃	〃	体部	75
5	〃	〃	体部	73
6	〃	Ⅴ区-第Ⅱ層	口縁部	76
7	〃	〃	口縁部	76-1
8	〃	〃	口縁部	76-2
9	〃	〃	口縁部	77
10	〃	〃	口縁部	78

第9図 縄文土器



文(LR)横位に施した後、粘土紐が貼付されている。粘土紐は山形状に連続するものと直線的なものがある。3は2本の平行する直線貼付文間に連続山形文注が1段、4は2本の平行する直線貼付文下に3段の連続山形文が施されている。5は単節斜行縄文(LR)を施した後、沈線文が横位に施されている。すなわち、2本の平行沈線下に連続山形沈線文が認められる。

6～10の口縁部はやや内変する。6～9は口縁端部に2個1対の突起を有し、その下に3条の平行沈線が施されている。これらは地文として単節斜行縄文(LR)が横位に施されている。

以上の特徴から2は金山貝塚、宇賀崎貝塚(阿部：1980)に類例があり、前期初頭と考えられる。3～5は糠塚貝塚(興野：1980)に類例があり大木4式に比定されると考えられる。6～10は梁瀬浦遺跡(角田市教委：1976)、巻堀遺跡(宮教委：1977)出土土器に類似し、晩期中葉大洞い式に比定される。

なお、1は地文が不明なためその所属時期は不明である。

注) これらの用語は、興野義一氏(興野：1968)による。

## (2) 土師器

土師器はⅢ区の第Ⅲ層、Ⅴ区の第Ⅱ層、Ⅳ・Ⅴ区の表土から出土している。出土量は3679片であり、出土遺物中最も多い。坏・甕がある。

坏(第10図1～5) 製作に際し、ロクロを使用していないもの(1)とロクロを使用しているもの(2～5)とがある。

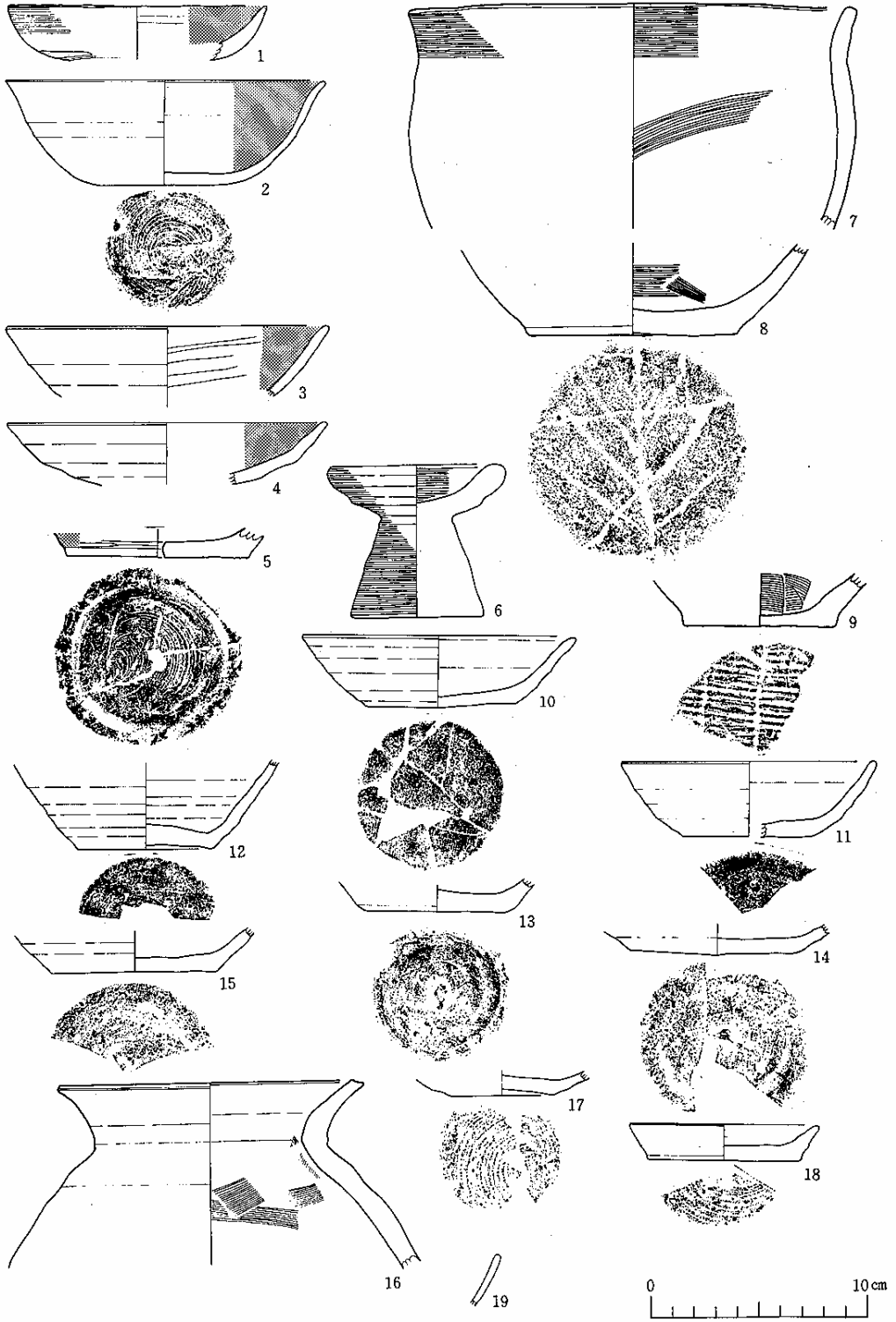
前者は底部を欠損している。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がる器形である。外面は口縁部にヨコナデ、体部下端にヘラケズリ後ヘラミガキが、内面は口縁部から体部にかけてヘラミガキ、黒色処理が施されている。

後者は2を除くと底部(3・4)あるいは口縁部から体部(5)にかけて欠損している。2は体部にややふくらみをもって立ち上がり、口縁端部が外傾する。底部の切り離しは2.5とも回転糸切り技法である。2～4は再調整が認められず、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。5は再調整として底部周縁に手持ちヘラケズリがみられる。体部内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。

なお、5の底部中央に貫通孔がみられ、これは焼成前に内外から穿孔されたものである。

器台(第10図6) 器形は、受部はその中央に弱い稜を有し、外傾する。脚部は、中実でその中央で僅かにふくらみを持ち、円錐形状に開いている。受部内外面及び脚部外面は、ナデが施されている。

甕(第10図7～9) 口縁部から体部にかけてのもの(7) 体部下半から底部にかけてのもの(8・9)がある。7は器形は体部にふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が外傾する。口縁部内外面ともヨコナデ、体部内面にはナデが施されている。8は底部に木葉痕がみられる。



第10図 土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器

体部内面にはナデが施されている。9は底部に簾状圧痕がみられる。体部外面はナデ、体部内面はヘラナデが施されている。

### (3) 須恵器

須恵器はⅢ区の第Ⅲ層、V区の第Ⅱ層から出土している。出土量は638片である。坏・甕がある。

坏（第10図10～15） 底部の切り離しは再調整が加えられているため不明なもの（10）以外は、すべて回転ヘラ切り技法によるものである。前者は、体部に僅かなふくらみを持ちながら立ち上がり、口縁端部が外傾する。再調整として、底部全面に手持ちヘラケズリが認められる。後者は、体部にややふくらみを持ちながら立ち上がり、口縁部が直線的に外傾する。再調整はいずれも認められない。

甕（第10図16） 体部上半から口縁部にかけてのものである。器形は頸部で強く屈曲し、口縁部が外反する。内面は頸部から体部にかけて部分的にナデが施されている。

### (4) 赤焼土器

赤焼土器はV区の第Ⅱ層から出土している。出土量は僅かである。

坏（第10図17・18） 器高が低く小形のもの（17）、底部破片のため全体の器形が不明なもの（18）がある。17は、器高は体部で立ち上がり、口縁部が直線的に外傾する。再調整は認められない。底部の切り離しは回転糸切り技法である。

### (5) 灰釉陶器

V区第Ⅱ層から出土している。碗がある。

碗（第10図19） 口縁部破片である。口縁部は外傾する。釉の色はオリーブ灰色である。胎土は灰色である。

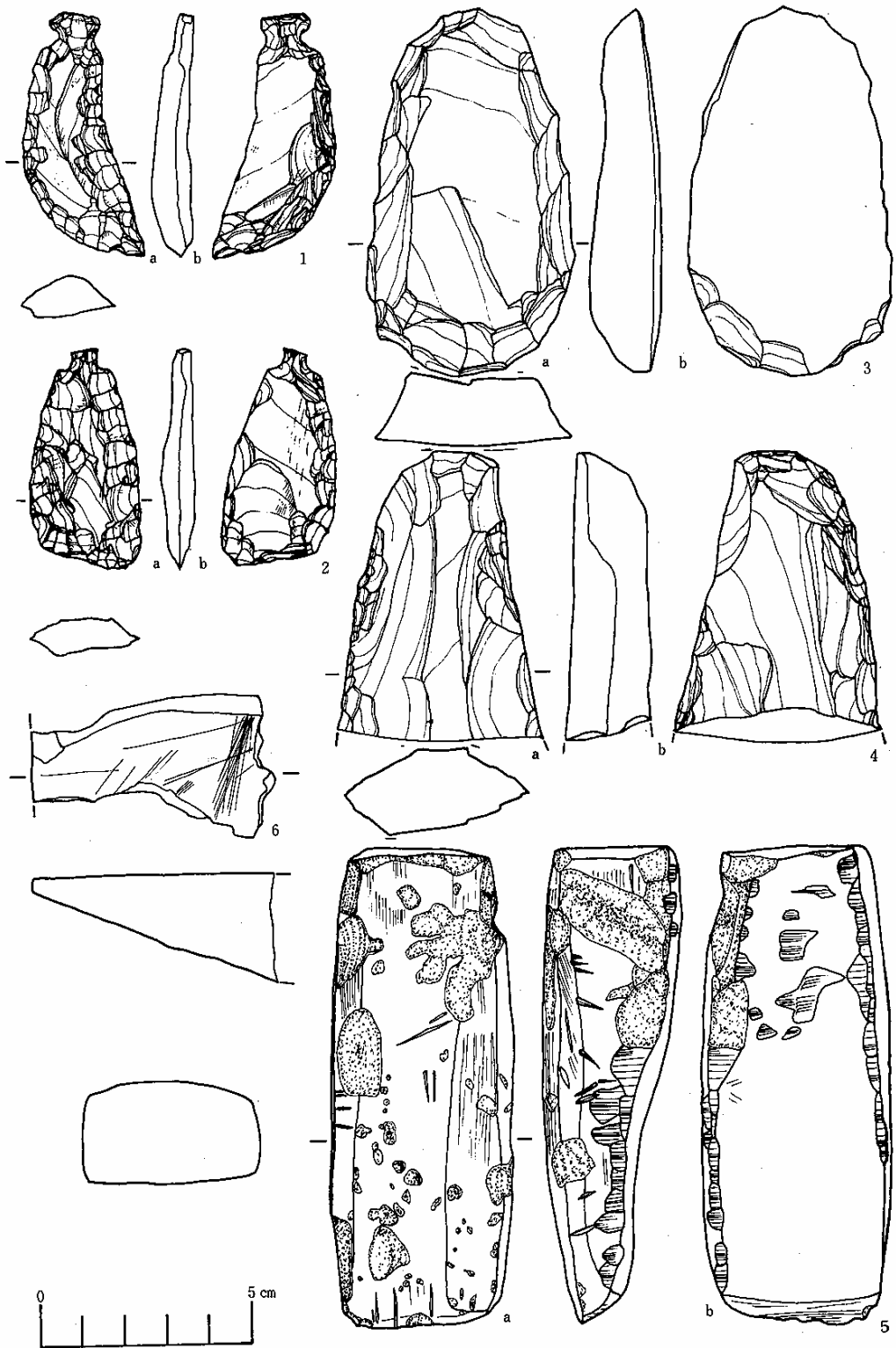
### (6) 石器

石器はⅢ区第Ⅲ層から出土している。石匙2点、筥状石器2点、砥石2点の合計6点出土している。

石匙（第11図1・2） 両者とも完形である。1はa面の周縁と、b面の縁辺に、2はa面の全面と、b面の周縁に調整剥離が加えられている。横断面形は両者とも凸レンズ状を呈している。

筥状石器（第11図3・4） 完形のもの（3）と半分欠損しているもの（4）がある。3はa面の周縁とb面の縁辺に、4は両面の周縁に調整剥離が認められる。横断面形は3は台形状、4は凸レンズ状を呈している。

砥石（第11図5・6） 完形のもの（5）と部分だけのもの（6）がある。6は全面に使用痕が認められる。5は片面にのみ使用痕が認められる。横断面形は長方形をなす（6）。



第11图 石器

土師器・須恵器・赤焼器・灰釉陶器

番号	種類	層位	残存	分類	登録番号
1	土師器 坏	V区一第II層	1/2	A	14
2	〃	〃	1/2	B II	18
3	〃	〃	1/2		12
4	〃	〃	1/2		15
5	〃	〃	1/2	B I	59
6	土師器器台	V区一第I層	2/3		19
7	土師器甕	V区一X	2/3		21
8	〃	〃	1/2		20
9	〃	〃	1/2		58
10	須恵器 坏	〃	1/2		11
11	〃	V区一第II層	1/2		22
12	〃	〃	1/2		23
13	〃	〃	1/2		24
14	〃	〃	2/3		27
15	〃	V区一X	1/2		26
16	須恵器 甕	V区一第II層	2/3		28
17	赤焼土器 坏	〃	1/2		17
18	〃	〃	2/3		13
19	灰釉陶器 坏	〃	口縁部		68

石器 計測表

番号	名称	層位	計測値 (cm)			登録番号
			長さ	幅	厚さ	
1	石匙(縦形)	III区一X	5.85	2.42	0.95	1
2	石匙(縦形)	III区一第III層	5.25	2.65	0.95	2
3	石筥状石器	III区一X				3
4	〃	III区一第III層	8.75	4.88	1.60	4
5	砥石	V区一第II層				5
6	〃	〃	11.36	4.45	3.24	6

以上のうち1～4の石器は、縄文時代のもと考えられるが、5・6の石器の所属時期は不明である。

### 3 出土土器の分類と年代

出土土器には縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器がある。ここでは、出土数が多くしかも図示可能なものが多かった土師器について分類を行う。なお、縄文土器については、すでにその所属時期を明らかにしているのでここでは省く。

#### (1) 出土土器の分類

##### 土師器

坏・器台・甕が出土している。

**坏** 製作に際し、ロクロを使用していないもの(A類)と使用しているもの(B類)がある。

(坏A類) 製作に際しロクロを使用しないものである。器形は体部下半が外傾し、その上半で僅かにふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が外傾するもの、体部にふくらみをもって立ち上がり、口縁部が外傾するものがある。前者は平底であるが、後者は欠損のため不明である。両者とも口縁部外面は横ナデ、内面は口縁部から体部にかけてヘラミガキ、黒色処理が施されているが、前者は体部下端にヘラケズリが、後者は体部下端にヘラケズリ、ヘラミガキが

認められる。

(坏B類) 製作に際し、ロクロを使用しているもので、底部の切り離しはすべて回転糸切り技法によるものである。再調整の加えられているもの(BI類)と加えられていないもの(BII類)がある。BI類は体部下半から底部にかけて、あるいは底部周縁に手持ヘラケズリが加えられている。BI・BII類ともに器形は体部に僅かにふくらみをもって立ち上がり、口縁部が外傾する。BI・BII類の大部分は外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されているが、BI類の中に内外面ヘラミガキ、黒色処理が施されているものがある。

**甕** 製作に際し、ロクロを使用していないもの(A類)とロクロを使用しているもの(B類)がある。A類は体部下半から底部あるいは口縁部から体部にかけて欠損しているため全体の器形は不明である。口縁部外反あるいは外傾しており、口縁部端部は角ばっているもの、丸くおさまるものがある。口縁部の外反するものは口縁部内外面に横ナデ、体部内面にはナデが施されている。

B類は口縁部から体部にかけての破片であるため、全体の器形は不明である。口縁部は外反しその端部が上方を向いて丸くおさまる。口縁部から体部にかけて内外面ともロクロ調整のもの、口縁部内外面がロクロ調整で、体部内面がヘラミガキ、黒色処理が施されているものがある。

### 須恵器

坏・甕がある。

**坏** 器形は、体部にややふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が直線的に外傾する。底部の切り離しは回転ヘラ切り技法によるものが多く、中には再調整を受けているため不明なものもある。

**甕** 体部から口縁部にかけてのもので、全体の器形は不明である。口縁部は外反する。頸部から体部にかけて一部ナデが施されている。

### 赤焼土器

坏が出土している。

**坏** 器高の低いもので、小形である。器形は体部で立ち上がり、口縁が直線的に外傾する。再調整は認められない。

## (2)出土土器の年代

ここでは、土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉陶器についてその年代を明らかにしておきたい。これらの分類された土器について共伴関係をみると第1表のようになる。この表から分かるように共伴関係が明らかなのは、土師器坏・甕の一部に限られる。

出土土器 遺構	土 師 器				
	坏		甕		
	A	BI	BII	A	B
第1住			○	○	
第2住	○				○

第 1 表

土師器坏は、製作技法の違いから二つに大別できた。すなわち、ロクロを使用していないものとロクロを使用しているものに分けられる。前者は①器形は、体部に僅かにふくらみをもって立ち上がり、口縁部が外傾する。②平底③器高は低い④器面調整として口縁部外面に横ナデ、あるいは体部下端にヘラケズリ、ヘラミガキ、内面はヘラミガキ、黒色処理という特徴をもつ。このような特徴をもつ土器は、天狗堂遺跡（佐藤、手塚：1978）、糠塚遺跡（小井川、手塚：1978）出土土器に類似していることから、国分寺下層式に比定される。後者は県内各地に類例がみられ、製作に際しロクロを使用していることから表杉ノ入式に比定される。

器台は製作に際しロクロを使用せず、受部の中央部に稜が認められるしかも脚部は中実という特徴をもつ。また、器面調整として横ナデが施されている。土師器坏との共伴関係は認められないが、本遺跡出土土師器坏の所属時期が国分寺下層式、表杉ノ入式であることから、そのいずれかに伴うものと思われる。

土師器甕は、ロクロ使用していないものとロクロを使用しているものがある。大部分の甕は土師器坏との共伴関係が認められないが、第1号住居跡で土師器坏との共伴関係が認められる1例（ロクロ不使用）及びロクロ使用のものについては、表杉ノ入式に比定される。その他の甕については、本遺跡出土土師器坏を考慮すると、国分寺下層式、表杉ノ入式のいずれかに伴う可能性がある。

須恵器坏は、底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの、再調整のため不明なものがある。土師器坏との共伴関係は認められないが、製作技法及び本遺跡出土土師器坏などを考慮すると、ほぼ同年代の可能性はある。

須恵器甕は、口縁部から体部にかけての破片であり、1例出土している。土師器坏との共伴関係が明らかでないことから、その所属時期は不明である。

赤焼土器坏は、器高が低く、しかも小形のものであり再調整は認められない。植田前遺跡（加藤：1981）、明神脇遺跡（澁谷：1980）のものに類似し、その所属年代は12世紀頃とされている。

灰釉陶器は、碗口縁部破片の1例だけである。灰釉陶器は多賀城政庁跡（多賀城調所：1980）、安久東遺跡（土岐山：1980）に類例があり、その所属年代は平安時代と考えられる。

## 4 住居跡の年代

第1.2号住居跡からは表杉ノ入式に比定される土師器が出土していることから、住居跡の年代はともに平安時代に所属するものと考えられる。

なお、第2号住居跡は貼床下で周溝が認められたことから一度拡張している。拡張前の住居跡に伴う遺物は認められなかったが、拡張後の貼床から国分寺下層式に比定される土師器が出土していること、ロクロを使用した土師器が認められないことから、拡張前の住居跡の年代は

平安時代かあるいはそれより若干さかのぼる可能性がある。

## V 中世以降の遺構と遺物

ここでは、まず館跡の規模と構造について述べ、次に館跡に関する伝承についてまとめてみることにする。最後に今回の調査で発見された遺構及び出土遺物について述べ、遺構の性格や年代を明らかにしていきたい。なお、出土遺物については図示可能なものを取り上げ、その他の遺物については破片集計表にまとめた。

### 1 館跡の規模と構造

すでに述べたように館山館跡は舌状に突き出した丘陵先端部に立地している。先端部は標高約82mの頂部を基部として沢や谷によって開析されたため放射状に幾つもの尾根が形成されている。このような地形の中で最高所にある項部及びその斜面、西側、南東に延びる尾根の先端部の頂部及びその斜面に遺構が認められる。

最高所にある項部には2つの平場が、またその南斜面には段状に連なる平場が多くみられ、さらに門跡・土塁・空掘・堀切等も認められる。

また、最高所を基部として西方に延びる尾根を西へ進むと天神沢と松本沢に面した丘陵先端部に至り、その項部や斜面には段状に連なる平場が認められる。

一方、南東に延びる尾根を進むと沢と沢との間にその尾根に連なる丘陵端部が3方に延び、その項部や斜面には段状に連なる平場が認められる。

以上のように、館山館跡は最高所にある項部及びその斜面に認められる遺構を中心にして、さらに、沢を挟んで西方及び南東に延びる丘陵先端部の項部や斜面に遺構が認められる。また、後者は堀切によって前者と分断されている。そこで、ここでは前者を中央郭、後者を西郭、東郭と呼ぶことにする。

**中央郭** - 標高約82mの項部に南北に細長い平場（A平場）がある。A平場は南北約60×東西約25mの規模で、細長くゆがんだ方形を呈し約1125 m<sup>2</sup>の広さがある。平場は全体として南へ緩やかに傾斜している。東から南にかけての眺望が良く、眼下に近くは石巻街道及び松島町根廻周辺の集落が、遠くは松島湾や鳴瀬町周辺にある小高い丘陵を望むことができる。A平場の北側には一段低い平場（B平場）がある。B平場はA平場の北側・南側にある幅約1mの通路によって接続される。また、B平場の南側には幅1～6mの直線状に延びる通路があり、これはA平場の南側にある通路に鍵の手状に連絡する。B平場は南北約134×東西18mの規模で、北



側は南北に細長くゆがんだ方形を呈し、西側から南側にかけては帯状にA平場を取り巻く。広さは約1100㎡である。A平場との比高は約2～3mで、平場はほぼ平坦である。A・B平場の四方は尾根あるいは急斜面である。B平場に連なる尾根はその北・西・南側に設けられた堀切によって分断される。堀切は長さ約8～15×幅約3～5（上端）×深さ約2～3mの規模である。

一方、A・B平場下に平行して南方に延びる2つの尾根があり、その頂部や斜面には帯状や三日月形を呈した段状に連なる平場や門跡・土塁・空堀などが認められる。この2つの尾根との間には反町沢に通じる細長い沢があり、その背後に以上の遺構が配置されている。すなわち、沢奥に門跡と思われる箇所があり、それを中心にしてその西側隣りには段状に連なる平場や土塁が、東側隣りには土塁及びそれに平行して設けられた空堀が認められる。さらに、門跡の後方からA・B平場に至るまでの間に段状に連なる平場が設けられている。以上の構造から、これらの遺構は防禦を兼ね備えた通路としての機能が考えられる。同時に反町沢に通じる細長い沢を通して中央郭に出入したものと推定される。

なお、A平場の東側に連なる尾根の頂部・斜面にも段状に連なる平場が認められる。これらは、中央郭南方に延びる尾根上の段状に連なる平場に連絡することから、中央郭への通路としての機能が考えられる。

**西郭** - 中央郭B平場西側にある堀切から尾根伝いに西へ約250m進むと西郭に至る。西郭の最高所（標高56m）に平場（A平場）があり、その南西下にさらに平場が段状に続いている（B～G平場）。A平場は長軸10×短軸7mの不正方形を呈し約53㎡の広さである。B～G平場は大部分が三日月形を呈し、中でも最下位にあるG平場が最も広い。西郭の南縁沿いに各平場を連絡する通路状遺構があることから、各平場及び通路状遺構を通して最高所にあるA平場へ至ったと思われる。A平場の東側は堀切によって分断される。堀切は長さ約7×幅約5×深さ約1～2mの規模である。また、最下位にあるG平場とその南約25mにある標高45mの平坦地間には沢状の落ち込みがみられ、これはあたかも堀切の様相を呈している。西郭の3方は急斜面である。その西側、東側は比高約45mの天神沢、松本沢に接する。

また、西郭に連なる尾根の途中に平場がある。さらに、松本沢の東側に派生する尾根上にも平場が設けられている。前者と後者の平場は長軸13～16×短軸4～6mの規模で、不正楕円形を呈し、互いに松本沢を挟んで対峙する位置に配置される。

したがって、西郭及び尾根の頂部にみられる平場は天神沢・松本沢を意識して配置されていると言える。

**東郭** - 中央部B平場の南側に連なる尾根を南東に約200m進んだ地点で尾根は3方に分かれる。この3方の尾根の先端部（頂部・斜面）に段状に連なる平場が認められる。ここでは、3方の

尾根を便宜上西側から南尾根、南東尾根、東尾根とし、各尾根上に認められる遺構について述べることにする。

南尾根の最高所（標高 40m）に平場（最高所平場）があり、さらにその南方下に段状に連なる平場が突き出すように設けられている。最高所平場は長軸約 40×短軸 25m の規模で、南北に長い不正楕円形を呈し約 740 m<sup>2</sup>の広さがある。その他の平場は大部分が三日月形を呈しているが中には帯状に細長い形を呈しているものもある。また、最高所平場の東側に数段の平場が認められるが、これらは沢に面し最高所平場に近い位置にあることなどから、南郭への入口部分とも考えられる。周辺は急斜面であり、その西側・東側に比高約 30m の反町沢がある。反町沢は南尾根をU字形に取り囲むように巡っている。

南東尾根の最高所（標高 54m）に平場（最高所平場）があり、その南西・東方下に段状に連なる平場が設けられている。最高所平場は長軸約 35×短軸約 15m の規模で、不正楕円形を呈し約 620 m<sup>2</sup>の広さである。形態は南尾根の最高所平場に類似しているが、規模はそれより小さい。その他の平場は最高所平場を中心に東西に延び、最高所平場に近い平場は三日月形を呈すが、最高所平場から遠ざかるにつれ先細りの傾向を示し帯状に長い形を呈している。南東尾根の南側にも遺構の存在が予想されるが、現在宅地となっているため不明である。東側・西側は急斜面であり、その西側・東側は反町沢・根崎沢に面している。なお、根崎沢に面する東側斜面に段状の平場が認められる。と同時に次に述べる東尾根の斜面、根崎沢に面した南側斜面にも同様の遺構が認められ、これらの遺構は根崎沢を挟んで対峙した位置に配置されている。

東尾根の頂部（標高 45～48m）に2つの狭い平場がある。長軸 3～5×短軸 2～4m の規模で不正楕円形を呈している。これらの平場下には東に細長い長楕円形の平場がある。また、東尾根の基部に段状に連なる平場が設けられている。これらの平場は三日月形を呈し、下位にある平場ほど規模が大きくなる。

以上の事から南尾根と南東尾根に配置される遺構は反町沢を、南東尾根と東尾根に配置される遺構は根崎沢を意識して設けられていると言える。

以上、各郭の規模と構造について説明してきたが、次のようなことが考えられる。

1. 館跡の範囲は遺構の配置から、西側は天神沢、南側は反町周辺にみられる沖積地、東側は東北本線、北側は山王前沢で画された丘陵先端部の東西約 860×南北約 650m である。
2. 館跡は自然地形を巧みに利用して中央郭・西郭・東郭を配置している。
3. 中央郭は館跡の最高所である頂部及びその斜面に各遺構が認められ、中でもA・B平場はその配置・規模・形態などの特徴から、館の中核としての性格をもっている。
4. 西郭・東郭は中央郭の前面、両脇に配置され、しかも沢を意識した遺構の配置が認められることから、沢に対する防禦を目的とし、さらに物見としての機能を果たしていたも

のと考えられる。

## 2 伝承

館山館跡に関する記録についてみると、紫神社の「風土記書上控」「赤間家系譜」があると指摘されている（松島町誌編委会：1973）。また、根廻村の「風土記御用書出」中の村名の由来についての説明の中で若干触れられている。「仙台領古城書立之覚」「仙台領古城書上」には記載がみられないので、ここでは松島町誌を参考にしてまとめてみることにする。

根廻村の「風土記御用書出」の村名ニ付由来の条に

### 1. 村名ニ付由来

当村ハ高城本郷の末郷ニ而高城の西北ニ当りて古館の根方に帯たる村に御座候故根廻ト称来候由申伝候事とある。これによると高城の西北に古館があったことが知られる。これだけの記録だけでは不明確な点が多いが、現在の高城及び根廻地区の位置、それに高城から西北を望んで一致する館としては館山館跡しか該当しない。したがって、古館は館山館跡をさすものと考えられる。

一方、紫神社の「風土記書上控」では、反町に神館という館があったことが知られ、次の様に記されている。

### 1. 八幡社

#### 1 小名 反町

往古誰勸請と申義相知不申侯得共往古和泉三郎当村神館御居館の節氏神ニ脚祭相成古館の辺ニ御座候由何年の頃当地に引移候哉相知不申候事

また、「赤間家系譜」では、

同（佐久間）佐近太夫

正中二年より京都内裏勤仕、任従五位赤間佐近太夫ト号ス。後奥州宮城郡反町館主佐工門尉仕反町住家中。

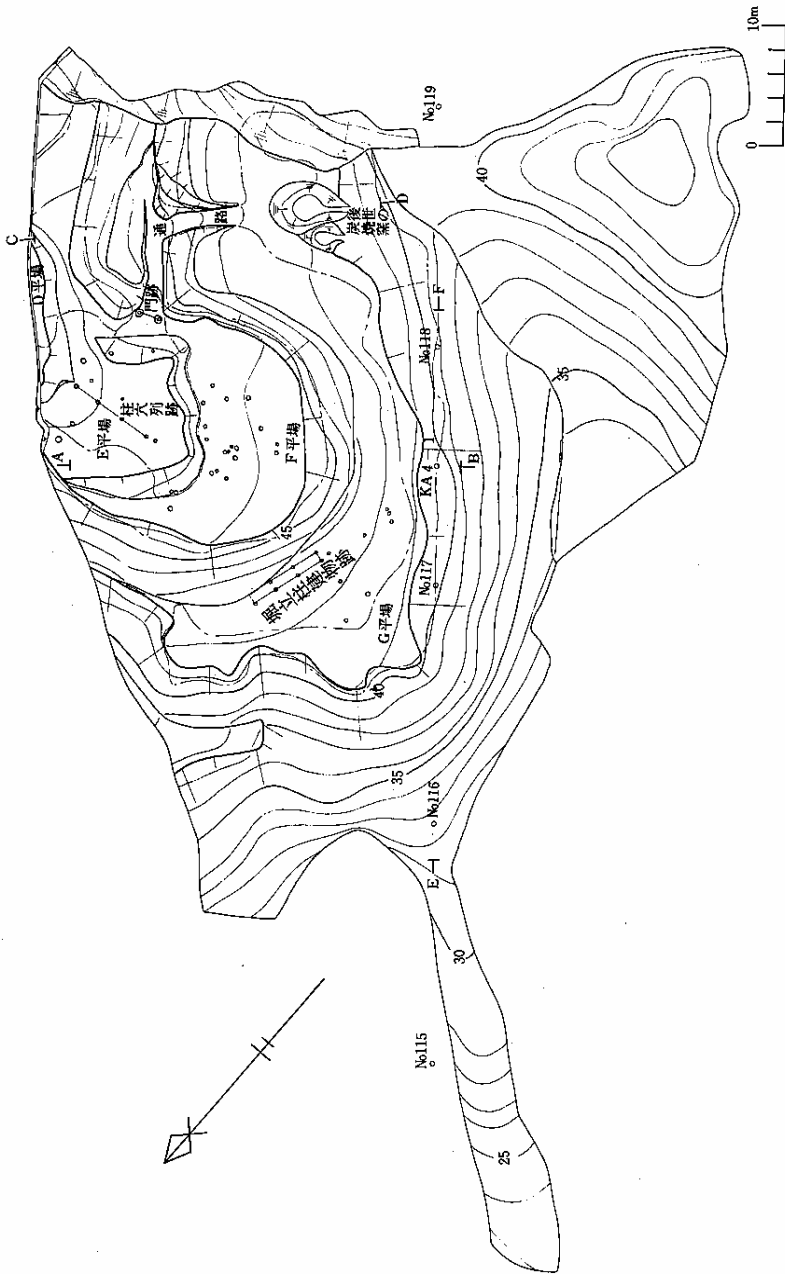
とある。現在反町に館山館以外みられないことから2つの記録は根廻地区の古館の伝承をつたえるものかもしれない。

注）松島町誌では古館・神館については館山館跡と同一ものとしてとらえているが、反町館については、「赤間家系譜」に疑問な点がきわめて多いことから館山館跡と同一かどうかは不明であるとしている。

## 3 発見された遺構と遺物

### (1) 西郭で発見された遺構

遺構としては、掘立柱建物跡1棟、柱穴列跡1箇所、門跡1箇所、通路1条、ピット群が各平場から検出されている。



第13図 西郭の各平場の状況

ここでは、各平場の規模・平面形・整地の範囲・遺構について平場毎に述べていく。なお、各平場からピット群が検出されているが、その配列に規則性はみられず組み合わないので各ピットの規模については表にまとめた。

### 平場の状況と遺構 (第15図)

平場については、別項1館跡の規模と構造で使用した名称を使い、路線内で上位にある平場から順に述べていく、なお、D平場は調査範囲が狭く、しかも遺構は検出されていないことから説明は省くこととする。

**E平場** - 長軸15×短軸13mの規模で約170㎡の面積を有し、北西側が南西方向に突き出す鍵状を呈している。平場の北西側はほぼ平坦であるが、南東側は南にやや傾斜する。北西端及び南側に整地がみられ、その他は地山を削り出して平坦面を形成している。整地は特に南東側南端が厚く積まれ、厚い所で約80cmある。標高は48mである。

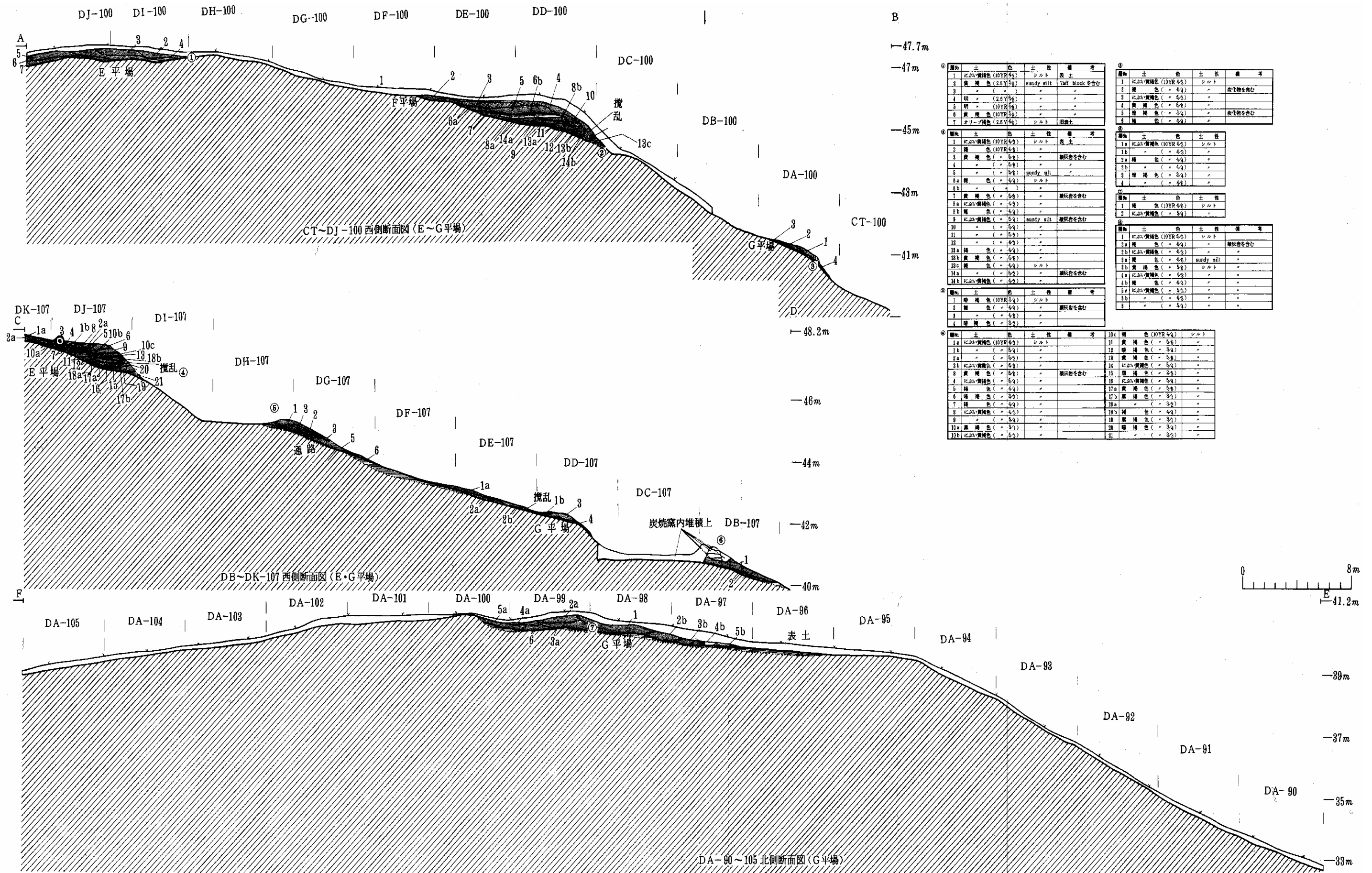
平場のほぼ中央で柱穴列跡が1箇所検出されている。確認面は地山面である。ほぼ東西方向に4個のピットが1列に配置されている。柱間寸法は2.3m(7尺6寸)あるいは2.4m(7尺9寸)である。柱穴の掘り方は20~30cmの円形を呈している。

**F平場** - 長軸20×短軸18mの規模で約218㎡の面積を有し、その平面形は南西方向に突き出した三日月形を呈している。平場の南西側が最も広く、ほぼ平坦である。平場のほぼ全域にわたって整地がみられる。整地は特に縁辺部が厚く積まれ厚い所で約80cmである。標高は47mである。なお、平場の南東側整地層上面で古瀬戸の深皿が出土している。

**G平場** - 長軸45×短軸19mの規模で約423㎡の面積を有し、その平面形は南西方向に突き出した凹形を呈している。平場の西側ではその西縁と東側との比高が約2mあり、西側に向かって緩やかに傾斜している。平場の南側ではその南縁と北側との比高が約4mあり、若干傾斜が急である。平場の縁辺に整地がみられ、他は地山を削り出して平坦面を形成している。整地は厚い所で約40cmある。標高は44mである。

平場の北西側、丁度F平場の下端に接するように掘立柱建物跡が1棟検出されている。確認面は地山面である。柱穴は7個検出されているが、建物の北端で1個認められず不足している。桁行3間、梁間1間の南北棟である。桁行の柱間寸法は2.1~2.2mと不ぞろいであるが、平均して2.16m(7尺1寸)になる。梁間の柱間寸法は0.85m(2尺8寸)である。柱穴の掘り方は径15~20cmで円形を呈している。

また、G平場の南東側ほぼ中央からE平場南端に接して直角に折れる通路と門跡締められた。通路の確認面は整地層上面及び地山面である。通路の上がり口はG平場南東側ほぼ中央にあり、幅1.5~2mで約25度の傾斜をなしている。その他は幅が1.2~1.6mで緩やかな傾斜面をなす、上がり口から門跡手前にかけての通路両脇は、地山を削り出して台形上にも上げて造って



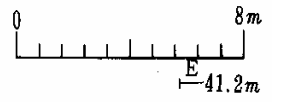
層別	土色	土性	備考
1	灰赤黄褐色 (10YR 4/5)	シルト	表土
2	黄褐色 (2.5Y 5/6)	sandy silt	Tabl block を含む
3	( )	( )	( )
4	明黄 (2.5Y 6/6)	( )	( )
5	黄褐色 (10YR 5/6)	( )	( )
6	黄褐色 (10YR 5/6)	( )	( )
7	オリーブ褐色 (2.5Y 4/6)	シルト	団粒土

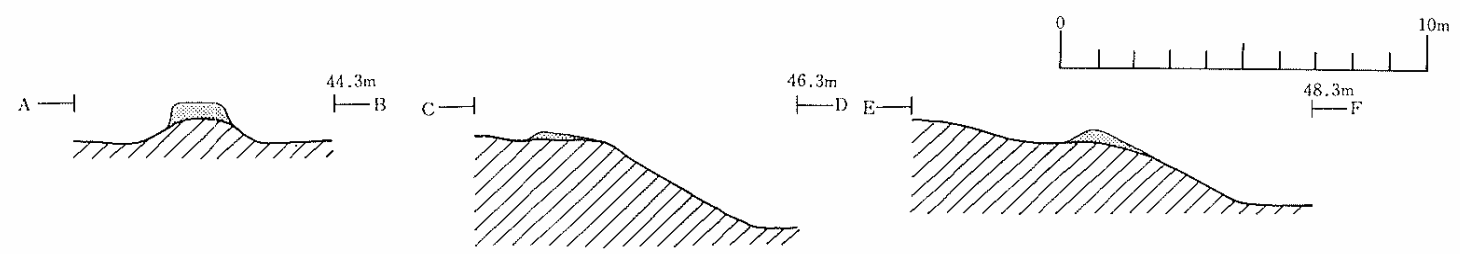
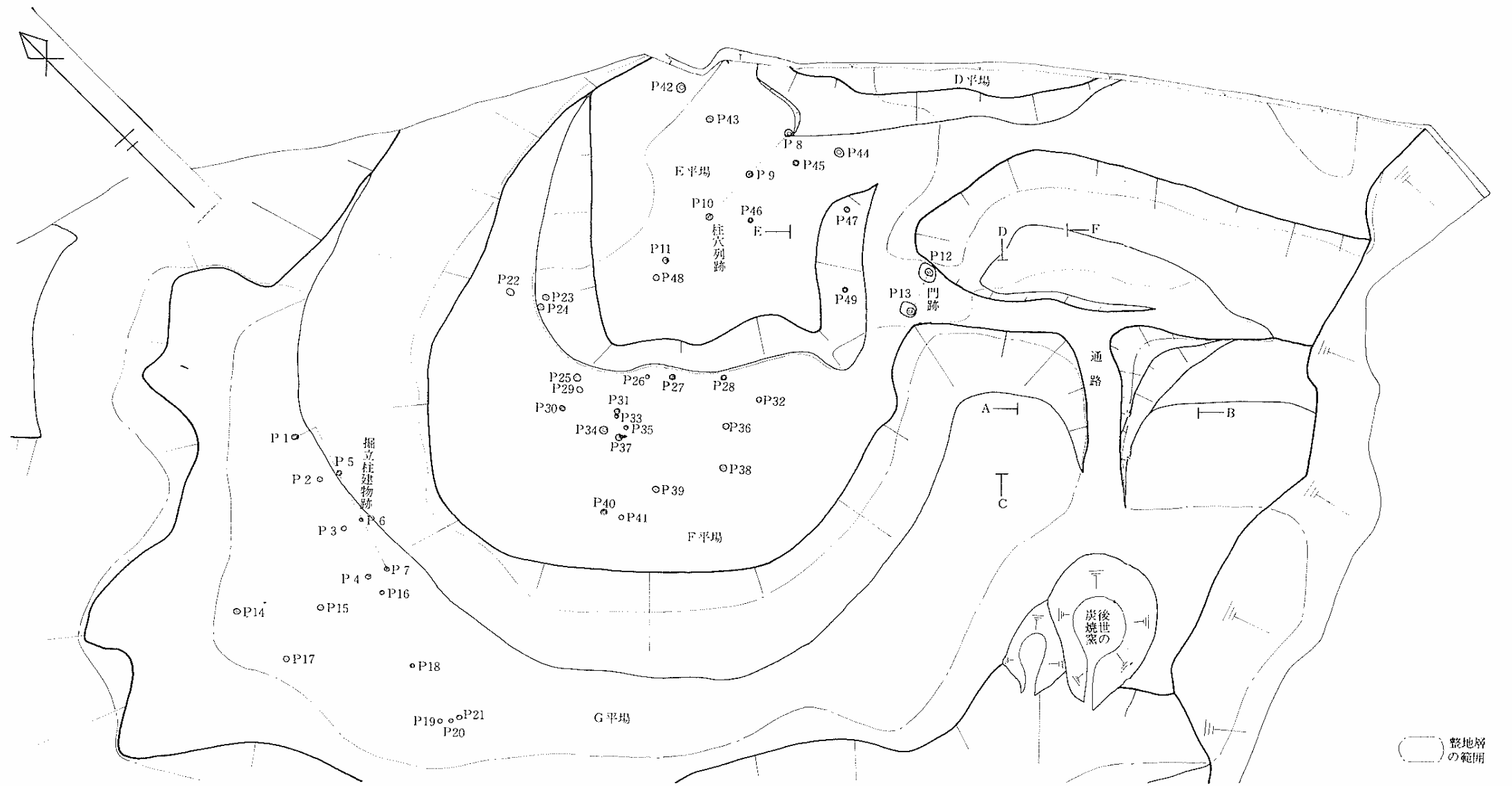
  

層別	土色	土性	備考
1	灰赤黄褐色 (10YR 4/5)	シルト	表土
2	黄褐色 ( )	( )	炭化物を含む
3	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
4	黄褐色 ( )	( )	( )
5	黄褐色 ( )	( )	炭化物を含む
6	黄褐色 ( )	( )	( )
7	( )	( )	( )

層別	土色	土性	備考
1	灰赤黄褐色 (10YR 4/5)	シルト	表土
2	黄褐色 ( )	( )	( )
3	黄褐色 ( )	( )	腐敗物を含む
4	( )	( )	( )
5	( )	( )	( )
6	黄褐色 ( )	( )	( )
7	黄褐色 ( )	( )	腐敗物を含む
8	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
9	灰赤黄褐色 ( )	sandy silt	腐敗物を含む
10	( )	( )	( )
11	( )	( )	( )
12	( )	( )	( )
13	黄褐色 ( )	( )	( )
14	黄褐色 ( )	( )	( )
15	黄褐色 ( )	( )	( )
16	灰赤黄褐色 ( )	シルト	( )
17	灰赤黄褐色 ( )	( )	腐敗物を含む
18	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
19	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
20	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
21	黄褐色 ( )	( )	( )
22	黄褐色 ( )	( )	( )
23	黄褐色 ( )	( )	( )
24	黄褐色 ( )	( )	( )
25	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
26	灰赤黄褐色 ( )	( )	( )
27	黄褐色 ( )	( )	( )
28	( )	( )	( )
29	黄褐色 ( )	( )	( )
30	黄褐色 ( )	( )	( )
31	( )	( )	( )





第15図 西郭に伴う遺構

いる。路面は削平せず旧地形を利用して整地を施し傾斜面を造り出している。整地の厚い所で約35cmある。門跡以降E平場にかけては南東側は整地を施し、北西側は地山を皿状に削って緩やかな傾斜をもつ路面を造り出している。したがって通路はE平場の南東側が高いため門跡付近でさらに直角に折れE平場に連絡される。

門跡はF平場の南東縁付近に位置する。確認面は地山面である。柱穴は2個検出され、その柱間寸法は1.9m（6尺3寸）である。柱穴の掘り方は70×60cmのほぼ方形を呈している。柱痕跡は長軸30～35cm、短軸25cmの円形あるいは楕円形を呈している。

### 柱穴列跡ピット

項目 \ pit No.	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>10</sub>	P <sub>11</sub>
形態・規模	円形： 33×42cm	円形： 24×27cm	円形： 22×27cm	円形： 24×30cm

### 堀立柱建物跡ピット

項目 \ pit No.	P <sub>1</sub>	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	P <sub>5</sub>	P <sub>6</sub>	P <sub>7</sub>
形態・規模	円形： 16×17cm	円形： 24×21cm	円形： 18×15cm	円形： 16×20cm	円形： 18×12cm	円形： 10×13cm	円形： 20×21cm

### 門跡ピット

項目 \ pit No.	P <sub>12</sub> (掘り方)	P <sub>12</sub> (注痕跡)	P <sub>13</sub> (掘り方)	P <sub>13</sub> (注痕跡)
形態・規模	不整形： 78×60cm	楕円形： 28×24×42cm	方形： 70×60cm	楕円形： 30×25×46cm

### ピット群

項目 \ pit No.	P <sub>14</sub>	P <sub>15</sub>	P <sub>16</sub>	P <sub>17</sub>	P <sub>18</sub>	P <sub>19</sub>	P <sub>20</sub>
形態・規模	円形： 16×24×9cm	円形： 18×5cm	円形： 10×12cm	楕円形： 24×16×29cm	楕円形： 18×22×?cm	円形： 19×3cm	楕円形： 22×14×24cm
P <sub>21</sub>	P <sub>22</sub>	P <sub>23</sub>	P <sub>24</sub>	P <sub>25</sub>	P <sub>26</sub>	P <sub>27</sub>	P <sub>28</sub>
円形： 24×9cm	円形： 25×10cm	円形： 20×5cm	円形： 20×5cm	円形： 30×23cm	円形： 10×5cm	楕円形： 20×24×19cm	円形： 15×18cm
P <sub>29</sub>	P <sub>30</sub>	P <sub>31</sub>	P <sub>32</sub>	P <sub>33</sub>	P <sub>34</sub>	P <sub>35</sub>	P <sub>36</sub>
円形： 18×7cm	円形： 14×9cm	楕円形： 24×18cm	円形： 16×15cm	円形： 18×7cm	楕円形： 32×36×9cm	円形： 14×13cm	円形： 20×26cm
P <sub>37</sub>	P <sub>38</sub>	P <sub>39</sub>	P <sub>40</sub>	P <sub>41</sub>	P <sub>42</sub>	P <sub>43</sub>	P <sub>44</sub>
円形： 20×22cm	円形： 25×18cm	円形： 20×17cm	円形： 20×25cm	円形： 15×19cm	円形： 30×10cm	円形： 16×8cm	円形： 44×15cm
P <sub>45</sub>	P <sub>46</sub>	P <sub>47</sub>	P <sub>48</sub>	P <sub>49</sub>			
円形： 19×14cm	楕円形： 22×20×5cm	楕円形： 24×20×8cm	円形： 18×19cm	円形： 25×22cm			

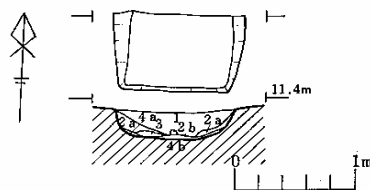


## (2) その他の遺構

ここで扱う遺構としては土壇1基、通路状遺構6条がある。通路状遺構はいずれも地山を削って造られている。

### 土壇とその出土遺物 (第16図)

土壇はV区の竪穴住居跡から西へ約2m離れた位置にある。確認面は地山(岩盤)漸移層上面である。土壇の北側が削平されているため、規模・平面形は不明である。壁の立ち上がりは、緩やかでその上方で外傾気味になる。底面は平坦である。堆積土は4層認められる。堆積状況は将棋倒し状である。堆積土から、土師器片1点、近世以降と思われる陶器片1点が出土している。



原No	土色	土性	備考
1	黒褐色(10YR 2/2)	シルト	
2a	褐色(5Y 2/2)	〃	わずかに木炭を含む
2b	黒色(5Y 1/1)	〃	木炭
3	黒褐色(5Y 2/2)	シルト	
4a	〃(5Y 2/2)	〃	
4b	黒色(5Y 1/1)	〃	木炭

第16図 土壇

### 通路状遺構 (第17図)

通路状遺構は、I・II区で各1条、III・IV区で各2条検出されている。ここでは、I区から順に番号を付し述べることにする。なお、これらの遺構から出土した遺物はない。

通路状遺構1-I区の東側斜面は全般に急斜面であるが、部分的に緩斜面と舌状に延びる尾根があり、通路状遺構は尾根の先端部に位置する。地表下約10~20cmの地山(岩盤)面で確認された。尾根の先端部沿いに弓状に上がり、途中で断ち切れる。断面は、皿状を呈している。堆積土は、表土1層である。

通路状遺構2-II区の丘陵尾根上に位置する。地表下約10~20cmの地山(岩盤)面で確認された。尾根上を僅かにカーブを描きながら、北西-南東方向に走る。断面は浅い皿状を呈している。堆積土は表土1層である。

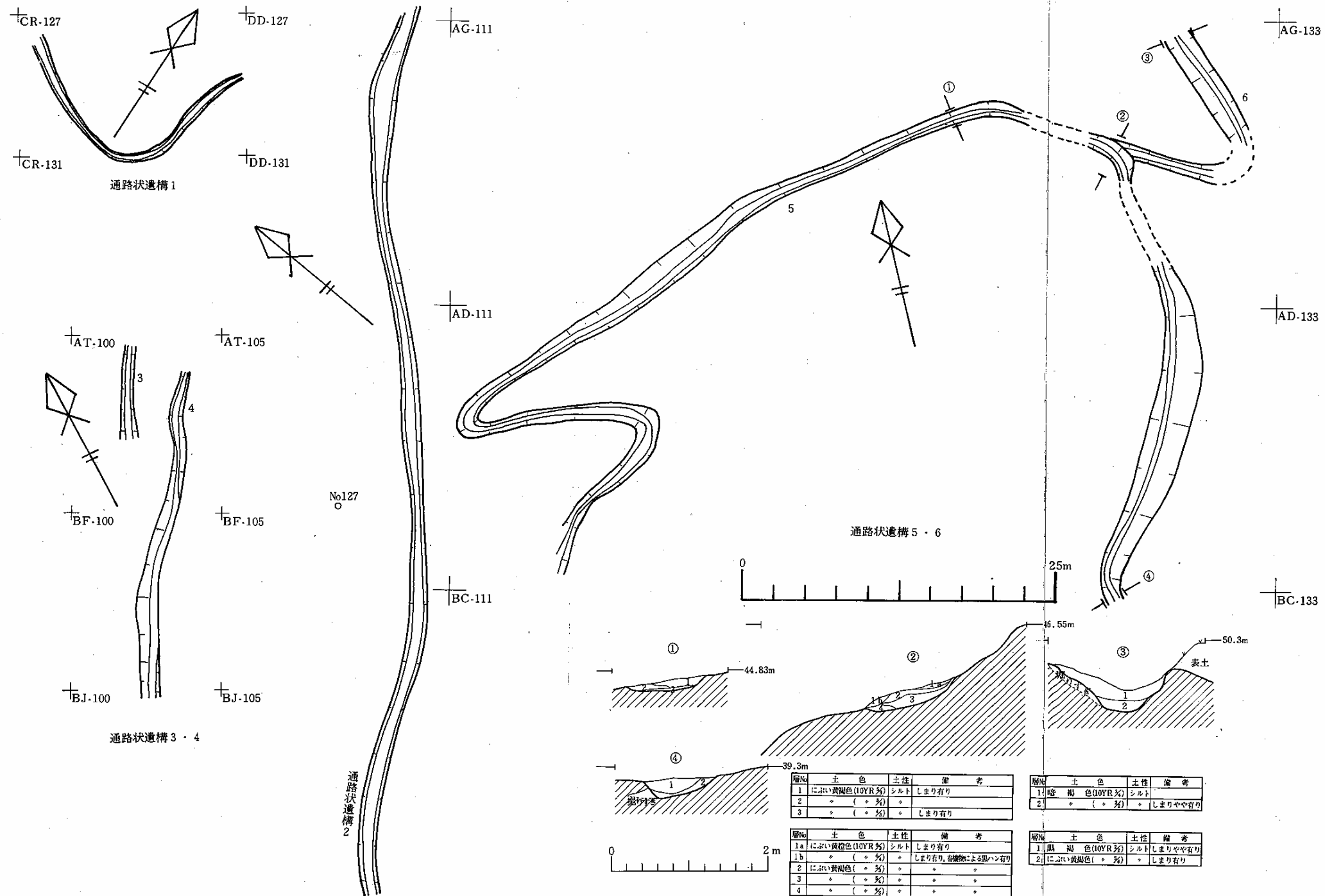
通路状遺構3・4-III区の丘陵尾根上に位置する。両者とも地表下約10~20cmの地山(岩盤)面で確認した。3は、長さが7.5mと短く、北東にほぼ真直ぐに走る。4は、長さが27mで3と平行して若干カーブを描きながら北東に走る。断面は、ともにU字形を呈す。堆積土は表土1層である。

通路状遺構5・6-IV区の中央部に位置する。両者とも地表下10~30cmの地山(岩盤)及び漸移層上面で確認された。5は、南西斜面からS字状のカーブを描きながら尾根上に至り、さらに東に進みながらIV区のほぼ中央で6と交叉する。その後は南斜面へと下り、途中で切れる。6は5との交叉地点から東側にU字状のカーブを描きながら路線北側へと延びる。断面形は地点によって浅い皿状・U字状を呈す。堆積土は2~4層認められる。

## (3) 発見された遺物と年代

ここでは、各遺構、基本層位中から出土した遺物について述べる。遺物として陶器・磁器・金属製品・古銭がある。

### 陶器



層No	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐色(OYR系)	シルト	しまり有り
2	*( * 系)	*	*
3	*( * 系)	*	しまり有り

層No	土色	土性	備考
1	暗褐色(OYR系)	シルト	しまりや有り
2	*( * 系)	*	しまりや有り

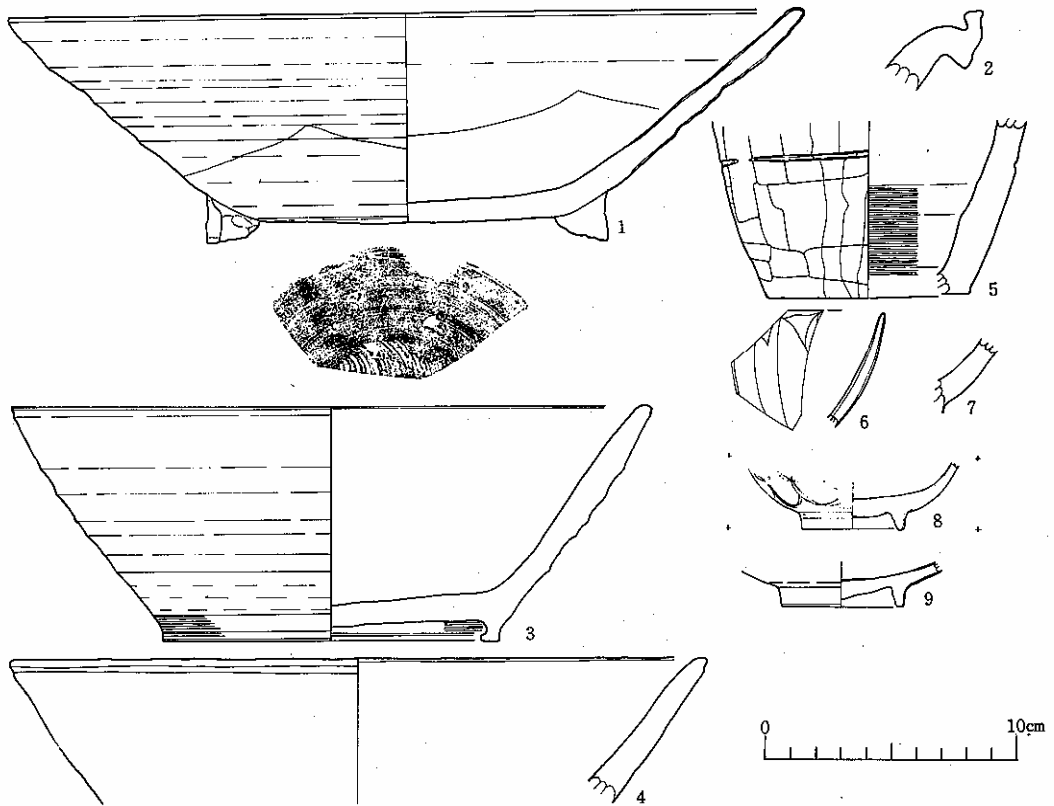
層No	土色	土性	備考
1a	にぶい黄褐色(OYR系)	シルト	しまり有り
1b	*( * 系)	*	しまり有り、石礫物による黒ハシ有り
2	にぶい黄褐色( * 系)	*	*
3	*( * 系)	*	*
4	*( * 系)	*	*

第17図 通路状遺構・IV区通路状遺構断面図

深皿・甕・播鉢・壺がある。深皿は西郭E平場南東側整地層上面から、その他はV区の第II層から出土している。

**深皿** (第18図1)

底部に3～4つの脚をもつ深皿である。製作に際し、ロクロを使用している。器形はやや下がり気味の底部を有し体部から口縁部にかけて外傾する。口縁端部は丸くおさまる。底部の切り離しは回転糸切り技法による。再調整として体部下端から底部周縁にかけて回転ヘラケズリが施されている。脚の底面はほぼ平坦である。また、口縁部から体部内外面に灰釉が施されている。灰釉は淡い黄緑色を呈している。



番号	種類	層位	残存	登録番号
1	古瀬戸深皿	V区-第II層	1/2	20
2	甕	〃	1/2	34
3	播鉢(高台付)	〃	1/2	32
4	播鉢	〃	1/2	33
5	三筋壺	〃	1/2	35
6	青磁碗	〃	口縁部	54
7	青磁碗(高台付)	〃	体部	65
8	伊万里(茶碗)	〃	1/2	79
9	青磁茶碗	〃	1/2	80

第18図 陶器・磁器

以上の様な特徴をもつ深皿は類例は少ないが、灰釉、器形等から瀬戸のもので、その年代は15世紀後半である。

### **甕** (第18図2)

口縁部破片である。口縁帯を有し、受口状を呈する。断面形はN字状である。この様な形態をもつ甕は県内の窯跡からは発見されていない。県外産と考えられ、その年代は口縁部の特徴から13～14世紀のものである。

### **播鉢** (第18図3・4)

3は製作に際しロクロを使用している。やや下がり気味の底部をもち、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する台付の播鉢である。台部は体部下端から直線的に下がり、その端部は角ばっている。これは、焼成前胎土が柔らかい段階で上からの力が加えられたため、台部の先端部が変形したと考えられる。底部の切り離しは不明である。再調整として体部下端に回転ヘラケズリが、底部全面にヘラケズリが施されている。外面は口縁部から体部下半にかけてロクロ調整が認められる。内面は筋目が認められないが、磨滅しており使用痕が認められる。

このように台の付く播鉢は地元窯からは発見されていない。器形、台部の特徴から常滑産と考えられ、その年代は13世紀中頃である。

4は口縁部破片である。製作に際しロクロを使用していない。口縁部は外傾し、その端部は丸くおさまる。内外面ともに横ナデが施されている。筋目は施されていない。

類例は器形から観音沢遺跡(阿部・加藤：1980)等県内各地にみられるが、その年代は特定できない。

### **三筋壺** (第18図5)

底部から体部下半にかけての破片である。体部下半に一条の沈線が認められる。また、灰釉が認められ、灰釉は緑色で貫入が著しい。常滑産と考えられる。口縁部形態が不明であるため明確な年代は出せないが、沈線が単線であることから、その年代は平安時代末から鎌倉時代にかけてのものであろう。

## **磁器**

磁器には舶載磁器と国産磁器がある。

### **舶載磁器**

#### **青磁碗** (第18図6・7)

6は口縁部破片である。体部にややふくらみをもって立ちあがり、口縁部がやや外傾する碗である。外面には鎬蓮弁文が彫られている。釉は緑青色を呈し、比較的厚く施されている。胎土は白色を呈している。

7は体部下半の破片である。体部はふくらみをもって立ち上がる高台付き碗である。釉は灰

オリーブ色で貫入が著しく、非常に薄く施されている。胎土は黒ずんだ灰色を呈している。

6のような特徴をもつ青磁碗は、14～16世紀頃のものと考えられる。7についても、6とほぼ同じ時期頃である。

### 国産磁器

梁付茶碗と青磁碗がある。

#### 梁付茶碗 (第18図8)

底部から体部下半にかけての破片である。体部にふくらみをもって立ち上がる。台部は、やや外側に開き、その端部は丸くおさまる。体部外面には網目文が、台部外面には二重の圈文が施されている。内外面ともに釉が施され、釉は明緑色を呈している。胎土は白色である。

#### 青磁碗 (第18図9)

底部から体部下半にかけての破片である。台部はやや外側に開いて、その端部は角ばっている。台部内面を除く内外面に釉が施されている。釉は淡いオリーブ色を呈している。

8は胎土・文様などから伊万里産で、その年代は江戸初期～中期と考えられる。9は産地は不明であるが江戸時代のものと考えられる。

注) 出土遺物の考察にあたっては、深皿・播鉢3については愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏に、それ以外の遺物については東北歴史資料館考古研究科長藤沼邦彦氏の御教示を得た。

### 金属製品

腰刀と鉛玉が出土している。ともにV区第II層から出土している。

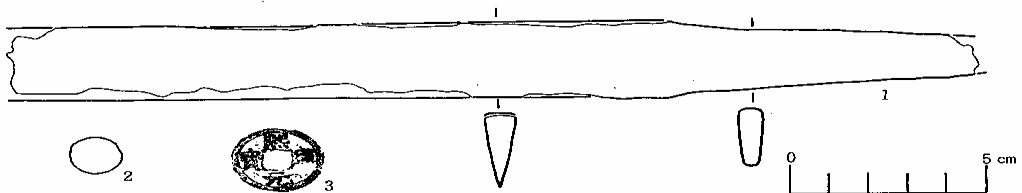
#### 腰刀 (第19図1)

切先、刃先、棟の一部、茎尻が欠損している。刀身に反りがなく平造りのものである。棟は平棟である。茎は茎尻に向かうにつれ細くなる。関の部分は、錆化が著しくはっきりしない。目釘孔は1箇所認められる。現存全長25cm、幅2.7cmである。年代は鎌倉時代～室町時代のものと思われる。

#### 鉛玉 (第19図2)

径1.2cmの球形を呈した鉛玉で鉄砲の玉である。東北地方における鉄砲の使用から、その年代は室町時代末～江戸時代のものと思われる。

#### 古銭 (第19図3)



第19図 金属製品・古銭

V区第Ⅱ層から、熙寧天寶（北宋錢初鑄年 1068 年）が 1 枚出土している。

## 4 遺構の年代と考察

遺構は西郭で発見された掘立柱建物跡・柱穴列跡・門跡・通路以外に通路状遺構と土壇がある。調査範囲が限定されているため各遺構の性格及び年代は決め難いのが現状ではあるが、ここでは、これらの遺構の特徴を踏まえながら、その性格及び年代を検討してみたい。

### (1) 西郭で発見された遺構

はじめに、各遺構の性格について触れてみたい。

掘立柱建物跡はG平場で1棟検出されている。建物跡は桁行3間（平均2.6m）×梁間1間（0.85m）の規模で梁間の寸法が狭いことから、居住用としては到底考えられない。県内で検出された建物跡の中にこのように梁間の柱間寸法が短いのは見あたらない。したがって、居住用としての建物跡とは考えられず、その位置が眺望の良いG平場の西側にあることなどから、見張り用の構築物とも考えられる。なお、この構築物の上部構造については、F平場と構築物の距離が3.5～4m、比高2.5mで、しかもF平場下端に沿って設けられていることを踏まえると、F平場の上端を利用した舞台状の上部構造も推定される。

柱穴列跡はE平場で1箇所検出された。柱間寸法が2.3m（7尺6寸）～2.4m（7尺9寸）で4個の柱穴が東西に1列認められた。柱穴列の位置が通路や門に近いこと、さらにE平場の北側がD平場に通じていることなどを踏まえると柵木列のような遮へい用の施設とも考えられる。

通路は直角に折れ曲がってG平場からE平場へと通ずる。また、通路の折口には門が付設されている。門は上部構造は不明であるが二本柱を使用した門である。門の後方にE平場があるが平場は幾分高くなっているため、門を通過してそのまますすぐ進むことはできない。

次に各遺構の年代について検討してみたい。

各遺構間に重複は認められないこと、整地は一時期に行なわれていることを踏まえると、以上の遺構はほぼ年代が近い時期に造られたものと考えられる。さらに、古瀬戸の深皿がE平場整地層上面で検出されていることから、15世紀後半には使用されていたと考えられるがその上・下限については不明である。

### (2) その他の遺構

土壇は1基検出されている。遺構の平面形・規模は不明であること、遺物として堆積土中から土師器片・近世以降と考えられる陶器片が混じっていることから、その性格は不明であり、その年代は近世以降と思われる。

通路状遺構は6条検出されている。沢から丘陵上にかけて認められるもの、尾根上に認めら

れるものがある。これらは地山を皿状あるいはU字状に掘りくぼめて造られている。したがって、現状が凹んでいること、館跡の遺構に連続していないことなどから、以前に使用されたかもしれないが後世に使用された通路としての性格が考えられる。

## 5 館跡について

館跡の規模と構造を知るために館跡全体の測量調査を行なっているが、今回の測量調査はこれまで確認された遺構を中心にその周辺に限定して実施しているため、徴地形の面で若干不備な点が指摘される。また、今回の調査は西郭の一部に限定されているため検出された遺構・遺物はともに少なく、館跡を構成する各郭間の新旧関係については不明である。

そこで、ここでは最初に今回の調査で明らかにされたことを踏まえて館跡の性格及び年代について述べ、次に館跡が存在した歴史的背景を知るために、館跡周辺の社会情勢の変遷を概観してみることにする。

### (1) 館跡の性格と年代

今回の発掘調査及び測量調査から指摘できることをまとめると次のようになる。

1 館跡はその最高所に中央郭が設けられ、さらに中央郭から2方の尾根伝いの丘陵端部に西郭・東郭が設けられている。

2 中央郭の頂部には他郭の平場をしのいで最も広い平場（A平場）が設けられている。このA平場からは四方に眺望が開け、特に東・北方面への視界が良好である。A平場に至るまで土塁・空堀・門・段状に連なる平場が設けられ、さらに中央郭の3方に堀切が認められ他郭と比較にならないほど防禦施設が整然としている。中央郭への通路は各遺構の配置や地形から南側の反町沢に通ずるものと推定される。

3 西郭・東郭は沖積地に面して配置され、平場は中央郭の平場より小規模である。したがって、これらの郭は物見としての機能が考えられる。

4 西郭で検出された遺構として掘立柱建物跡・柱穴列跡・門跡・通路等がある。これらの遺構間には重複関係が認められないことからほぼ年代が近い時期に造られたと考えられる。

5 西郭の整地層上面で15世紀後半に比定される古瀬戸の深皿が出土している。このことから西郭は少なくとも15世紀後半に使用されたと言える。しかし、その上下限については不明である。

6 館跡に直接伴う遺物ではないが、V区第Ⅱ層から三筋壺（平安末～鎌倉）、常滑産の播鉢（鎌倉中頃）等が出土している。このことからV区近辺に平安末から鎌倉中頃にかけての遺構が予想される。

したがって、館山館跡は背後に丘陵を控え、前方に細長く広がる沖積地を見下ろす急峻な地形に立地していること、中世に於いて重要な交通路であった東海道付近に位置していたであろうこと、館を構成する各郭の配置及び各施設から館が西・南・東に面して防禦体制をとっている

ることから沖積地を対象として支配し、さらに有事の際に機能を果たす館としての性格が考えられる。

館跡の年代については、調査範囲が狭く、しかも年代決定資料が少ないため、館がいつ頃構築されたものなのか不明である。現段階で言えることは、西郭が15世紀後半に使用されていたというだけである。

## (2) 歴史的背景

出土遺物間に平安末～鎌倉、室町時代という2時期が認められることは、西郭やV区第II層出土遺物から言えることである。

そこで、ここでは館山館跡に関する伝承や今回の調査だけでは不明な点が多いので、出土遺物から指摘できる時代に於いて館山館跡周辺が文献上どのように記されてきているのかを検討しながら、館山館跡がどのような歴史的背景のもとに成立し、かつ存在したものを考えてみることにする。

なお、文献として宮城県史中世編・水沢市史中世編・塩釜市史・松島町誌を参考にして述べることにする。

平安末から中世にかけて東海道が竹城保を通過していたことが知られる。東海道は文治の役(1189)、大河兼任の乱(1190)に於いて千葉常胤が海道大將軍として従軍していることなどから当時重要な交通路であったことが知られる。館山館周辺が12世紀後半には竹城保と呼ばれていたであろうことは文治2年4月28日付けの平泉藤原氏公文所下文写(県史<sup>注1)</sup>)から推定できる。文治の役前後、竹城保は文献上どのように記されてきているだろうか。

塩釜市史によると平安末から鎌倉時代初めまでには竹城保司が存在していたことが指摘され、さらに竹城保内に塩釜神社の祭料田として2町5反が存在していたことが明らかにされている。前者は前述の平泉藤原氏公文所下文写から、後者は塩釜神社文書の將軍家政所下文(県史<sup>注2)</sup>)から知ることができる。

また、水沢市史によると文治の役後源頼朝は陸奥国諸郡郷地頭などへの下文(建久元年)を出し、国司御廐佃の事の条に

右、件の佃、もとより定め置くの郡郷あり、宮城・名取・柴田・黒河・志田・遠田・深田(吉川本には深江)・長世・大谷・竹城是なり、早く先例に任せて、沙汰を致すべし、たとい所(々)損亡すと雖も、作否に随い宛行い沙汰すべき也。

とある。この事から、松島町誌では当時竹城保には陸奥国司の御廐の直轄田が設けられ、御廐舎人が居住して馬産に努力していた地域であっただろうと考えられる。

以上の文書の他に竹(高)城保が度々見られるものに相馬文書・相馬岡田文書があげられる。



松島町誌によるとこれらの文書で竹城保(あるいは竹城保内の記述)の初出は永仁2年(1295)8月22日付の関東下知状(県史68)<sup>注3)</sup>であり、応永9年(1402)5月12日付の相馬胤久讓状(県史454)までみられると指摘されている。したがって、これらの文書から13世紀後半から15世紀初め頃までは竹城保が相馬氏領であったこと、また、竹城保は波多谷村、長田村、根崎村、鶴原村、赤沼郷等の地域であることが同誌によって指摘されている。さらに根崎村、鶴原村は現在の根廻地区、初原地区であると考えられており、それぞれ館山館跡に隣接した地区であること興味深い。

さて鎌倉後半から室町時代初頭にかけての約100年間、竹城保は相馬氏領であったわけであるがこの間におこった事件として岩切城合戦(1351)、4管領の抗争(14世紀後半)があげられる。水沢市史によると岩切城合戦は奥州管領の吉良・畠山両氏間にあった潜在的な対立が俄かに表面化し、両者の武力抗争にまで発展しておこったとされ、畠山方に味方した留守氏等は敗れ、吉良方の勝利をもって終わった凄まじい戦いであったことが知られる。なお、相馬岡田文書の観応2年(1352)10月25日付の吉良貞家知行安堵状(県史309)<sup>注5)</sup>に竹城保内波多谷村の事が記されている。

4管領(斯波・吉良・畠山・石塔)の抗争は結果的に斯波氏の勝利におさまる。留守家旧記には畠山・吉良氏両氏の抗争を詳細に記している。これによると竹城保に関しては、畠山方は竹城保内の長田に築城をし吉良方と一戦を交じたが長田城は落城し畠山氏は二本松へ逃れたと記されている。貞治6年(1367)正月25日付の斯波直持施行状(県史401)<sup>注6)</sup>、応安5年(1372)12月2日付の斯波詮持(?)施行状(県史407)<sup>注7)</sup>等から相馬氏が斯波氏を援護したことが窺われる。

このように、岩切城合戦後相馬氏は吉良貞家によって竹城保内波多谷村の知行を許され、さらに4管領の抗争で論功行賞として名取郡坪沼郷、堀内郷等を斯波氏から宛行われていることなどから従来領地にさらに新領地を加えていたことが知られる。

ところで、以上の合戦・抗争以外に竹城保関連の文書をみると留守家明讓状(県史137)<sup>注8)</sup>及び沙彌某等石文(県史272)<sup>注9)</sup>がある。前者は家明が四保女子に田5町在家明宇を譲ったもので、田5町のうち1町がそり町にある田の事をさしていることから、鎌倉後半に留守家明がそり町に田を所有していたことが知られる。しかし、具体的にどのくらい領有していたのか不明である。後者は水沢市史によると『相馬朝胤は、「留守美作前司」が朝胤の所領である陸奥国竹城保長田村内の田畠屋敷を押領した』ので管領府に訴え、「管領府は留守美作前司に対して、早く管領府に出頭して事の次第を弁明するよう命じたものである。」と言う。さらに同史によると留守氏と相馬氏との間に相論がおこった原因として、竹城保内にある留守氏管轄の塩釜神社の臨時祭料田2町5反が保外に一円的に存在するものでないことから、相馬氏の所領と社領の2町5反とかちあう田畠屋敷が生じたためと考えられている。

したがって、鎌倉後半、南北朝前半に留守氏所有の田畠屋敷が反町や長田村以外の竹城保内の村々にあった可能性が考えられる。

それでは、室町時代以降についてはどうであろうか。15～16世紀中頃の竹城保（及びその関連）についてははっきりしないのが現状である。史料に明確にあらわれてくるのは16世紀中頃過ぎから後半にかけてであり、伊達輝宗書状（県史 59 3）<sup>注10</sup> が水沢市史によって指摘されている。すなわち、「顕宗の嫡子孫五郎は、伊達輝宗のはからいで高城氏の養子となって高城家を相続することになり、輝宗は永禄12年閏5月12日、以前の反対派でかつ留守氏の一族重臣である余目伊勢守・佐藤太郎左衛門尉・高橋玄蕃頭に書状を送って、その善処方を依頼した。」（同史）と説明されている。その後、孫五郎の縁約が実現され、高城家に入って高城式部少輔宗綱と称したと言う。したがって、「戦国時代には高城氏が鎌倉時代以来の相馬氏の勢力を駆逐して、すでに高城保を一円知行し、伊達氏の麾下に属していた」（同史）と考えるのが妥当であろう。

なお、武部宗綱は天正16年（1588）の大崎征伐の際に政宗の麾下に属して大崎派遣軍に参加している（同史）。

以上、平安末から室町時代における館山周辺の世界情勢の変遷を概観してきた。そこで、次に館山館跡との関連性を検討していきたい。

平安末から鎌倉時代初め頃については文治の役、大河兼任の乱、塩釜神社の祭料田の件、陸奥国司御廐の直轄田の件があげられる。これらの中で館山館跡との関連性が指摘できそうなのは後二者である。当時の竹城保の範囲については不明であるが、館山館跡周辺に祭料田及び直轄田が設けられていた可能性が考えられる。したがって、この頃に館山館周辺の経済的基盤がつくられたものと思われる。

それでは鎌倉後半から室町時代初め頃についてはどうであろうか。竹城保内波多谷村、長田村、鶴原村、根崎村等を領有していた相馬氏、反町や長田村等竹城保内の村々に点々と田畠屋敷を保有していたと思われる留守氏、岩切城合戦、4管領の抗争があげられるが、やはり館山館跡と直接的に関連したという史料は見られない。しかしながら、館山館跡が鶴原村に隣接し根崎村、反町内にあること、相馬氏が竹城保内の村々を約100年間にわたって領有してきたこと、相馬氏と留守氏との相論があったことなどから、相馬氏か留守氏のいずれかが館山館跡と関連していた可能性が考えられる。また、吉良貞家知行安堵状や斯波直持施行状、斯波詮持(?) 施行状、畠山氏が長田に城を築いていること等を考えると岩切城合戦や4管領の抗争に関連していた可能性が考えられる。

室町時代中頃過ぎから後半以降については高城保はすでに高城氏によって一円知行され、高城氏は伊達氏の麾下に属していたことはすでに述べたとおりである。

したがって、館山館は遺物から15世紀後半には成立し、また、現史料から室町後半まで使用

されていた可能性が考えられる。

注1) **平泉藤原氏公文所下文寫**〔塩釜神社文書〕

公文所下 竹城保司

司令早免除在家所役<sub>并</sub>萬雜事

安堵守真源藤禰宣事

右件輩、無他妨令安堵、司令勤仕公役、兼又國中往反之間、若

有致煩之輩者、司令言上子細之状、依仰如件、者保司宣承知、不可遺失、以下

<sup>1186</sup>文治二年四月廿八日

藤原 在判

散位若江 在判

(裏書) 正交了 <sup>(吉良貞経)</sup>宮内大輔源朝臣 (花押)

注2) **將軍家政所下文寫**〔塩釜神社文書〕

將軍家政所下 陸奥国竹城保

可早任先例、引募一宮塩釜社臨時祭析田貳町五段事

右任先例、可令引募、但於他人作田者、不可致妨之状、保司宣

承知、勿遺失、以下

建久4年3月7日 安主□□ 在判

知家事中原在判

注3) **関東下知状**〔相馬岡田文書〕

可令早平胤頭跡領知陸奥国院 <sup>(内方)</sup>□ 大三賀八菟<sub>并</sub>波多谷載<sup>己上田敷</sup>配分状事

右、以亡父左衛門尉胤村跡、所被配分也者、早守先例、可致沙

汰之状、依仰下如件

永仁二年八月廿二日

<sup>(北条宣時)</sup>陸奥守平朝臣 (花押)

<sup>(北条貞時)</sup>相模守平朝臣 (花押)

注4) **相馬胤久讓状**〔相馬岡田文書〕

<sup>(奥州)</sup>□□行方郡内岡田村、<sub>并</sub>上つるかや<sup>(村)</sup>□、<sub>并</sub>いん内村、<sub>并</sub>下やか

らの村、<sub>并</sub>やつうきき□、<sub>并</sub>くさの、い <sup>(い脱力)</sup>との村、<sub>并</sub>たきのほう

の内はたやの村、これハ宮内大夫胤久之重代さうてんの所り、やうた

り、〈後略〉

應永九年<sup>ミつの</sup>へ<sup>むま</sup>五月十二日 <sup>(相馬岡田)</sup>胤久 (花押)

注5) **吉良貞家知行安堵状**〔相馬岡田文書〕

陸奥国竹城保内波多谷村事、且依今度軍忠、且任本領相傳文書

領掌不可有相違之状、依仰執達如件

觀応二年十月廿五日 (吉良貞家) 右京大夫 (花押)

相馬岡田新兵衛尉殿

注6) **斯波直持施行状** [相馬文書]

陸奥国名取郡南方坪沼郷□□、堀内郷内合□□、爲勲功  
賞、所宛行□□例可致沙汰、依仰執達如件

貞治六年正月廿五日 (斯波直持) 右京大夫 (花押)

注7) **斯波詮持(?)施行状** [相馬文書]

陸奥国高城保内赤沼郷事・爲本領之間、所□(返力)付也、如元知行不  
可有相違状、依仰執達如件

応安五年十二月二日 (斯波詮持力) 左衛門佐 (花押)

相馬讚岐次郎殿

注8) **留守家明讓状** [留守文書]

四保女子にゆつる田家坪付注文事

合

壹町 長町作

壹町 荒居入道作

壹町 大荒田

壹町 そり町

壹町 河内房作

一字 土興王太郎在家餘部在之

一字 彌大夫在家紙屋新路在之

一字 藤次太郎八道在家同所在之

都合田伍町在家三字定

右、彼所之御公事者、以田參町於公田可令支配者也、仍坪付注  
文如件

元亨四年六月十九日 藤原家明 (花押)

注9) **沙彌某等石文** [大悲山文書]

□□(相馬)次郎兵衛尉朝胤申、陸奥国□(竹)城保長田村内田畠屋敷事、訴  
状如此、早企參上、可被明申之由候也、仍執達如件

貞和二年九月十七日 沙彌 (花押)

散位

留守美作前司殿

注 10) **伊達輝宗書状**〔留守文書・余目文書〕

急度啓之候、宮城孫五郎縁約付免角之儀、其間候、乍勿論政景  
無苦勞之様二取成、旁々前二可有之候、従此方も、近辺之面々  
へ 使用者相居候、併不可有油断候、余事小山田筑前任口状二候  
恐々謹言

(永禄十二年五月)  
閏月十二日

輝宗 (黒印)

余目伊勢守殿

佐藤太郎左衛門尉殿

高橋玄蕃頭殿

## まとめ

1. 館山館跡は泉ヶ原から反町・三居山に向かって南に舌状に突き出した丘陵先端部に立地している。
2. 本遺跡は縄文時代（前・晩期）、平安時代、鎌倉～江戸時代に至る複合遺跡である。
3. 出土遺物として、縄文土器（大木4式、大洞C<sub>1</sub>式）、土師器（国分寺下層式・表杉ノ入式）須恵器、灰釉陶器、中世陶器、磁器、石製品（石匙・篋状石器・砥石）、金属製品（刀・鉛玉）古銭などがある。
4. 検出された遺構には中世以前のものでして竪穴住居跡2軒（表杉ノ入式）が、中世以降のものとして掘立柱建物跡1軒、柱穴列跡1箇所、通路、門跡、通路状遺構、土壇1基などがある。
5. 館跡は中央郭を中心として、西郭・東郭などから構成されるが、西郭の一部に限定した調査のため各郭間の新旧関係は不明である。なお、西郭は出土遺物から15世紀後半頃まで使用されていたと考えられる。
6. 館跡は文献・出土遺物の検討から、15世紀後半には成立し、室町時代後半まで使用されていた可能性が考えられる。
7. 館跡は自然条件（地形面）・社会条件（水陸交通の要地）・館の構造等から、館周辺の沖積地を支配の対象として、さらに有事の際に機能を果たす館としての性格が考えられる。

## 引用・参考文献（順不同）

- 佐々木慶市（1965）：宮城県史1（中世史Ⅰ）
- 加藤道男・阿部博（1980）：「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書VI  
宮城県文化財調査報告書第72集
- 佐藤寒山（1966）：「刀剣」日本の美術No.6 至文堂
- 小倉強（1977）：宮城県の古建築
- 藤沼邦彦（1975）：「宮城県の経塚について」東北歴史資料館研究紀要第1巻  
（1976）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」東北歴史資料館研究紀要第2巻  
（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」東北歴史資料館研究紀要第3巻  
（1978）：「中世陶器の紹介」東北歴史資料館研究紀要第4巻
- 座右宝刊行会（1977）：世界陶磁全集3 日本中世
- 常滑市誌編集委員会（1974）：常滑窯業誌
- 瀬戸市史編纂委員会（1981）：瀬戸市史
- 松島町誌編纂委員会（1973）：松島町誌
- 水沢市史編纂委員会（1976）：水沢市史2 中世
- 宮城県史編纂委員会（1958）：宮城県史30 資料集1
- 多賀城調査研究所（1980）：多賀城跡、政庁跡図録編  
宮城県教育委員会
- 加藤道男（1981）：「植田前遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書V  
宮城県文化財調査報告書第81集
- 澁谷正三（1980）：「明神脇遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書IV  
宮城県文化財調査報告書第71集
- 土岐山武（1980）：「安久東遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書IV  
宮城県文化財調査報告書第72集
- 氏家和典（1957）：「土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯  
東北史学会
- 桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」歴史39輯  
東北史学会
- 小井川和夫・手塚均（1974）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集
- 佐藤好一・手塚均（1978）：「天狗堂遺跡」田尻町文化財調査報告書第1集
- 豊田武編（1981）：東北の歴史 上巻
- 宮城県史編纂委員会（1970）：宮城県史32（資料篇9）「仙台領古城書立之覚」
- 新人物往来社（1981）：日本城郭大系3 山形 宮城 福島
- 水沢市立図書館（1979）：解説中世留守家文書
- 仙台市史編纂委員会（1950）：仙台市史3 別篇1

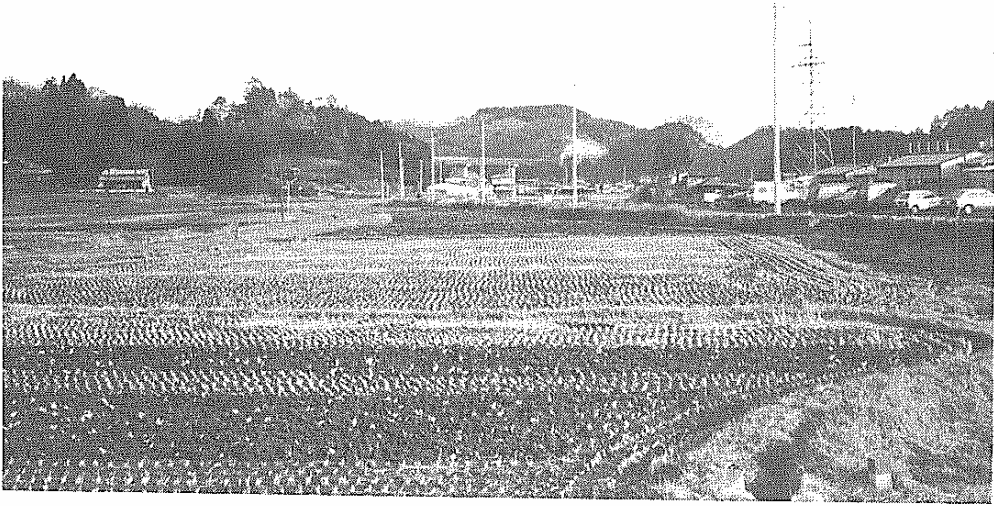
破片集計表

種別	器形	部位	器面調整(外面-内面)	区 層 位					第 1 号 住 居 跡				第 2 号 住 居 跡				Ⅲ 区 Ⅳ 区 Ⅴ 区				計						
				床面	P	堆積	出	不明	床面	貼床	P	堆積	出	不明	第Ⅲ層	第Ⅳ層	第Ⅴ層	第Ⅵ層									
土	環	口	ヨ コ ナ デーヨ コ ナ デ															4	5								
			ヨ コ ナ デーミ ガ キ (黒)			1													5	13							
		縁	ミ ガ キーミ ガ キ (黒)																4	5							
			ケ ズ リーミ ガ キ (黒)																1	1							
		部	ロ ク ローミ ガ キ (黒)	10		34									14				95	154							
			不 明ーミ ガ キ (黒)																4	4							
		不	不 明ー不 明																		1						
			ミ ガ キーミ ガ キ (黒)	26											6	6					38						
		体	ミ ガ キ (黒)ーミ ガ キ (黒)																	1	10						
			手持ちヘラケズリーミ ガ キ (黒)								1									5	6						
	部	ロ ク ローミ ガ キ (黒)			41														51	92							
		不 明ーミ ガ キ (黒)	1		35		1												186	259							
	底	ヘラケズリ																	4	4							
		回転系切り	4		13										12	1	2		58	90							
	不	不 明	1		1										3				43	49							
		刷 毛 目ーヨ コ ナ デ								1										1							
	師	環	口	ヨ コ ナ デー刷 毛 目															3	1	2	6					
				ヨ コ ナ デーヨ コ ナ デ			22	3			1	12								85	3	86	212				
			縁	ヨ コ ナ デー不 明																		1	1				
				ロ ク ローナ デ	1		2															1	4				
部			ロ ク ローロ ク ロ																		3	11	2	41	57		
		ロ ク ローミ ガ キ (黒)																		1			1	1			
不		不 明ー不 明																					2	2			
		刷 毛 目ー刷 毛 目									1									1	9		33	44			
養		体	刷 毛 目ーナ デ																		1	2	12		3	78	96
				刷 毛 目ー不 明																					1	3	5
	ナ		ナ デー刷 毛 目																						4	4	
			ナ デーナ デ			25																			339	382	
	部		手持ちヘラケズリー刷 毛 目																						7	18	29
		手持ちヘラケズリーミ ガ キ (黒)																						11	13		
	ナ	手持ちヘラケズリーナ	6		72				1	3	2	72	3	46										33	736	974	
		手持ちヘラケズリーヘ ラ ナ デ																						1	1		
	部	手持ちヘラケズリーロ ク ロ																							1	1	
		手持ちヘラケズリー不 明	1																						40	41	
不	ロ ク ローナ デ	4		2																				21	27		
	ロ ク ローロ ク ロ																							38	43		
底	不 明ー刷 毛 目																							7	9		
	不 明ー刷 毛 目			41	1																			152	223		
不	不 明ー不 明	13		149																				1,111	1,562		
	ヘラケズリ																							13	13		
部	回転系切り																							7	7		
	簾 状 圧 痕																							1	1		
木	木 葉 痕																							1	1		
	不 明	1		3	1																			59	79		
壺	ミ ガ キーヘラナデ・ヘラミガキ																							1	1		
	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																						9	97	118	
体	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																						6	94	106	
	底	回転ヘラ切り																							10	11	
部	回転系切り																								22	22	
	不 明	1																						3	55	60	
高台付環	蓋	ロ ク ローロ ク ロ																							2	2	
	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																							1	1	
養	体	平行タタキ目ーアテ目(青海波)																							15	16	
		平行タタキ目ーナ デ																							33	37	
部	平行タタキ目ーアテ目(平行)																								63	83	
	手持ちヘラケズリーナ																								2	2	
部	手持ちヘラケズリーロ ク ロ																								23	24	
	ロ ク ローロ ク ロ																								22	22	
底	ロ ク ローロ ク ロ																								96	102	
	不 明ー不 明																								34	34	
壺	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																							1	1	
	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																							10	10	
赤焼き器	環	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																						1	4	
		体部	ロ ク ローロ ク ロ																						2	7	10
底	口縁部	ロ ク ローロ ク ロ																							6	6	
	底	ロ ク ローロ ク ロ																							2	2	4
総 計				70	1	441	5	5	20	10	391	6	303	2	132	3,865	5,251										

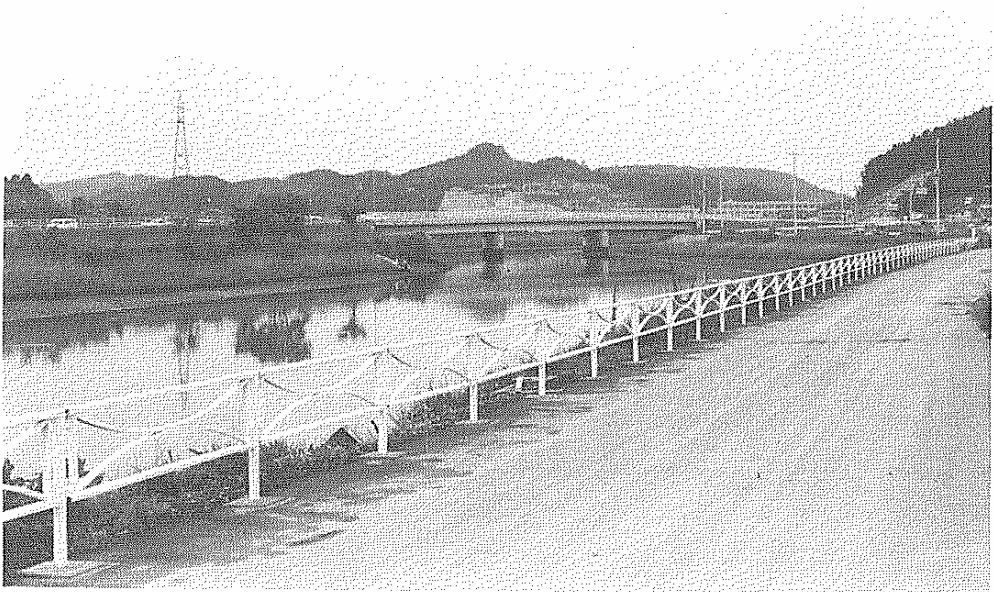


图版 1 遗迹远景 (航空写真)





(西から)



(南から, 手前は高城川)

図版 2 遺跡遠景

西郭（東から）



西郭の平場（南から）



中央郭の土塁及び空堀（北から）



図版 3



中央郭門跡（北東から）



中央郭A平場（東から）



中央郭B平場（東から）

図版 4

中央郭日平場南側の堀切



中央郭日平場西側の堀切

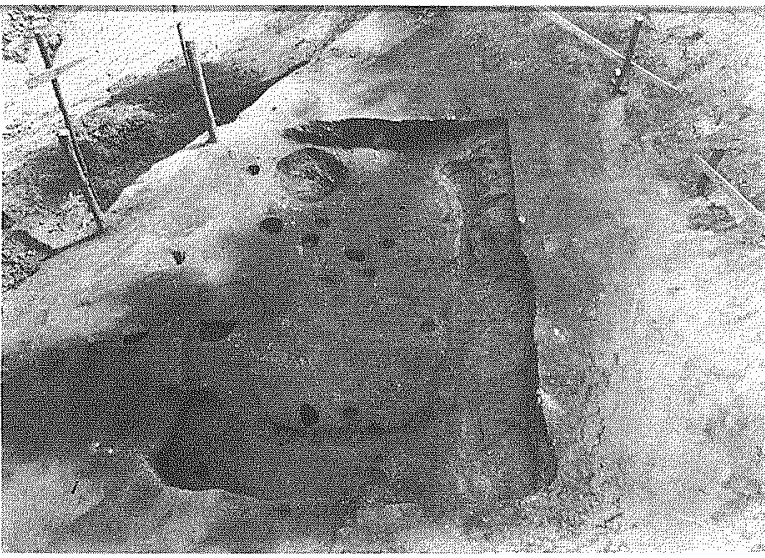
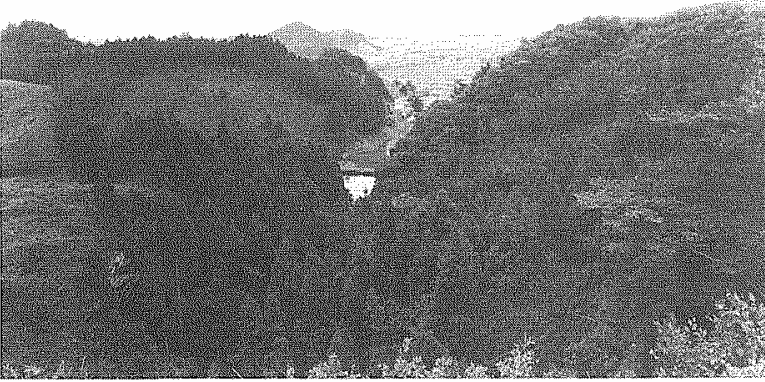


西郭から西を望む



図版 5





第1号住居跡



第2号住居跡

西郭の各平場（南から）



同 上（南から）



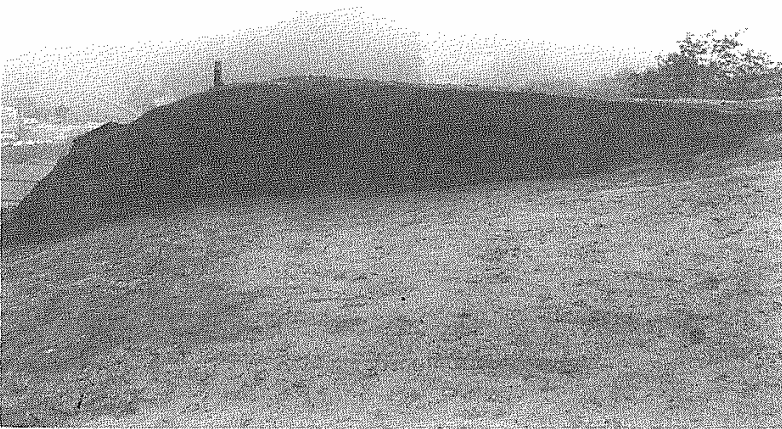
西郭の通路（西から）



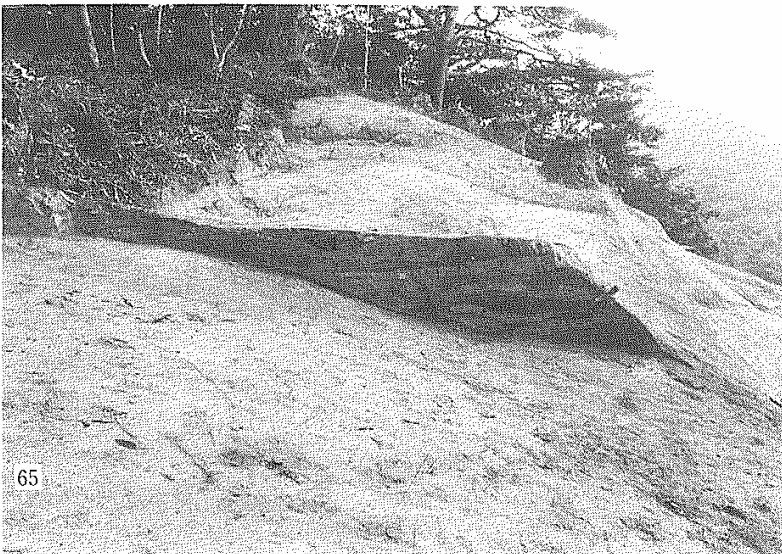
図版 7



西郭の通路（西から）



F 平場整地層断面



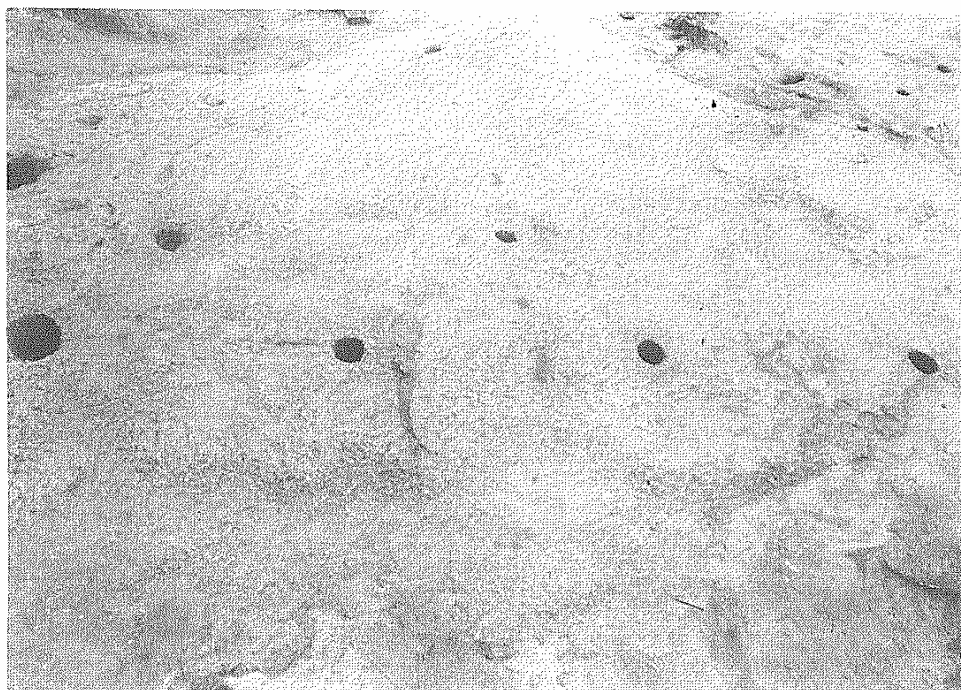
E 平場整地層断面

65

図版 8

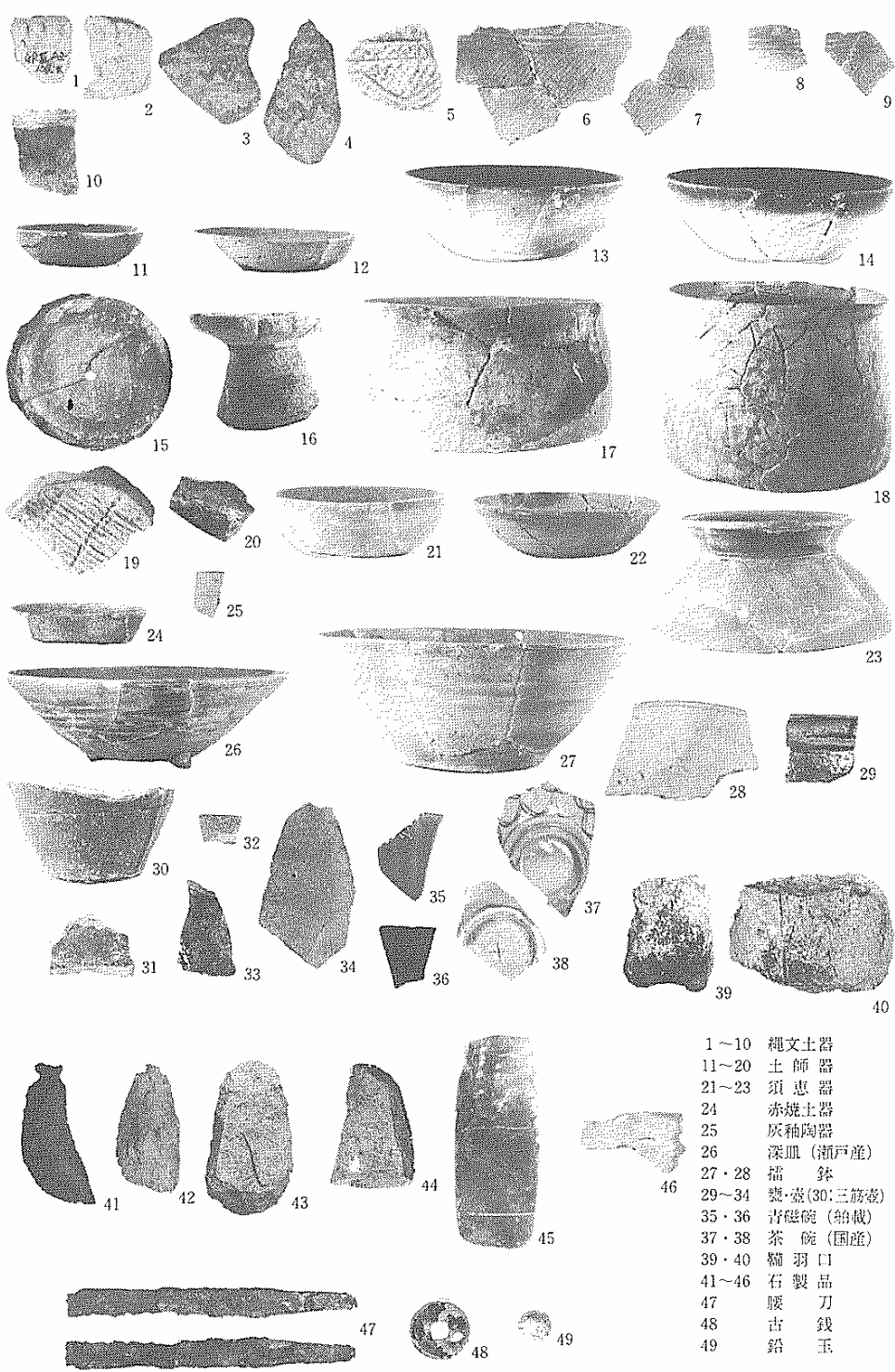


振立柱建物跡



柱穴列跡





- 1~10 縄文土器
- 11~20 土師器
- 21~23 須恵器
- 24 赤焼土器
- 25 灰釉陶器
- 26 深皿(瀬戸産)
- 27・28 播鉢
- 29~34 甕・壺(30:三筋壺)
- 35・36 青磁碗(船載)
- 37・38 茶碗(国産)
- 39・40 糶羽口
- 41~46 石製品
- 47 腰刀
- 48 古銭
- 49 鉛玉

出土遺物

图版10

## Ⅱ 山<sup>やま</sup>下<sup>した</sup>遺跡

### 調査要項

**遺跡所在地：**宮城県宮城郡松島町初原字中田、山下

**遺跡記号：**G0(宮城県遺跡地名表登載番号 65043)

**調査面積：**3,500 m<sup>2</sup>

**発掘面積：**1,600 m<sup>2</sup>

**調査員：**技術主査 狩野 正昭

技 師 阿部 恵、土岐山 武、澁谷 正三

古川 一明、菊地 逸夫

# 目 次

I	遺跡の位置と周辺の地形	70
II	調査の方法と経過	70
III	発見された遺構と遺物	71
1	A区	71
	① 竪穴住居跡と出土遺物	71
	② 土壇と出土遺物	82
	③ 溝状遺構と出土遺物	83
2	B区 塚と出土遺物	84
3	C区 製鉄遺構と出土遺物	86
IV	遺構と遺物の考察	87
1	遺物	87
	① 土師器の分類	88
	② 出土土器の組み合わせと年代	88
2	竪穴住居跡の構造と年代	89
3	塚について	90
4	製鉄遺構とその年代	90
5	その他の遺構の年代と出土遺物の年代	92
V	まとめ	92
	山下遺跡C区出土鉄滓の分析調査	鵜田 勝彦103

## I 遺跡の位置と周辺の地形 (第1図)

山下遺跡は、松島町初原、字山下、字中田に所在し、東北本線愛宕駅から西方約4km、県道仙台－松島線、県道大和－松島線の交差点から西方約0.3kmに位置する。

遺跡は富谷丘陵東南部に立地する。遺跡の西部は、標高約35mの尾根で、南側には、緩斜面が広がる。東から北にかけては、沖積平野が細長く伸び、尾根の北には、平野から沢が入り込んでいる。尾根との比高は約15mある。

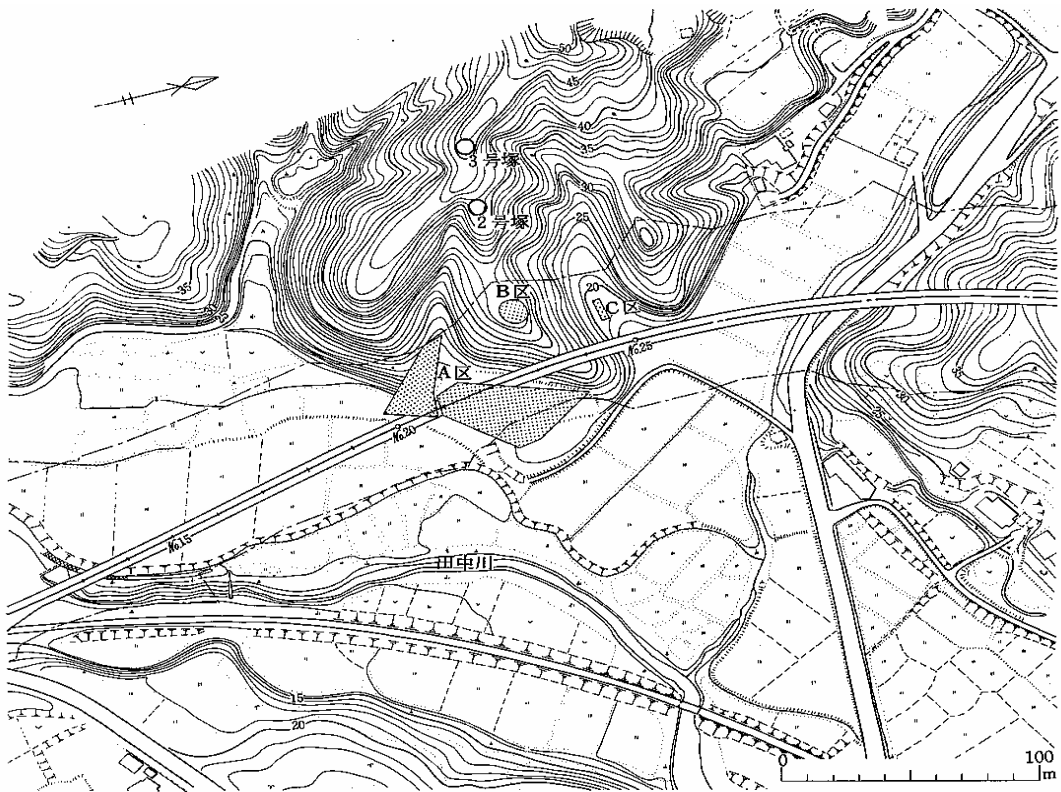
現状は、尾根が山林、緩斜面が畑地、沢が荒地である。

## II 調査の方法と経過

松島有料道路は、本遺跡の南端を東西に縦断する。この路線敷にかかる緩斜面からは、土師器の分布が、尾根上には塚が、また、沢地には鉄滓の分布が認められた。

そこで、地形に沿ってそれぞれ次のような調査区を設定した。

A区 南側に広がる緩斜面全域



第1図 周辺の地形と調査区

B区 尾根上の塚及びその周辺

C区 沢地の鉄滓の分布が、認められた範囲とその周辺

調査は6月1日A区から開始した。A区はまず重機ですべて表土を除去し、地山面で遺構を確認した。遺構には竪穴住居跡、焼土遺構、土壇、溝等があり、各々の精査を行った後平面図を作成した。平面図は中心杭No22とNo23を結ぶ直線を南北の基準線とし、これにNo22で直交する東西の直線によって区画される座標をもとに各遺構について遣り方測量を行った。調査区の全体図については平板測量を行った。

B区は塚とその周辺地形の平板測量を行い、その後トレンチをもうけ発掘調査を実施した。発掘調査を実施したのは、路線敷にかかる1号塚のみである。

C区は工事による断面で鉄滓の出土を見、製鉄遺構の存在が予想されたため付近全体にトレンチをもうけ調査した。B区、C区についてもNo22、No23を基準とし平板測量を行った。調査の一切が終了したのは8月5日である。

### III 発見された遺構と遺物

#### 1 A区（第2図）

A区において発見された遺構は、竪穴住居跡5軒、土壇4基、溝状遺構3本である。遺構は耕作による削平のため保存はよくない。遺構は、A区北側に集中している。

#### 竪穴住居跡と出土遺物

##### 第1号住居跡 第3図

〔平面形・規模〕 西壁の全体、北壁の一部のみ残存している。平面形は残存部から方形を基調とするものと思われる。規模は西壁南北長が4.7m、北壁東西長が残存部3.0mである。

〔堆積土〕 1層認められる。

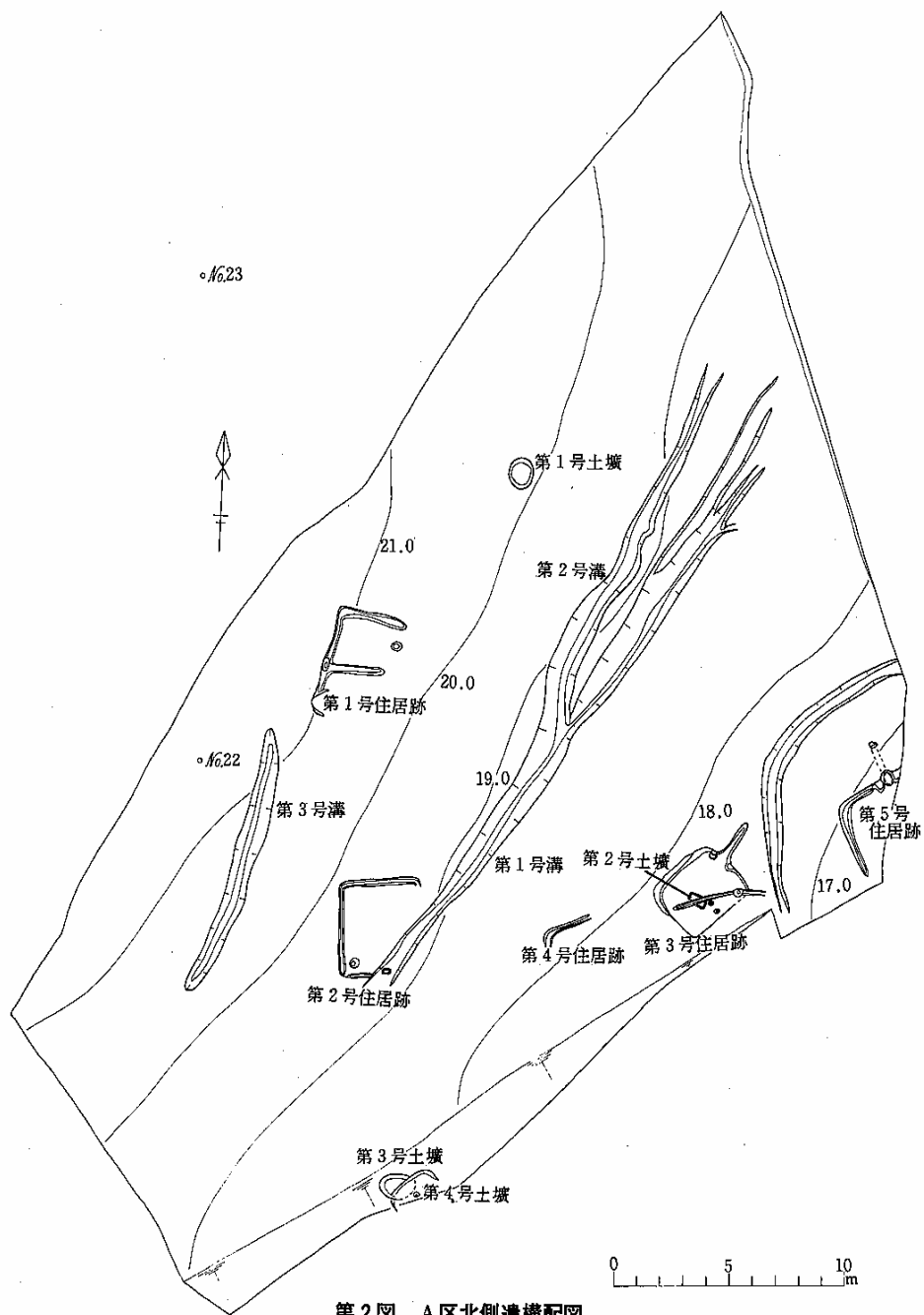
〔壁〕 地山を壁としている。残存している壁は西壁の保存のよい部分で約20cmある。立ち上がりは比較的急である。

〔床〕 住居北西側が残存している。地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 北西壁ぎわのピット1からは柱痕跡が認められ柱穴と考えられる。

〔周溝〕 残存する壁沿いに認められた。幅20～25cm、深さ6～8cmである。断面形は「U」字形を呈する。

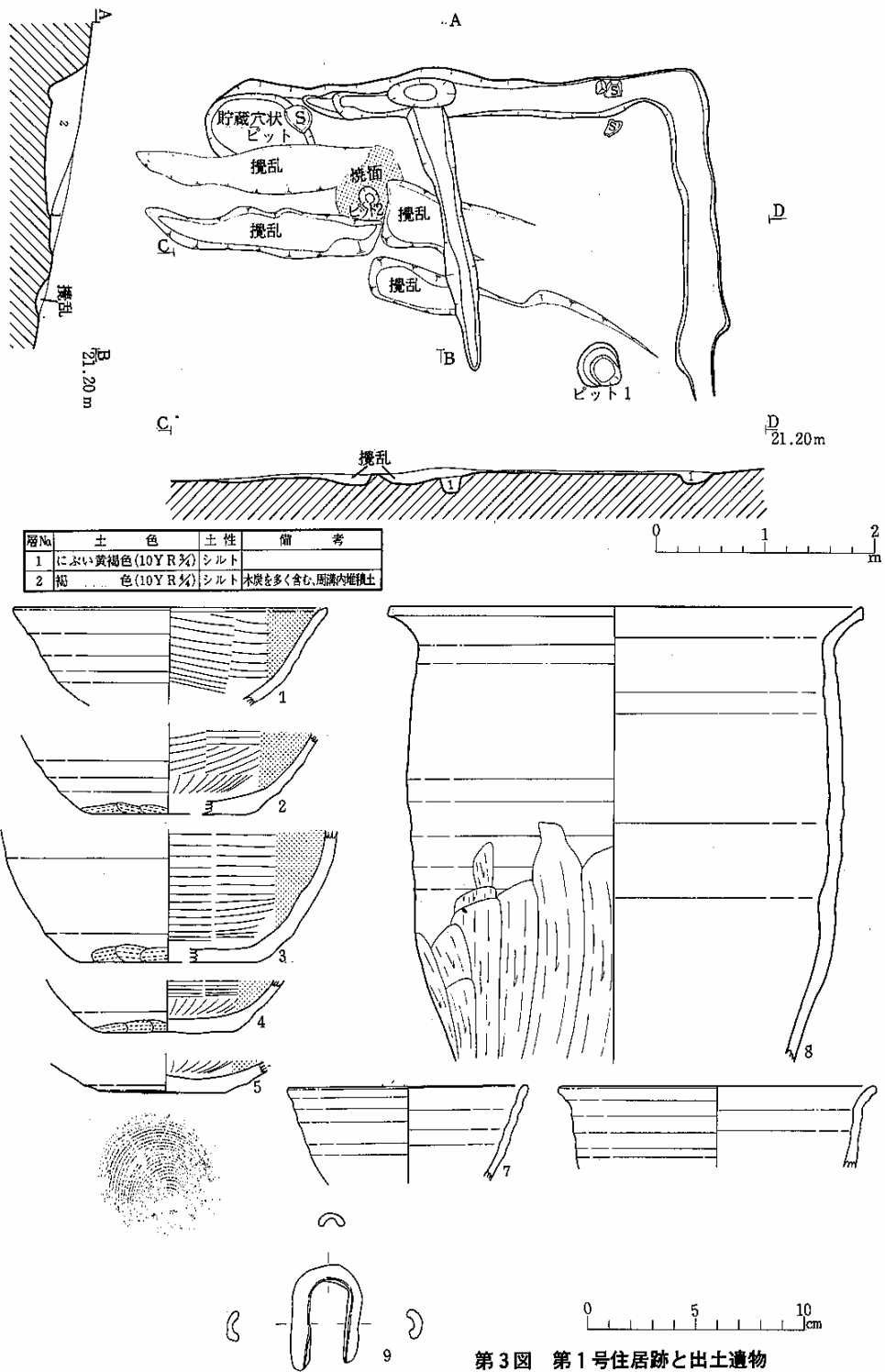
〔貯蔵穴状ピット〕 住居南西隅にピット2があり、平面形は楕円形を呈し規模は長軸1.0m短軸0.6m、深さ10cmある。堆積土は4層に細分され、各層から土師器が多く出土している。



第2図 A区北側遺構配図

〔その他の施設〕 床面から溝と焼面、ピットが認められた。

溝 住居中央を南北に分断する形で東西に延び、西側は周溝へと接続する。現存長は 2.5m、幅 20~30cm、深さ約 15cm ある。堆積土には焼土と木炭の混入がみられる。



第3図 第1号住居跡と出土遺物

焼面、ピット、貯蔵穴状ピットと溝との間から 60×50cm の範囲で焼面が認められ、焼土をはずしたところ、中央部から径約 20cm、深さ約 15cm ほどの円形ピットが検出された。焼面とピットの切り合い関係等については不明である。

〔出土遺物〕 貯蔵穴状ピットから土師器(第 3 図-3.4.5)が、周溝底面から土師器(第 3 図-1.2.6)、赤焼土器(第 3 図-7)が、また堆積土中からは土師器(第 3 図-8)、鉄製品(第 3 図-9)が出土している。これらの中で、貯蔵穴状ピット、周溝底面からの遺物は遺構に伴うものと考えられる。

### 遺構に伴う遺物

〔土師器〕 土師器には坏・甕がある。

坏(第 3 図 1～5) すべて製作にロクロを使用している。1 は体部から口縁部にかけての、2～5 は底部から体部にかけての破片である。1 は体部下端から口縁部にかけて丸味をもって外傾する。他については不明である。底部の切り離し技法は、回転糸切り技法によるもの(2)と再調整のため不明なもの(3.4.5)があり、後者は底部及び体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。内面の調整はいずれもヘラミガキ、黒色処理である。

甕(第 3 図-6) 製作にロクロを使用している。体部上端から口縁部にかけての破片で、口縁部はわずかに外反する。

〔赤焼土器〕(第 3 図-7) 体部から口縁部にかけての破片である。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもので、内外面にはロクロ調整痕が顕著に認められる。

### 堆積土中出土遺物

〔土師器〕

甕(第 3 図-8) 製作にロクロを使用している。体部から口縁部にかけての破片である。体部から口縁部にかけては直線的で、口縁部はわずかに外反する。器面調整は内外面ともロクロ調整され、外面下半のみヘラケズリが施されている。

〔鉄製品〕(第 3 図-9) 欠損品である。残存部の平面形は「U」字形を呈し、断面はあさい「U」字形である。性格については不明である。

### 第 2 号住居跡 (第 4 図)

〔重複〕 1 号溝によって切られており、1 号溝より古い。

〔平面形・規模〕 西壁と北壁、それに南壁の一部が残存している。平面形は残存部から方形を基調とするものと思われる。規模は西壁南北長 4.0m、北壁東西長 3.4m である。

〔堆積土〕 3 層認められ 2 層に大別できる。1 層は住居全体に 2 層は壁沿いに堆積する。

〔壁〕 地山を壁としている。残存している壁は保存のよい部分で高さ約 35cm あり、立ち上りは急である。



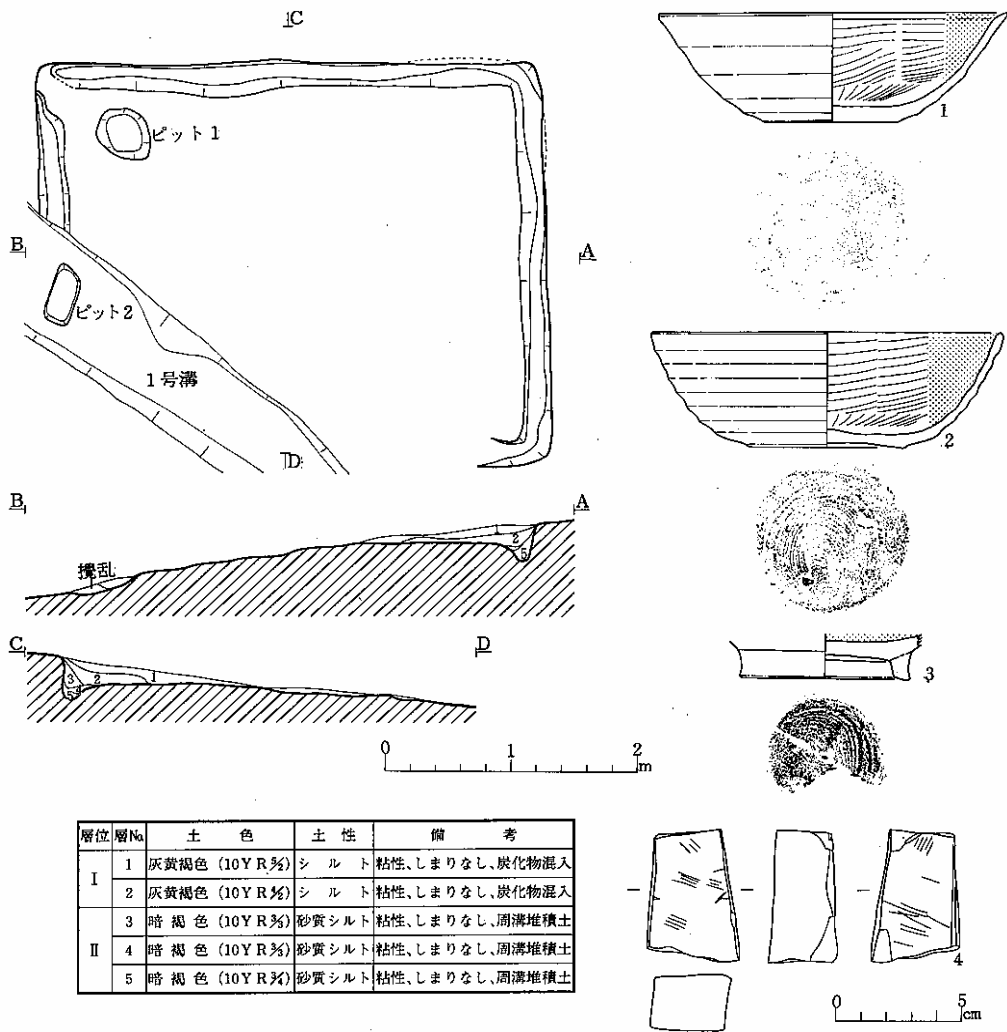
〔床〕 住居北西部が残存している。地山をそのまま床面としておりほぼ平坦である。

〔周溝〕 残存する壁沿いに認められ、南東隅で一部途切れている。幅20～30cm、深さ10～15cmある。断面形は「U」字形を呈する。

〔貯蔵穴状ピット〕 南壁沿い中央部のピット2底面からは、土師器坏が3個体重なり合った状態で出土している。平面形は長方形を呈し、規模は長軸50cm、短軸25cm、深さ約10cmである。

〔その他の施設〕 住居南西隅からピットが検出された。柱痕跡等は認められない。

〔出土遺物〕 床面から土師器(第4図-3)が、貯蔵穴状ピット底面から土師器(第4図1.2)が、床面ピットから砥石(第4図-4)が、また堆積土中から土師器が出土している。これらの中で床面、貯蔵穴状ピット、床面ピット出土の遺物は遺構に伴うと考えられる。



層位層No.	土色	土性	備考
I	1 灰黄褐色 (10Y R 5/2)	シルト	粘性、しまりなし、炭化物混入
	2 灰黄褐色 (10Y R 5/2)	シルト	粘性、しまりなし、炭化物混入
3	暗褐色 (10Y R 3/2)	砂質シルト	粘性、しまりなし、周溝堆積土
II	4 暗褐色 (10Y R 3/2)	砂質シルト	粘性、しまりなし、周溝堆積土
	5 暗褐色 (10Y R 3/2)	砂質シルト	粘性、しまりなし、周溝堆積土

第4図 第2号住居跡と出土遺物

## 遺構に伴う遺物

〔土師器〕 土師器には坏、高台付坏、甕がある。

坏(第4図-1.2) 製作にロクロを使用している。器形は(1)が底部から体部にかけて、わずかに丸味をもって外傾し、口縁部は直線的に開く。(2)は底部から体部にかけて丸味をもって外傾している。底部の切り離し技法はいずれも回転糸切りによるもので、(2)は底部の周縁に手持ちヘラケズリの再調整が施されている。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〔高台付坏〕(第4図-3) 製作にロクロを使用している。底部から台部の破片である。台部は付高台でその端部はやや外に開く。底部の切り離し技法は回転糸切りである。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

〔砥石〕(第4図-4) 両端が欠損している。断面は長方形を呈す。使用面は表裏、両側面の4面で、表裏面には擦痕が認められる。

## 第3号住居跡

〔平面形・規模〕 長方形を呈し、規模は北壁東西長 2.6m、東壁南北長 3.2m ある。南壁と西壁は一部くずれている。

〔堆積土〕 6層認められ、3層に大別できる。Ⅰ層は住居西側に厚く、Ⅱ層は住居全域に、Ⅲ層は床面上に堆積している。Ⅱ、Ⅲ層上面には炭火物、焼土の分布が見られた。

〔壁〕 地山を壁としている。保存のよい部分での壁高は約 30cm あり、立ち上がりは急である。

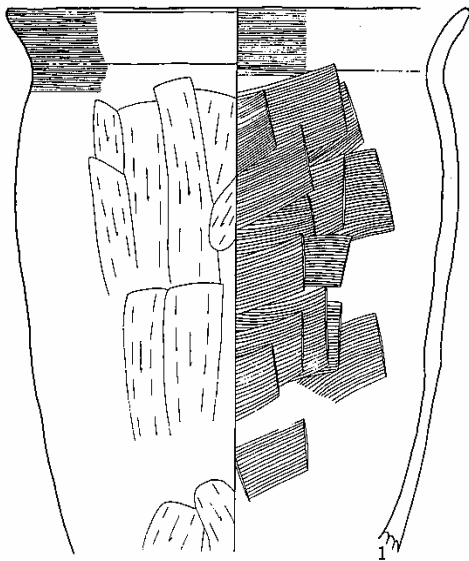
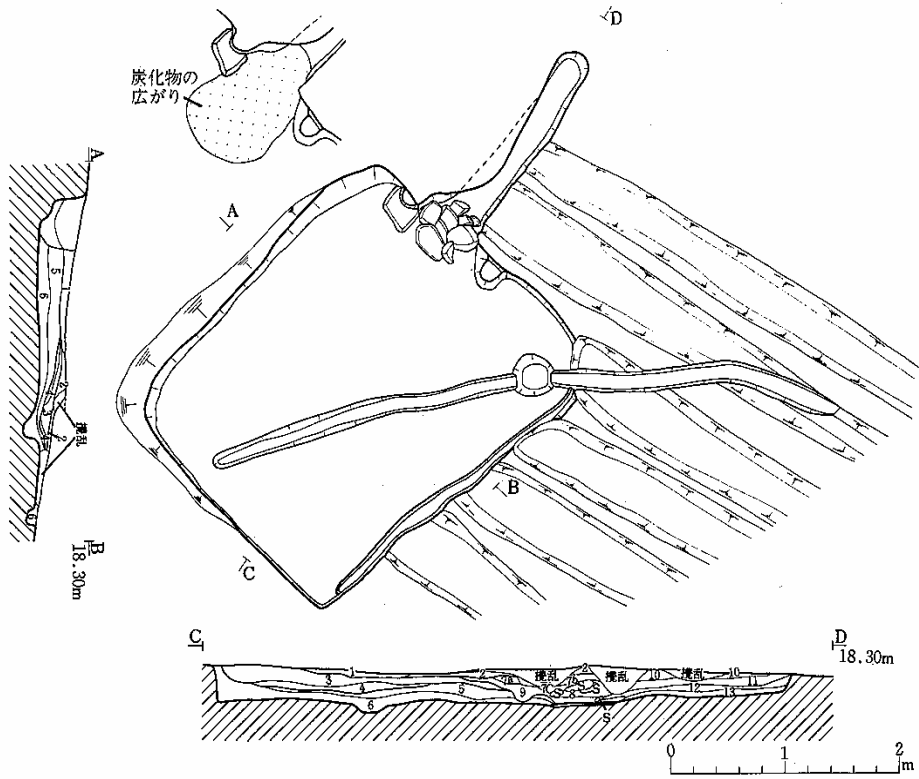
〔カマド〕 北壁西寄りに付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は幅 60cm、奥行 60cm ある。左側壁は礫を芯として粘土を貼りつけて構築されている。右側壁の保存はよくなく粘土のみ残存している。底面はわずかに周囲の床面より凹み、全体に炭火物の分布が認められる。奥壁は、住居北壁を掘り込んで作られており、そのまま煙道部につづく。煙道部は地下式のもので幅約 30cm、長さ 1.5m あり、底面は先端に向って緩やかに上る。堆積土は燃焼部から煙道部にかけて9層に細分された。燃焼部には焼土に混じって礫が 10 個ほど崩落している。

〔周溝〕 周溝は東壁沿いに認められた。幅約 15cm、深さ約 10cm ある。断面形は「U」字形を呈する。

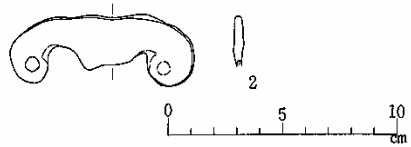
〔その他の施設〕 床面からピットと溝が認められた。

ピット、床面上に 3 個認められた。柱痕跡等は認められない。

溝 住居南西隅近くから北東隅へ延びここで周溝と接続し、さらに住居外へと続く。長さ 5.4m、幅 20~25cm、深さ約 15cm ある。



層位層No.	土色	土性	備考
I	1 におい黄褐色(10YR5/2)	シルト	
	2 におい黄褐色(10YR5/2)	シルト	
II	3 灰褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを多く含む
	4 灰褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック、炭化物を含む
III	5 褐灰色(10YR5/2)	シルト	炭化物を多く含む
	6 におい黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを多く含む
カ	7 a におい褐色(7.5YR5/2)	シルト	焼土を多く含む
マ	7 b におい褐色(7.5YR5/2)	シルト	焼土を多く含む 炭化物も混入
ド	7 c におい褐色(7.5YR5/2)	シルト	焼土、炭化物を多く含む
内	8 明赤褐色(5YR5/2)	シルト	焼土を多く含む
	9 におい褐色(7.5YR5/2)	シルト	焼土、炭化物を多く含む
堆積土	10 明黄褐色(10YR5/2)	シルト	
	11 明赤褐色(5YR5/2)	シルト	炭化物を多く含む
	12 暗褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを多く含む
	13 暗褐色(10YR5/2)	シルト	焼土、炭化物を含む



第5図 第3号住居跡と出土遺物

〔出土遺物〕 カマド底面から土師器が、堆積土中から土師器(第5図-1)、鉄器(第5図-2)が出土している。遺構に伴う遺物としては、カマド底面出土の土師器甕体部破片があるが、小片のため図示する事はできない。ロクロの使用については不明である。外面にはヘラケズリの痕跡が認められる。

### 堆積土中出土遺物

〔土師器〕

甕(第5図-1) 体部下端から口縁部にかけて丸味をもってゆるやかに開き、口縁部はゆるやかに外反する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

〔鉄製品〕(第5図-2) 欠損品である。両端部は円盤状を呈し、その中央部に“孔”をもつ燧金である可能性がある(阪田:1972)。

### 第4号住居跡(第6図)

〔平面形〕 西側及び南側周溝の一部のみ残存する。平面形は残存部からみると方形を基調とするものと思われる。

〔壁〕 壁は削平のため存在しない。

〔床〕 残存する部分は住居南西隅付近のみである。地山を床としている。

〔周溝〕 西側及び南側でその一部が認められた。残存部の規模は西壁周溝で2.1m、南側周溝で0.5mあり、幅20~30cm、深さは約10cmある。周溝内堆積土は1層である。

〔出土遺物〕 なし。

### 第5号住居跡(第7図)

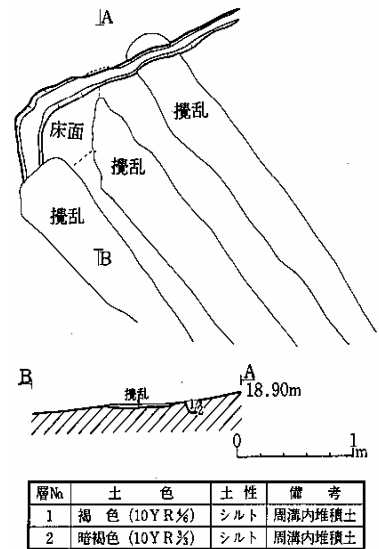
〔平面形・規模〕 北壁及び西壁の一部が残存する。平面形は残存部から見ると方形を基調としたものと思われる。残存部の規模は北壁東西長が3.0m、西壁南北長が3.1mある。

〔堆積土〕 3層認められ、1層にまとめられる。

〔壁〕 地山を壁としている。残存している壁は西壁で25~30cmある。立ち上りは比較的急である。

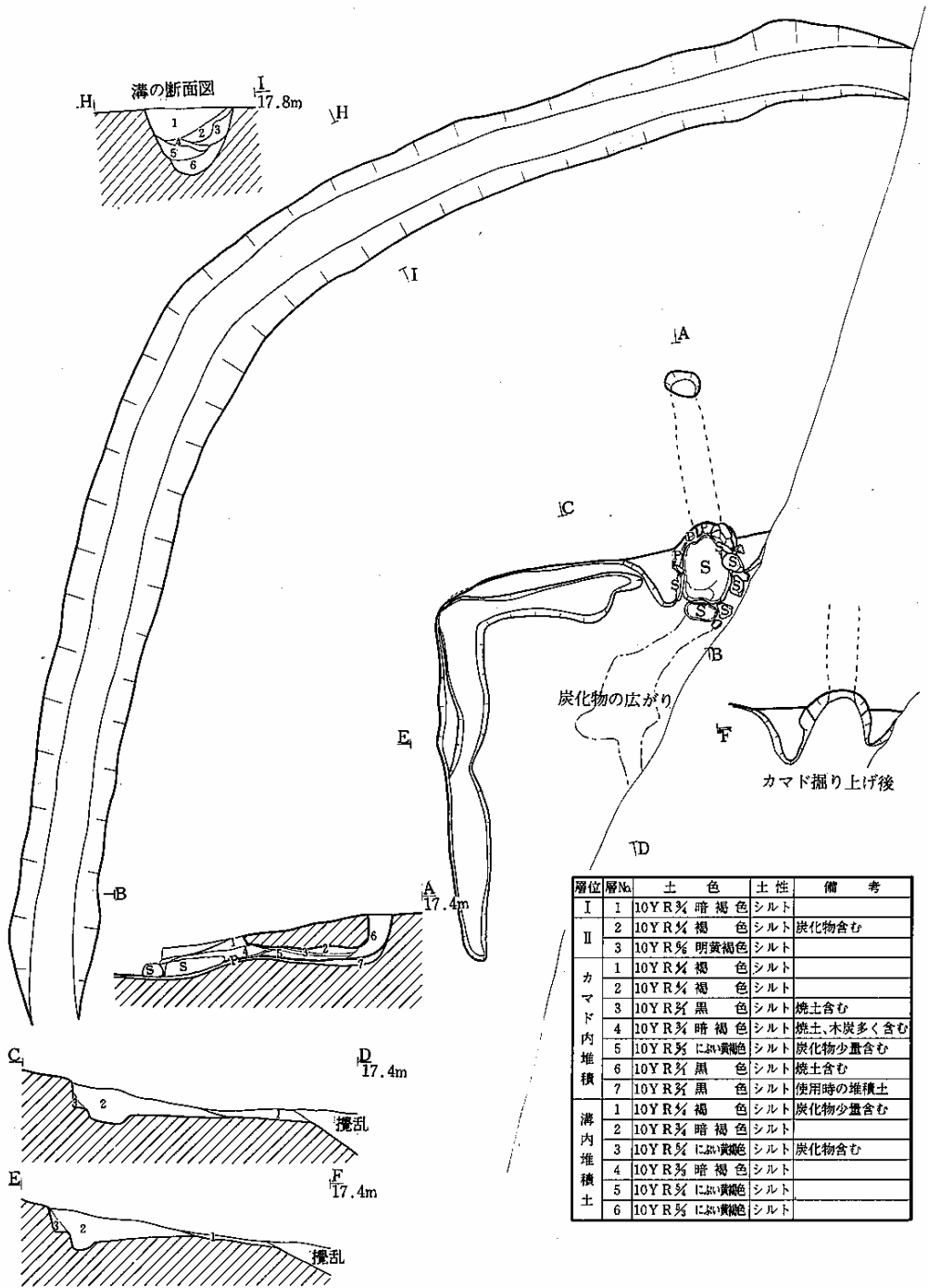
〔床〕 住居北西側に一部残存する。地山をそのまま床としており、ほぼ平坦である。

〔カマド〕 北壁に付設されている。燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は巾60cm、奥行60cmあ

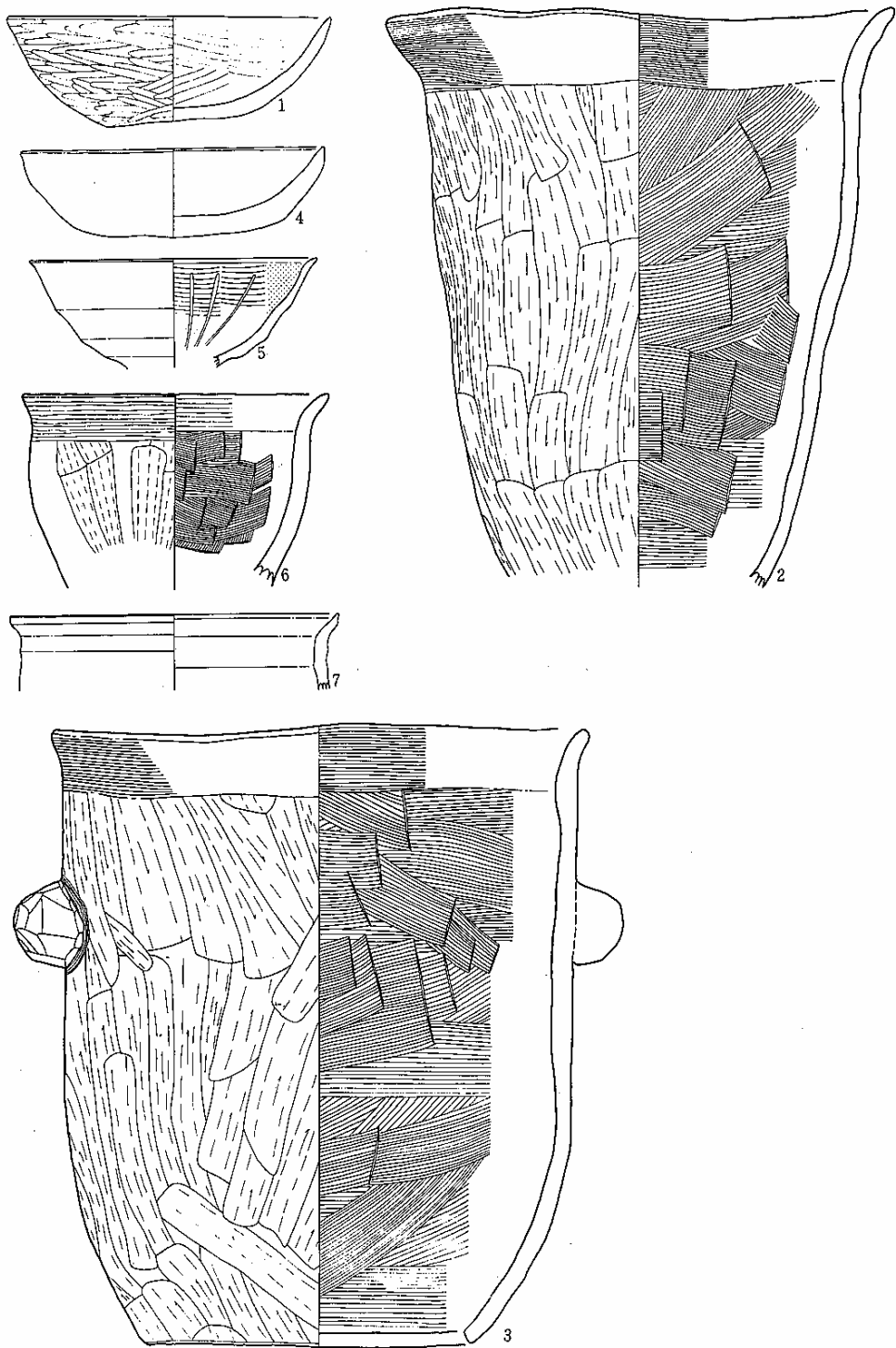


第6図 第6号住居跡と出土遺物

る。左側壁は粘土で構築され、内面は礫、土器片で補強されている。底面はわずかに周囲の床面より凹む。奥壁は住居北壁を掘り込んで作られており、そのまま煙道部につづく。煙道部は



第7図 第5号住居跡



第8図 第5号住居跡の出土遺物(1)

0 5 10  
cm.

地下式のもので、巾30cm、長さ1.3mある。底面はほぼ平坦で、先端部には径2.5cm、深さ40cmの煙り出しピットがある。カマド内堆積土は9層に細分され、燃焼部には天井部に使用されたとと思われる大石(40×60×15cm)が焼土と混じって崩落していた。

〔周溝〕 壁沿いに認められた部分と壁から少し離れて認められた部分とがある。巾20～30cmあり、深さ5～10cmある。断面形はゆるやかな「U」字形を呈し、堆積土は1層ある。

〔その他の施設〕 住居外側3mほどはなれて住居をとり囲む形で溝が認められた。北西部のみ残存しており、全体的平面形は不明である。規模は残存部11m、巾約80cm、深さ約60cmある。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上っている。堆積土は6層に細分された。

〔出土遺物〕 カマド内から土師器、周溝底面から鉄製品(第8図4～6)、堆積土中から土師器(第8図7～10)、須恵器が出土している。遺構に伴う遺物としては、カマド構築に用いられた土器(第8図-2.3)、カマド底面、周溝底面出土のものが考えられる。

### 遺構に伴う遺物

〔土師器〕 土師器には坏、甕、甑がある。

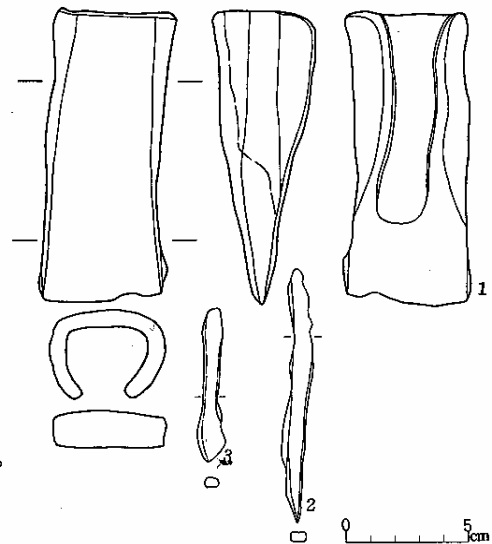
〔坏〕(第8図-1) 体部から口縁部にかけて内弯し、底部は丸みを帯びた平底である。器面調整は内外面ともヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。

〔甕〕(第8図-2) 体部下端から口縁部にかけてゆるやかに開き、口縁部はゆるやかに外反する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

〔甑〕(第8図-3) 無底式のものである。体部下端から上に向かってゆるやかに立ち上り、口縁部に向って直線的に続く。口縁部はゆるやかに外反する。また、体部上方には粘土帯を横に付け、表面をヘラケズリした“把手”が付設されている。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

〔鉄製品〕 鉄製品には鉄斧と釘状のものがある。

〔鉄斧〕(第9図-1) 着装部と刃部からなり、平面形は長方形を呈する。着装部は鉄板を両側から折り曲げて、断面楕円形の袋状にしている。



第9図 第5号住居跡の出土遺物(2)

大きさは長さ 13.0cm、刃部内 4.8cm、肩巾 5.0cm ある。

(釘状鉄製品) (第 9 図-1.2) 四角柱状を呈し、先端部は鋭っている。2は長さ 11.4cm、巾 0.6~0.7cm、3は長さ 6.7cm、巾 0.6cm ある。

### 堆積土中出土遺物

〔土師器〕 坏・甕がある。

坏(第 8 図-4.5) 製作に際し、ロクロ非使用のもの 4 と、使用したもの 5 とがある。4は体部から口縁部にかけて内弯し、底部が丸底風平底のものである。器面調整は内外面ともヘラミガキされていたと思われる。(磨滅のため詳細は不明) 5は体部は丸みをもって外傾し、口縁部はわずかに外反する。器面調整は外面がロクロ調整、内面はヘラミガキである。

甕(第 8 図-6.7) 製作に際し、ロクロ非使用のもの 6 と、使用したもの 7 とがある。6は体部下端から口縁部にかけてゆるやかにふくらみ、口縁部でゆるやかに外反する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデである。7は体部上端から口縁部の破片で、わずかに外反し、端部は上方に突き出している。

### 土壌と出土遺物

土壌は、4基検出された。

**第 1 号土壌**(第 10 図-1) 平面形は、ほぼ円形を呈する。断面形は、底面がほぼ平坦で、壁はゆるやかに立ち上る。大きさは、直径約 1.2m、深さ 70cm である。堆積土は 3層認められ、第 2層から繊維を含む縄文土器片が出土している。磨滅のため文様等は不明である。遺構に伴うと思われる遺物はない。

**第 2 号土壌**(第 10 図-2) 2号土壌は、3号住居跡床面を掘り下げた後確認された。平面形は長方形である。断面は「凹」字形を呈する。規模は長軸 1.25m、短軸 0.85m、深さ 30~35cm である。堆積土は 8層認められた。出土遺物はない。

**第 3 号土壌**(第 10 図-3) 4号土壌を切っており、4号土壌より新しい。平面形は、残存部から楕円形を呈するものと思われる。規模は残存部長で長軸 1.0m、短軸 1.0m である。深さは底面の確認を誤まったため不明である。堆積土は 4層認められ、その中からは土師器片が出土している。土師器は坏の細片で、製作にロクロを使用しており、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

**第 4 号土壌**(第 10 図-4) 3号土壌に切られており、3号土壌より古い。東半分は削平により失なわれ、西半分のみ残存する。平面形は残存部から隅の丸い方形を基調とするものと思われる。規模は長軸 1.8m、短軸残存部長 0.6m である。堆積土は 4層認められた。底面はほぼ平坦で、壁際を除いて焼土の分布が見られる。



出土遺物には遺構に伴うものとして底面出土の土師器がある。土師器は坏の細片で、製作にロクロを使用しており、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

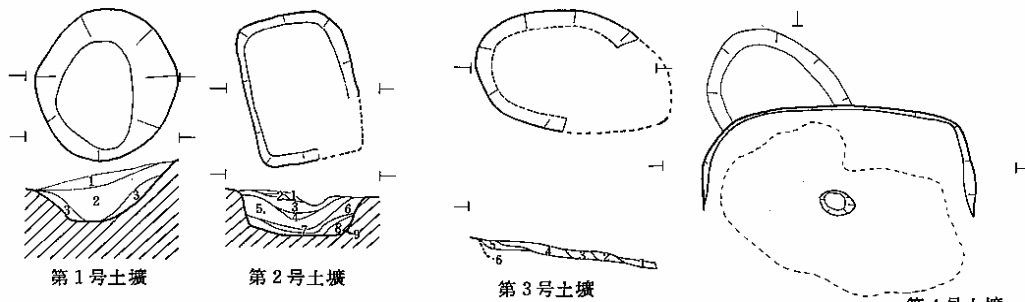
## 溝状遺構と出土遺物 (第2図)

溝状遺構は3本認められ、斜面中央を南北に延びる。

**第1号溝** 2号住居跡を切っており、2号住居跡より新しい。北東方向に延び、長さ約30m、巾1.5~2.0m、深さ40~50cmである。断面形はゆるい「U」字形を呈している。堆積土は1層認められ、中からは土師器、縄文土器の細片が出土している。

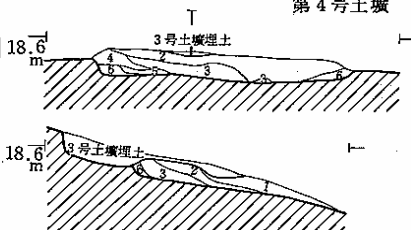
**第2号溝** 1号溝中央から枝分かれするように北東に延びている。1号溝との切り合い関係は不明である。長さは17m、巾2.5~3.0m、深さ40~50cmあり、断面形はゆるい「U」字形を呈する。堆積土は1層認められ、中からは土師器、縄文土器が出土している。

**第3号溝** 3号溝は、1. 2号溝の西方10mの所に独立して存在している。ほぼ南北に延び、長さ12m、巾1.5m、深さ30~40cmある。断面形はゆるい「U」字形を呈する。堆積土は1層ある。出土遺物はない。



層No	土色	土性	備考
1	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	地山をブロック状に含む
2	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	〃
3	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	粘性なし
4	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	粘性なし
5	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	炭化物を多量に含む

層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	しまり有り、粘性無し
2	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	〃
3	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	〃

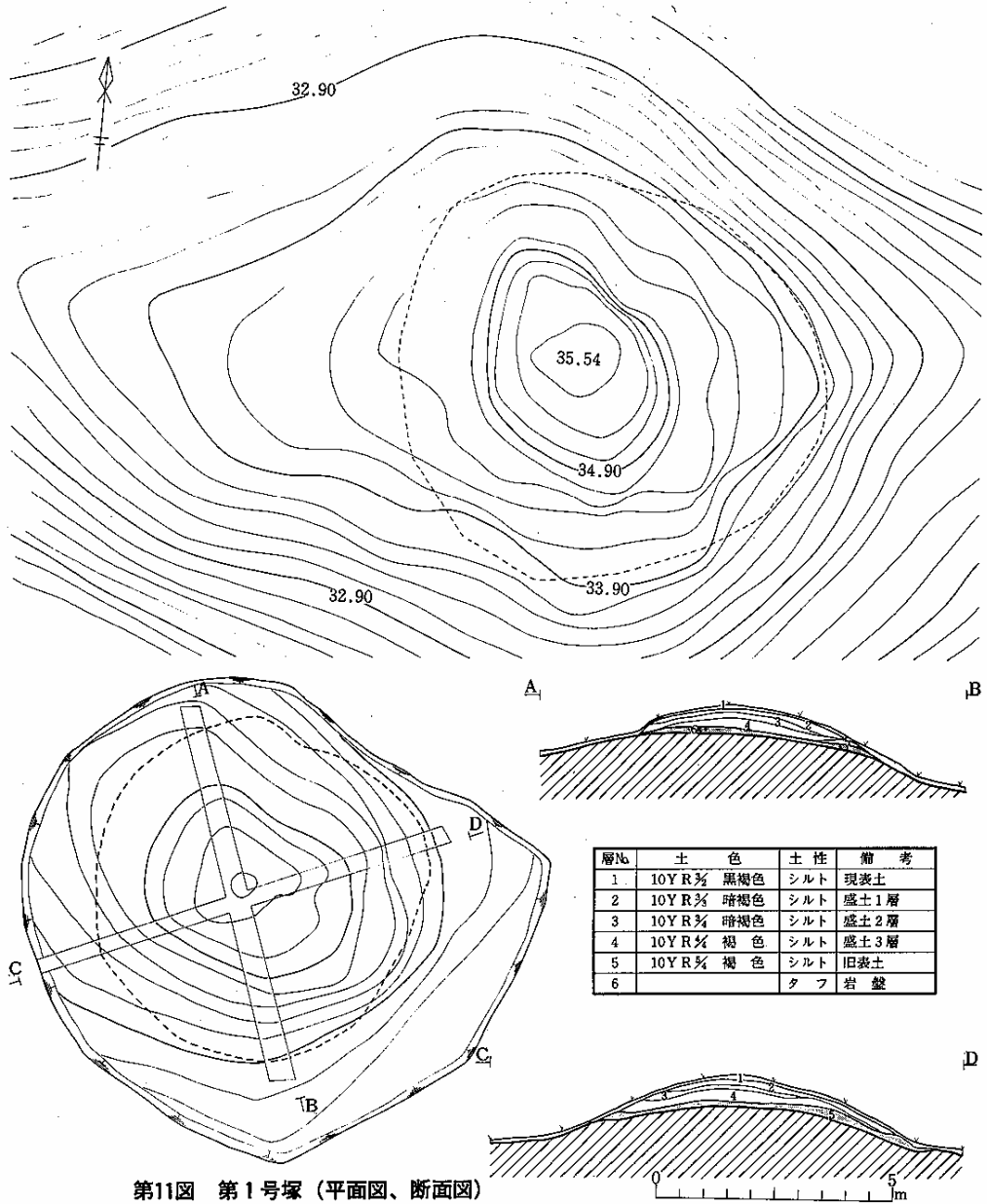


層No	土色	土性	備考
1	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	木炭・焼土を僅かに含む
2	暗褐色 (10YR 3/2)	シルト	木炭粒を僅かに含む
3	にぶい黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	木炭粒を僅かに含む
4	にぶい黄褐色 (10YR 5/2)	シルト	木炭・焼土を僅かに含む
5	黒褐色 (10YR 2/2)	シルト	木炭・焼土を多量に含む
6	にぶい褐色 (10YR 4/2)	シルト	壁のくずれ

第10図 土坑

## 2. B区 塚

塚は丘陵尾根上に3基発見された。発掘調査に先立ち、すべての塚に対し測量調査を行い、1号塚については内部を調べるため、塚にベルトを残しトレンチを設定した。測量調査、発掘調査の結果は次のとおりである。



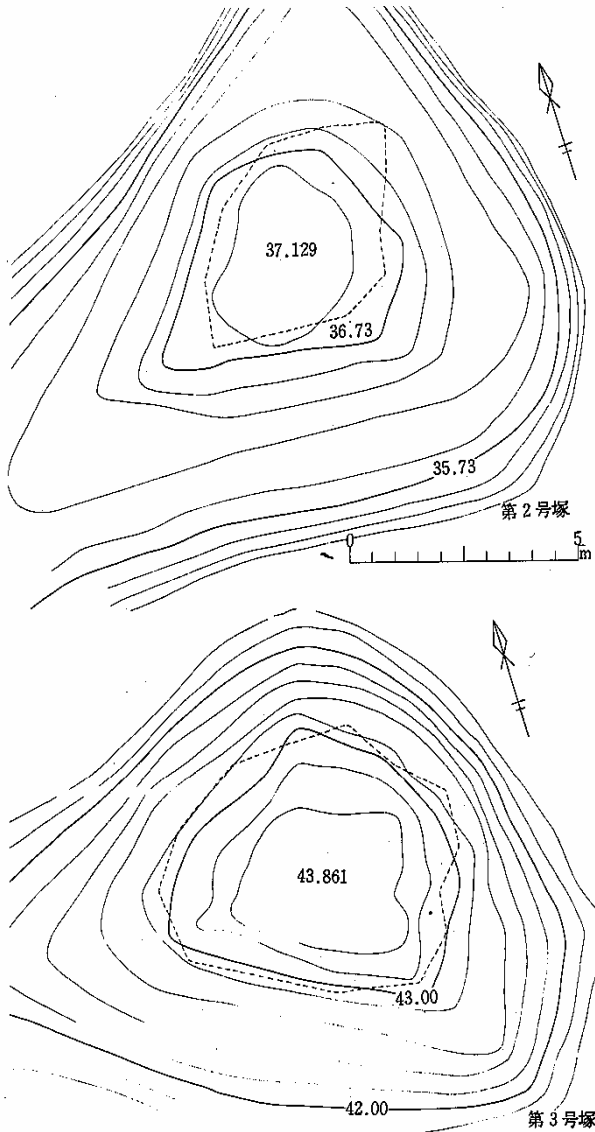
第11図 第1号塚 (平面図、断面図)

### 測量調査の結果 (第11・12 図)

3基の塚は、ほぼ東西に延びる尾根上に直線的に配列しいずれも尾根末端に位置する。塚の間隔は1号、2号間が45m、2号、3号間が30mある。現在での形状は1号塚が円形、2号塚が楕円形、3号塚が長方形に近い形を呈している。規模は1号塚が大きく他の2基は小規模である。周溝等の施設は認められなかった。

### 発掘調査の結果 (第11 図)

表土を剥いた後の平面形はほぼ円形で、規模は長軸7.5m、短軸7.1m、高さ1.2mある。積土は旧表土を削り出し、旧表土面にそのまま積み上げられている。積土は3層認められ、厚土は中央部で約50cmある。内部施設、出土遺物はなにも認められなかった。



第12図 第2号・3号塚平面図

	形 状	規 模 (m)	高 さ (m)
1 号 塚	円 形	9.5	1.3
2 号 塚	楕 円 形	5.5-4.0	0.8
3 号 塚	長 方 形	6.0-5.0	0.9

表 1

### 3. C区（製鉄遺構と出土遺物）

C区は遺跡北東部の沢地に当たり、古くから水田利用されており調査区はかなりの深さまで削平が進んでいた。当区は周囲に鉄滓、炉壁片が散布することから、製鉄遺構が存在すると考えられ調査の結果、製鉄遺構が1基みつかり炉床と思われる焼面、炉壁の一部、それに炉構築のための掘り方、炉をとりまく落ち込みの部分が検出された。

#### 製鉄遺構

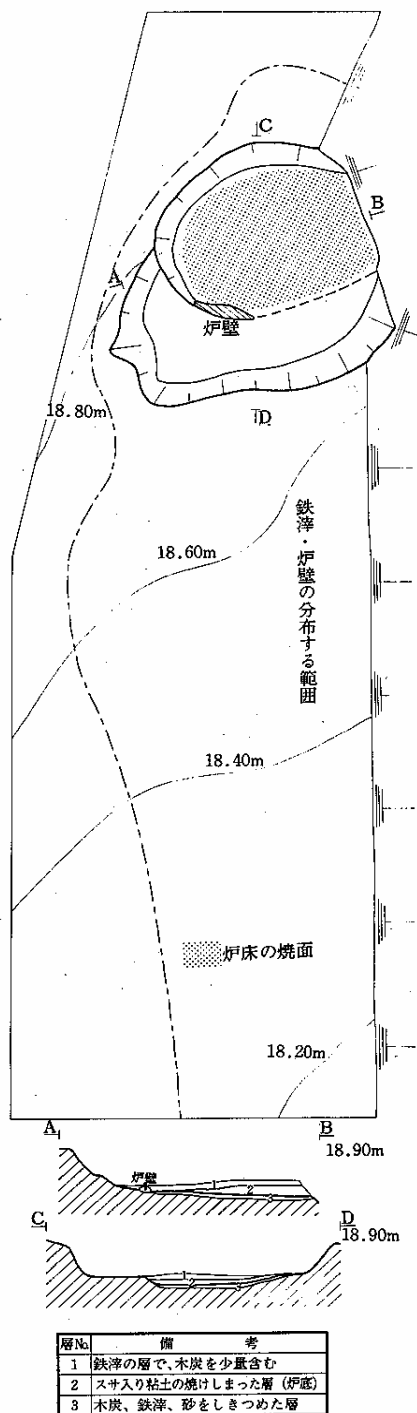
〔平面形・規模〕 炉床と考えられ非常に硬く焼けしまった面の範囲は、断面図から復元すると楕円形を呈し、長軸1.4m、短軸1.2mある。

〔炉壁〕 炉壁は炉南東隅において部分的に立ち上りが認められた。その他はすべて破壊され炉壁片として周囲から出土している。これらの炉壁片はすべて、スサ入り粘土が用いられ帯状に積み上げられている。内面は硅質化し鉄滓が付着している。

〔炉底〕 地山を楕円形に掘り窪め、その上に砂、木炭、鉄滓を敷きつめ、その上を粘土貼りして炉底としている。厚土は約10cmある。

〔その他の施設〕 炉の廻りをとりかこむ形で落ち込みが認められた。

〔出土遺物〕 出土遺物には羽口、鉄滓、赤焼土器がある。これらは炉壁片とともに同一の層から出土している。鉄滓はおびただしい量が出土しているが、明細については後述する。羽口は数十点の破片が出土している。炉壁片にとりついたまま出土しているものもある。ここでは形態のわかるものを選んで図示する。赤焼土器は坏の小破片が出土している。



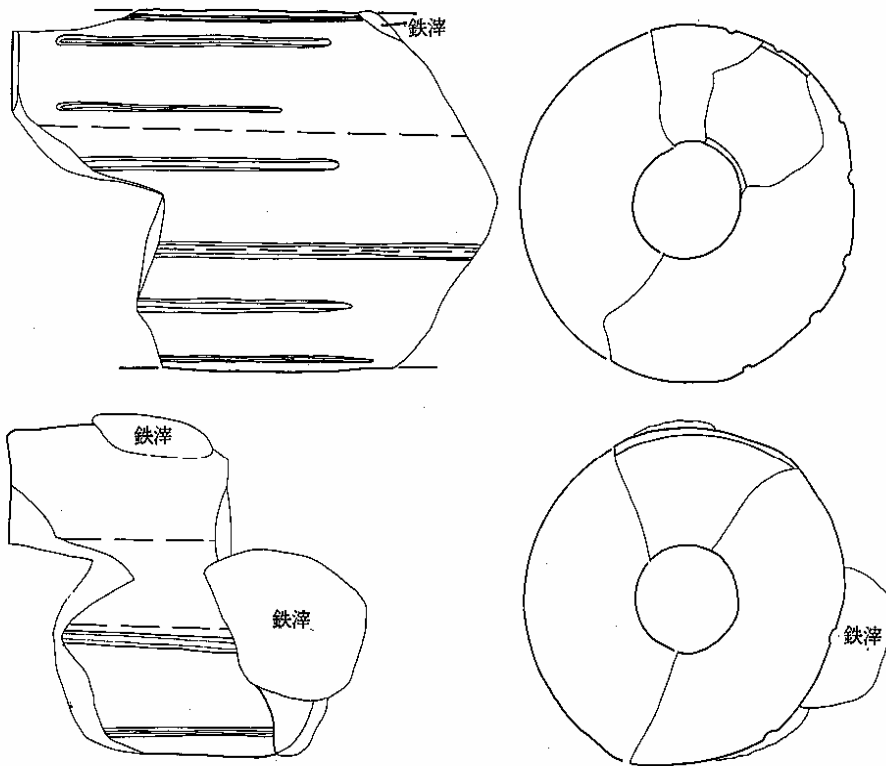
第13図 C区製鉄遺構

〔羽口〕

① 円筒状で孔径3.3cm、外径12.2cm、長さ12.5cmある。先端には鉄滓が付着している。外面はヘラケズリされ、さらに数条の溝が加えられている。

② 円筒状で孔径4.2cm、外径14.2cm、長さ19.0cmある。先端には鉄滓が付着している。外面はヘラケズリされ、さらに数条の溝が加えられている。

〔赤焼土器〕 坏の体部から口縁部にかけての破片である。細片のため図示することはできないが、器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。



第14図 製鉄遺構の出土遺物

## IV 遺構と遺物の考察

### 1. 遺物

今回の調査で出土した遺物には縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器、鉄製品（鉄斧、釘状鉄製品、用途不明鉄製品）、土製品（羽口）、石製品（砥石）、鉄滓がある。ここでは図示できたものの中で比較的数の多い土師器について分類する。

## 土師器の分類

土師器には坏、高台付坏、甕、甌などがある。ここではそれらの器種について器形、製作技法、器面調整などの観点から分類を試みたい。

坏 坏はロクロ使用の有無と底部切り離し技法、再調整の有無という観点で分類した。製作に際し、ロクロ非使用のもの（A類）とロクロを使用したもの（B類）とがある。

**A類** 体部から口縁にかけて内湾ぎみに立ち上り、底部は丸底風の平底である。器面調整は内外面ともヘラミガキされ、内面は黒色処理されている。

**B類** 底部から体部にかけて丸味をもって立ち上り、そのまま口縁部につづくものと、口縁部がわずかに外反するものがある。底部切り離し技法は回転糸切り技法によるもの(I)と再調整によって不明なもの(II)とがあり、(I)は再調整のあるもの(a)とないもの(b)とに細分できる。再調整はすべて手持ちヘラケズリである。

**B I a類** 底部切り離しは回転糸切り技法によるもので再調整のないもの。

**B I b類** 底部切り離しは回転糸切り技法によるもので再調整のあるもの。

**B II類** 再調整のため、底部切り離しの不明なもの。

〔高台付坏〕 製作にロクロを使用している。底部から台部にかけての破片である。台部は付高台で、その端部はわずかに開いている。底部の切り離し技法は回転糸切りによるもので内面は黒色処理されている。

〔甕〕 甕には大型のものとは小型のものがある。製作に際しロクロを使用の有無という点で分類した。

**A類** 製作に際しロクロ非使用のもので体部下端から口縁部にかけてゆるやかに開き、口縁部は外反する。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデである。

**B類** 製作に際しロクロを使用している。体部下端から口縁部にかけては直線的に立ち上り口縁部は、わずかに外反する。器面調整は内外面ともロクロナデで、体部下半まで残存する1点については外面にヘラケズリが施されている。

〔甌〕 製作に際しロクロ非使用のものである。無底のものである。体部下端から上に向かってゆるやかに立ち上り口縁部は小さく外反する。体部には1対の把手がある。器面調整は口縁部が内外面とも横ナデ、体部は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。

## 出土土器の組み合わせと年代

前項のように土師器は分類された「遺構に伴う遺物」の中でこれらの土器は各々次のような組み合わせ関係を示す（表2）。次に各々分類された土師器の年代について従来の研究成果を基

に若干考えてみたい。ここでは年代を考える上で土師器坏を中心に考えていきたい。

A類のような特徴をもつ土器は志波姫町糠塚遺跡BⅢ群(小井川・手塚：1980)、名取市清水遺跡Ⅲ群(丹羽、阿部 博、小野寺：1981)にみられ国分寺下層式の中でも新しい時期に位置づけられている。

本遺跡出土のA類土器もこれらと同時代のものと考えられ、8世紀後半のものと思われる。

B類の特徴をもつ土器としては東北地方南部における土師器の編年で、表杉ノ入式(氏家：1957)に当たり平安時代に位置づけられている。表杉ノ入式は設定以来、成形、調整技法の差異器形、共伴土器等により細分が試みられており、阿部義平、桑原滋郎らはロクロ技術の進歩という点から、製作技法の手数の簡略化という方向を指摘している。

県内においても表杉ノ入式の細分が試みられ、高清水町手取、西手取遺跡(早坂、阿部：1980)白石市青木遺跡(小川：1981)、名取市清水遺跡では3時期に区分している。

本遺跡から出土した土師器坏の組み合わせ関係を他の遺跡と比較すると、名取市清水遺跡Ⅷ群A群土器(前出)、白石市青木Ⅰ、Ⅱ群(前出)に対比できる。これらの土器群はいずれも表杉ノ入式の中でも比較的古いものとされ、本遺跡出土のB類土器、さらにこれと共伴する甕、高台付坏、赤焼土器もこれらと同時代(平安時代前半)と考えられる。

	坏					高台付坏	甕		赤焼土器
	A	B <sub>a</sub>	B <sub>b</sub>	B <sub>II</sub>	B	A	B		
1号住居		○		○				○	○
2号住居		○	○			○			
3号住居								○	
5号住居	○						○		○
4号土城					○				
製鉄遺構									○

表 2

## 2. 竪穴住居跡の構造と年代

今回の調査で発見された住居跡は5軒である。住居の平面形はすべて方形を基調としたもので、床面及び壁は地山をそのまま利用している。柱穴は1号住居跡から1個発見されたのみで、主柱穴の本数、配置等は不明である。

周溝はすべての住居跡から認められ、すべての壁沿いに認められたものとそうでないものがある。カマドは3号住居跡と5号住居跡から検出されたのみで、他の住居跡のものはすでに削平を受けていると考えられる。カマドはいずれも燃焼部と煙道部からなる。側壁は3号が礫を芯として粘土を貼りつけ、5号は粘土のみで作られている。5号のものはその内面を補強のため石、土器片を貼りつけている。またいずれの住居からも燃焼部から礫と焼土が認められ、天井部も石組粘土貼りされていた可能性がある。

その他の施設としては1号、3号、5号住居から溝が検出されている。1住、3住の溝は周溝から床面にかけて延びるもので、3住のものはさらに住居外へと続く。

同様の例は古川市藤屋敷遺跡(加藤、佐藤：1980)などに見られ溝の底面は先端に向って傾斜する

事から住居からの排水施設であると考えられている。5号住居跡の溝は環状に住居をとりかこむもので、同様の例は仙台市柞江遺跡（仙台市教委：1980）瀬峯町大境山遺跡（現説資料）に認められる。地形からみると斜面づたいに流れ込む水の排水施設と考えられる。

各住居跡からの出土遺物は先述したとおりであり、それぞれの時代は次のようになる。

表杉ノ入期（平安時代前半）第1・2号住居跡

国分寺下層期（奈良時代後半）第5号住居跡

時期不明、第3・4号住居跡

### 3. 塚について

今回の調査で明らかにされた事をもとに塚の性格等について若干考えてみる。

塚は3基確認され、すべて丘陵尾根上の自然地形の高まりを利用して作られている。それぞれの形状、規模は第1号塚が円形で9.0m、第2号塚が楕円形で5.5-4.0m、第3号塚が長方形形で6.0-5.0mというように各塚間における均一性は見られない。

第1号塚は発掘を行い内部の調査を行ったが内部施設、出土遺物は何ら認められず古墳、中世以降の墳墓とは考えられない。

ところで栗原郡金成町字高見山七ツ森は丘陵上の稜線上に13基の塚がほぼ南北に一列に配列し、3基の塚を対象とした発掘調査の結果何ら内部施設は認められず、塚（境塚）と断定されている。（金成町史：1973）。十三塚は村境の丘陵上や街道に沿って存在する塚で松島町内においても桜渡戸壇山13塚（利府-松島町境付近）がある（松島町誌：1973）。

本遺跡の立地する塚は“山下”と“中田”の字境に当たる丘陵上に立地し、又何ら内部施設をもたず、上記の塚の特徴と一致する。このことから本遺跡も“境塚”である可能性がある。

### 4. 製鉄遺構とその年代

C区から発見された製鉄遺構がどのような性質のものであるか考えてみたい。ここでは遺構の形態的特徴という面と出土鉄滓の化学分析という面から考察を行った。出土鉄滓の分析については後述する。

#### 遺構の形態からみた性格

本遺跡から発見された製鉄遺構について概括してみよう。まず炉の平面形と規模は炉床と考えられる焼面と一部に残る炉壁から楕円形で、長軸1.4m、短軸1.0mほどのものと推定される。上部構造はすでに破壊、削平を受け不明であるが一部に見られる炉壁の立ち上りと周囲にある崩落した炉壁の量から見て炉床よりさらに上に何らかの施設があったと考えられる。

構築の手順について見ると地山面を楕円形に掘り窪め、その上に砂、木炭、鉄滓を敷きつめ



その上を粘土貼りして炉底としている。これは地山から湿気が上昇して炉温を下げるのを防ぐための施設と考えられる。厚さは約10cmある。また炉と考えられる楕円形の掘り込みの東側には「C」字状をした掘り込みが付属してみられ、堆積土中には鉄滓、炉壁が多量に含まれる。

製鉄遺構としてあつかわれているものには砂鉄、鉍石から原料鉄をとり出した製錬炉（タタラ遺構）原料鉄から脱炭等の精錬を行い素材鉄へと加工した精錬炉（大鍛冶遺構）さらに素材鉄から製品へと加工を進める鍛冶炉（小鍛冶遺構）があり、各々の特徴は次のようになる。

**製錬炉** 砂鉄や鉍石から鉄をとり出すための炉で大型のものである。炉の構築は地山を切り出したり地山を掘り窪め、粘土を貼り炉底、炉壁としている。炉壁は地山面よりさらに上部に延び、炉全体の形状は円筒形や長方形を呈している。（いわゆるシャット炉とよばれる形態）。しかし炉の上部構造は鉄を取り出す際、破壊されるためほとんどの場合原形をとどめない。炉底は地山面から毛細管現象により水分が上昇して炉内の温度が下がるのを防ぐため砂、木炭鉄滓等を敷きつめ湿気抜きを施設をもつことが多い。

また炉のまわりには炉を作るための粘土をとるピット、鉄滓や炉壁をすてるためのピット作業場等の施設が付属することが多い。

遺構は山麓斜面、沢地等に立地し、原料（砂鉄・鉍石）産地近くに存在する事が多い。

例としては県内では仙台市嶺山C遺跡（佐藤：1980）、県外では青森県大館森山遺跡（成田：1968）、狐野遺跡（新谷：1979）があげられる。

またこのような炉のよく保存されている例としては、埼玉県大山遺跡（高橋：1980）がある。

**精錬炉** 製錬炉によって作られた原料鉄をさらに精錬、脱炭するための炉であるが形態的特徴については不明である。

**鍛冶炉** 素材鉄から製品に加工するための炉で、小型のピットでまわりに焼面が広がる。これらの遺構は住居内から単独で検出されたり、工房として一ヶ所に集中して検出される事が多い。住居内から検出された例は豊里町沼崎山遺跡第11号、25号住居跡（遊佐：1980）、高清水町観音沢遺跡第1号住居跡（加藤、阿部博：1980）、中新田町城生柵跡第51号住居跡、工房としての例は多賀城跡S X912遺構がある。

山下遺跡から発見された製鉄遺構は規模、形態、構築法及び化学分析結果から見て製錬炉の特徴をもつもので、大山遺跡のような上部構造をもつシャット炉であった可能性がある。

次に遺構の年代であるが遺構の年代を推定する出土遺物は鉄滓や炉壁のくずれたものと同一の層から出土した赤焼土器一片のみである。この層は炉から鉄を取り出す際、炉を破壊した時の崩落層と考えられ、また付近には他の遺構も存在しない事から、この土器は炉の操業年代に近い時代のもと考えられる。

さて赤焼土器の年代であるが赤焼土器は平安時代以降に見られるものであり、この一片のみ

で明確な時代を示す事はできない。

炉の年代も平安時代を上限とするものと考えられる。

## 5. その他の遺構の年代と出土遺物の年代

- **第1号土壇**、遺構に伴う遺物はなく時代は不明である。性格については不明である。
- **第2号土壇**、遺構に伴う遺物はないが切り合い関係から第3号住居跡より古い時代のものである。性格については不明である。
- **第3号土壇**、遺構に伴う遺物はないが、切り合い関係から第4号土壇より新しい時代のものである。性格については不明である。
- **第4号土壇**、遺構に伴う遺物としては、底面出土の土師器坏がある。これは製作にロクロを使用しており、他の住居から出土している表杉ノ入式のものに対比できる。平安時代のものであると考えられる。性格については不明である。
- **第1号溝**、遺構に伴う遺物はないが第2号住居を切っており、第2号住居より新しい。平安時代以降のものである。性格については不明である。
- **第2号溝**、遺構に伴う遺物はない。切り合い関係からも時代は不明である。性格については不明である。
- **第3号溝**、遺構に伴う遺物はない。時代不明である。性格については不明である。
- **縄文土器**、第1号土壇、溝状遺構から数点出土している。胎土に繊維を含むもので、縄文時代早期から前期初頭のものと思われる。

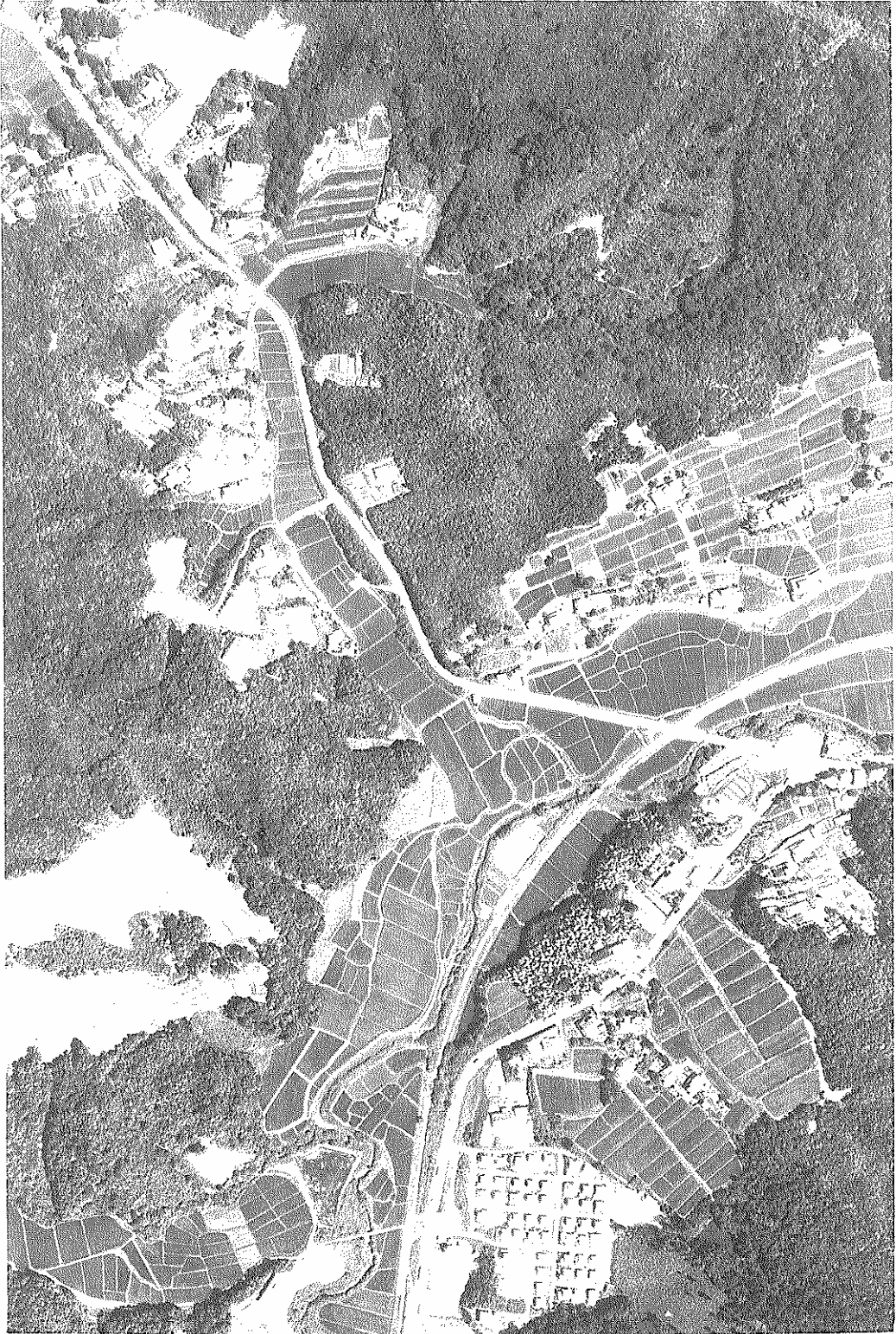
## V まとめ

1. 山下遺跡は、富谷丘陵の利府～長町構造線に面する丘陵末端に立地している。
2. 遺構としては、A区からは奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居跡5軒、ほぼ同時代と思われる土壇4基、時代不明の溝状遺構3本が、B区からは境塚と考えられる塚が、C区からは製鉄遺構1基が検出された。
3. 製鉄遺構は、遺構の形態面からと鉄滓の化学分析の結果から製錬炉であると考えられる。
4. 遺物としては、土師器（奈良時代から平安時代）、須恵器、石器、鉄製品などが出土した。

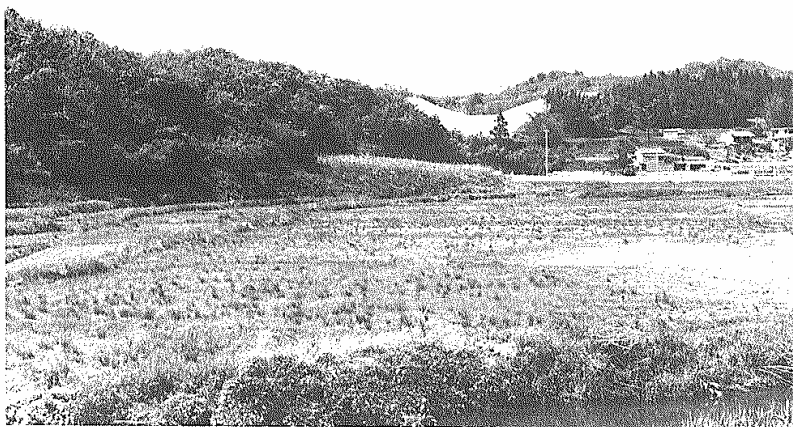
## 〈参 考 文 献〉

- 阿部義平（1974）：「東国の土師器と須恵器—多賀城外の出土土器をめぐって」帝塚山考古No.1
- 阿部正光（1979）：「大境山遺跡現地説明会資料」
- 氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
- 小川淳一（1980）：「青木遺跡」東北自動車道Ⅳ宮城県文化財調査報告書第71集
- 加藤道男、阿部博志（1980）：「観音沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第72集
- 加藤、佐藤（1980）：「藤屋敷遺跡」東北自動車道Ⅱ
- 金成町史（1973）：金成町教育委員会
- 小井川和夫（1976）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集
- 阪田正一、他（1972）：「神明上遺跡群」立正大学考古学研究室小報12号
- 佐藤甲二（1980）：「嶺山C遺跡」仙台市教育委員会
- 新谷雄蔵（1979）：「狐野製鉄遺跡」五所川原教育委員会
- 仙教委（1980）：「栢江遺跡」
- 高橋一夫（1980）：「大山遺跡」埼玉県遺跡発掘報告書第23集
- 中島直（1980）：「城生柵跡」中新田町文化財調査報告書第4集
- 成田末五郎（1968）：「大館森山製鉄炉遺構」岩木山、岩木山刊行会
- 丹羽、阿部、小野寺（1981）：「清水遺跡」東北新幹線Ⅴ宮城県文化財調査報告書第77集
- 早坂、阿部（1980）：「手取、西手取遺跡」東北自動車道Ⅱ宮城県文化財調査報告書第63集
- 松島町誌（1973）：松島町誌編纂委員会
- 森貢喜（1980）：「権現山遺跡」東北自動車道Ⅲ宮城県文化財調査報告書第69集
- 遊佐五郎（1980）：「沼崎山遺跡」豊里町教育委員会





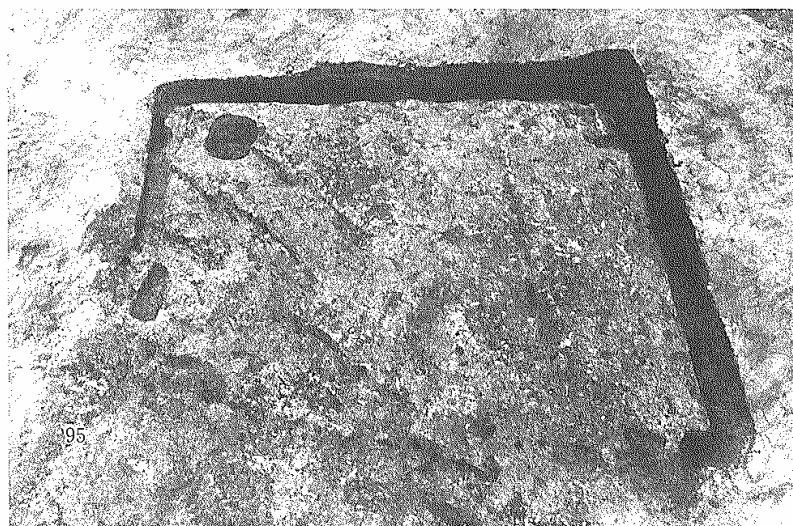
図版1 遺跡とその周辺



遺跡遠景



第1号住居跡

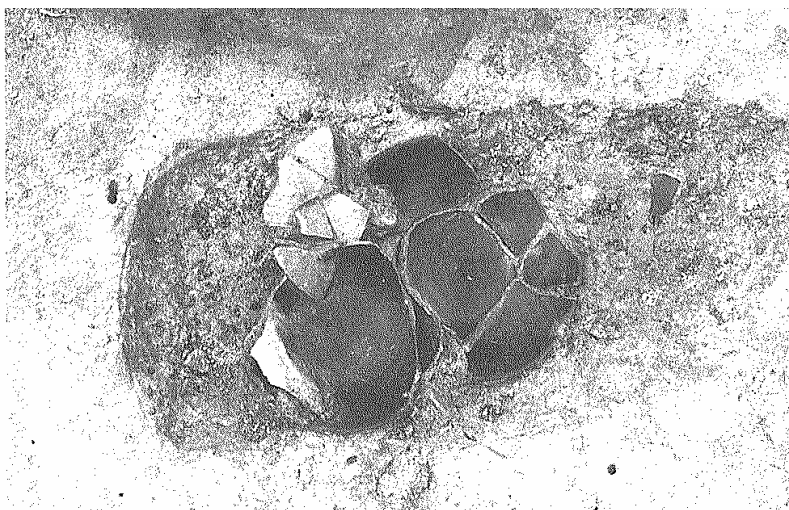


第2号住居跡



図版 3

第 2 号住居跡  
貯蔵穴状ピット



第 3 号住居跡



第 3 号住居跡カマド

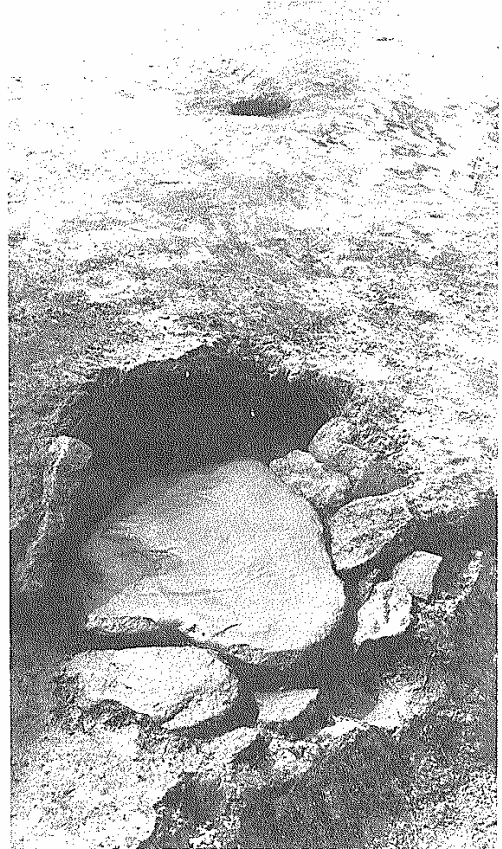




第4号住居跡



第5号住居跡

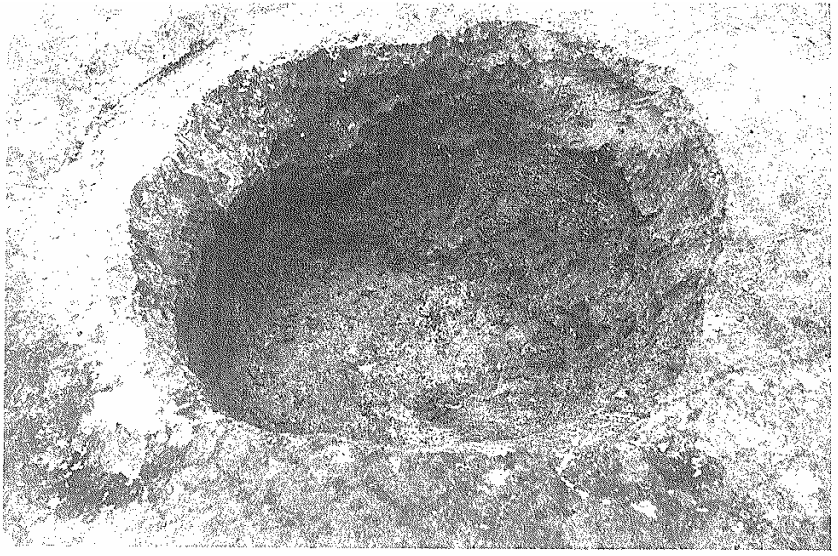


第5号住居跡カマド

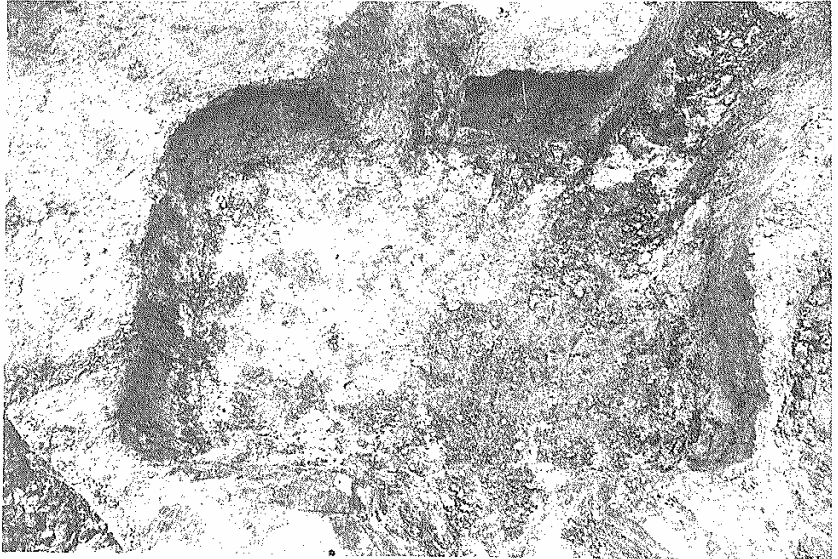


图版 5

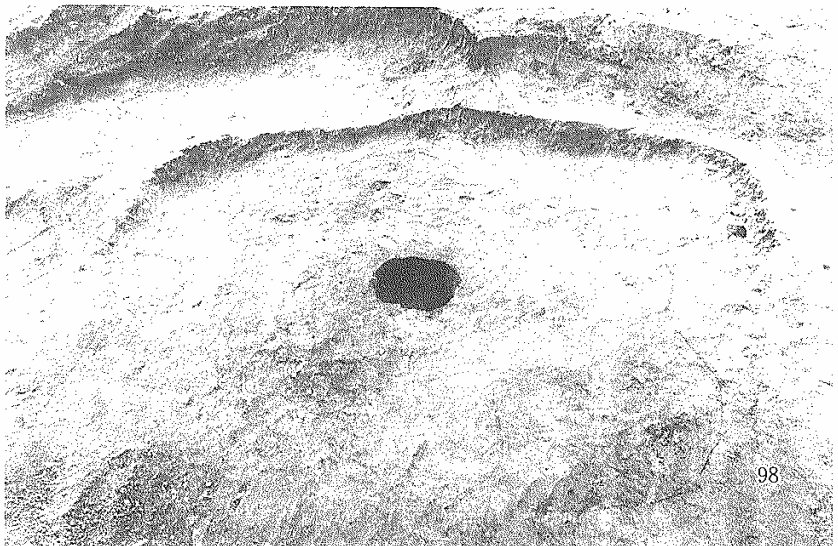
第 1 号土墩



第 2 号土墩



第 3 号 · 4 号土墩





図版 6

溝状遺構



第1号塚  
(表土を剝いだ後)

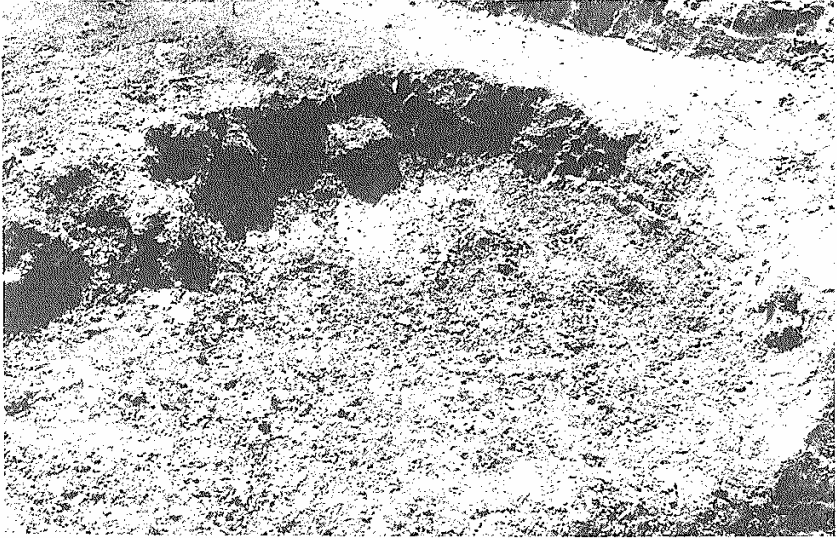


第1号塚  
(掘り上げ後)

第 1 号塚断面图

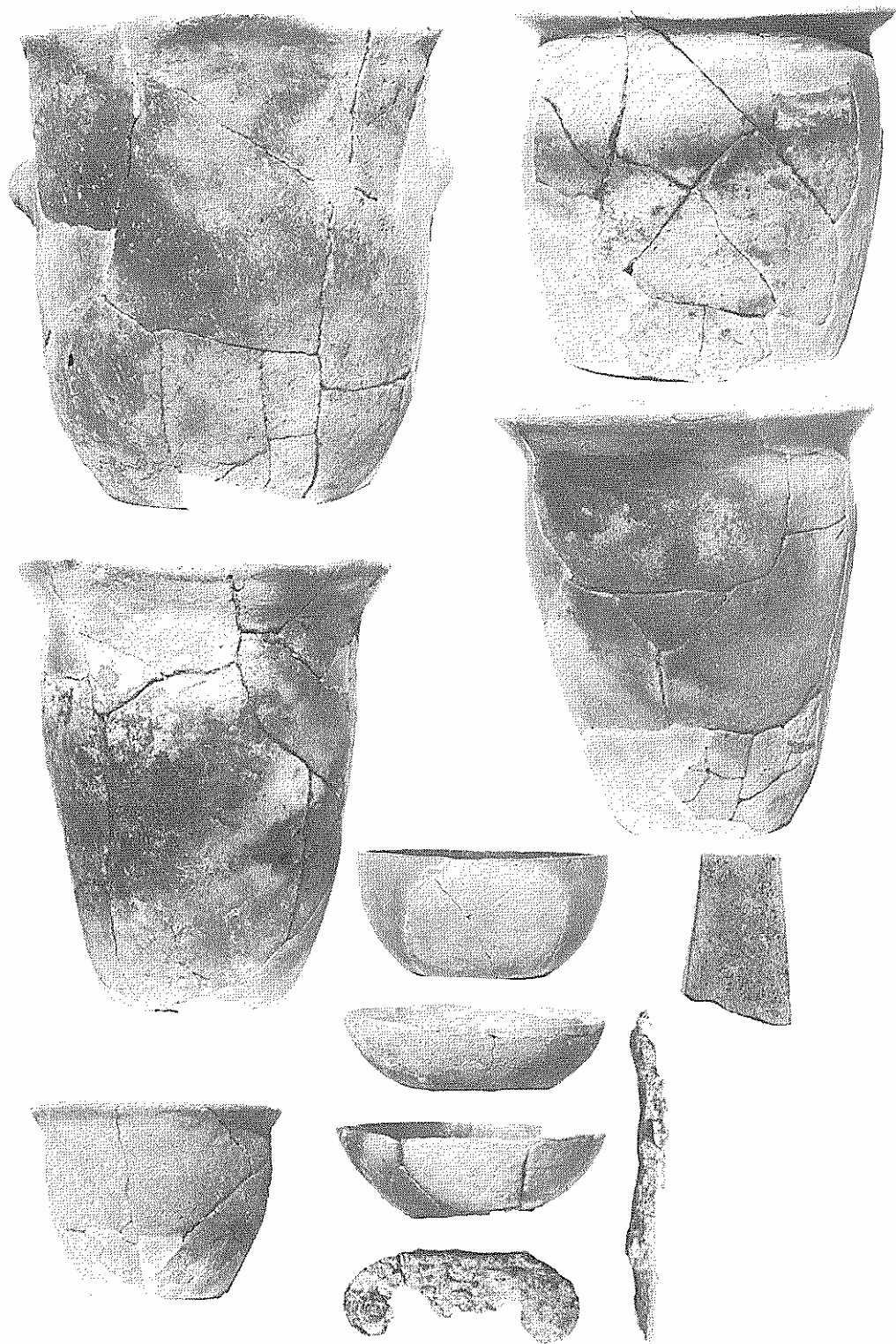


C 区 製鉄遺構



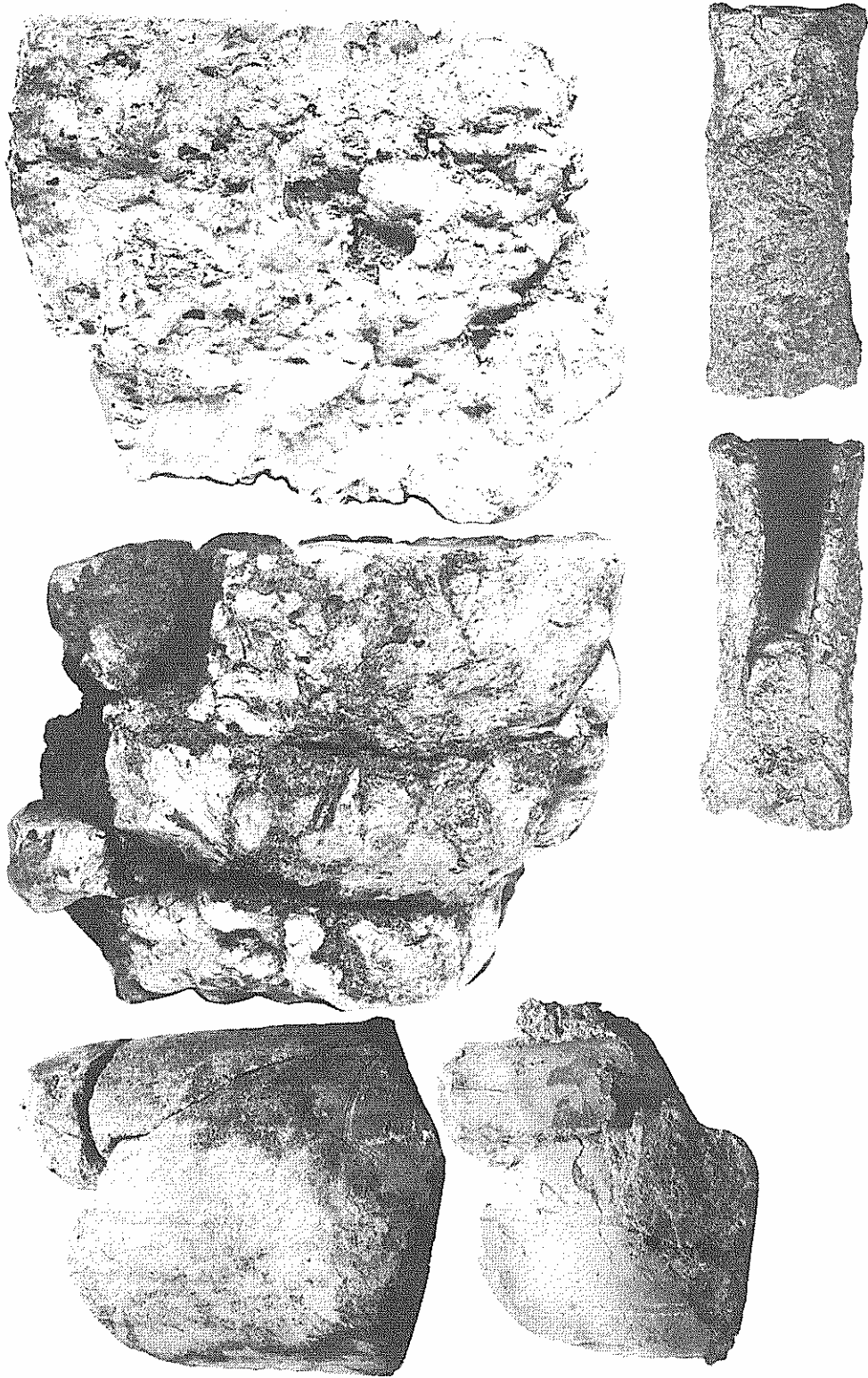
C 区 鉄滓、炉壁散布状況





图版 8





图版 9

# 山下遺跡C区出土鉄滓の分析調査

鴫 田 勝 彦

# 山下遺跡C区出土鉄滓の分析調査

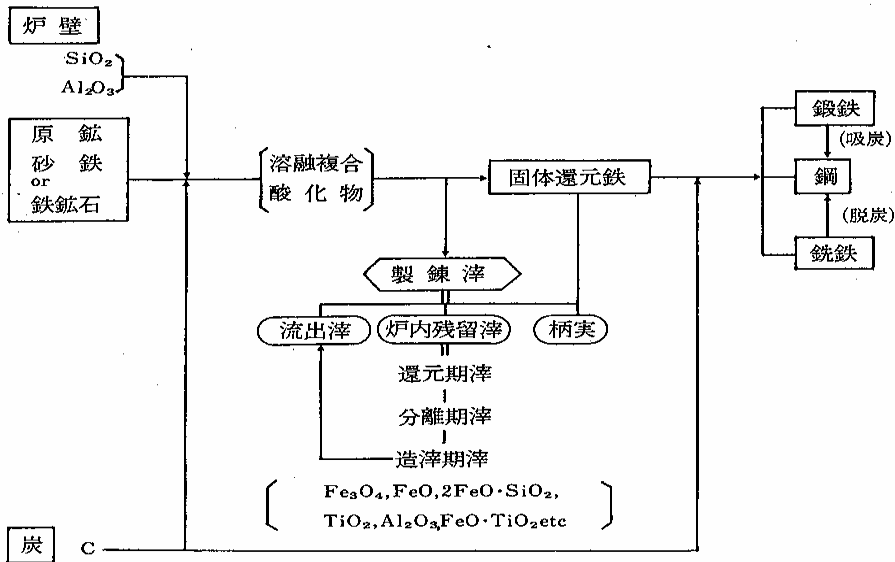
鴫田勝彦

## 1. はじめに

宮城県内において、鉄滓の分布はかなり広範に知られているが、製鉄遺構そのものは白石市深谷<sup>1)</sup>と仙台市茂庭嶺山C遺跡<sup>2)</sup>で調査されたに過ぎない。そんな中で、松島町山下遺跡C区で製鉄炉1基が検出された。推定年代は出土土器の編年から平安時代に比定されている。炉の形態は、炉の上部構造が破損しているため明らかでないが、私の注目しているのは炉床部である。鉄滓混りの粘土を固めてつくられている。この技法は、近世東北の製鉄法の湿気よけ地下施設に通ずるものである。

鉄滓は、製鉄炉内や炉床及び周辺から、羽口片、炉壁とともに出土した。大きさや形はまちまちだが、いずれも製錬滓と考えられる。その中から10個の調査依頼を受けたので、4種選んで自然科学的な検討を加えた。

鉄滓は、原鉱から製鉄を経て鍛造・鋳造して鉄器を製作する過程で発生し、工程毎に製錬滓・鍛冶滓・鋳物滓に分けられる。中でも製錬滓は多種多様なので、予めその発生過程と種類を第1図に示しておく。



第1図 製鉄過程と製錬滓の発生<sup>4)</sup>

## 2. 調査方法

提供された鉄滓の中から、出土地点及び様相の異なる4種を選び(第1表)、各々つぎの調査を行った。

- ① 肉眼観察
- ② 光学顕微鏡観察

第1表 山下遺跡出土供試鉄滓と調査項目

試料	種類	調査項目			
		金属顕微鏡	X線回折	化学分析	ビッカース硬さ
MY-1	羽口片付着滓	○	○	○	
MY-2	炉壁片付着滓	○	○	○	○
MY-3	炉底部残留滓	○	○	○	
MY-4	炉床混入流出滓	○	○	○	

鉄滓は水道水でよく洗滌してから乾燥させ、二分割して一方を検鏡試料とし、残りを分析用試料とした。検鏡試料は、グラインダで上下両面を平らにして#320、#700、#800、#1000、#1200、#1500、#2000のエメリーペーパーをかけた後、酸化クロムを研磨剤としてバフ仕上げをした。4試料とも、研磨のまま検鏡して構成鉱物の同定を行った。MY-2の金属鉄(M・Fe)の多い部分は3%硝酸アルコール溶液(ナイトル)で腐食し、金属組織を観察した。鉄滓の鉱物組成は、通常、均一でないので、検鏡の位置によってその組織が異なる。スペースの許す限り、できるだけ多くの写真を載せた。

### ③ 粉末X線回折法

鉄滓を構成している元素・酸化物がどんな形状をしているか知るため、粉末X線回折法を用いた。試料を粉末にし、コバルト(Co)をターゲットとしたX線回折計(X-ray diffract meter)にかけて回折X線図を記録、ASTMカードと照合して物質の同定をした。

### ④ 化学組成

原子吸光、蛍光X線法及び湿式法による化学分析を行って、鉄滓の化学組成を求めた。ただし、MY-2の金属鉄の定量分析はしていない。

### ⑤ マイクロビッカース硬さ

MY-2の金属鉄の多い面を鏡面研磨して、マイクロビッカース硬さ試験機でその硬さを測定した。これは、試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押込み、その時生じた凹みの面積でその荷重を除いた値を硬度値とする。



### 3. 調査結果<sup>5)</sup>

試料No.の順に調査結果の報告をする。顕微鏡組織は図版 10～11 に、化学組成は第 2 表に、そして X 線回折図は第 2 図に示す。

#### 1) MY-1 (図版 10・第 2 表・第 2 図 1)

大型の羽口片の先端に付着している鉄滓で、表皮は明褐色を呈し、部分的に飴状平滑面をもつ。破面は黒褐色を呈し、小さな気孔が多い。羽口の溶込みで造滓成分( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ )の多いことが予想される。比重は 2.6。

〈鉱物組成〉 検鏡では、ガラス質を地に、白色の微小板状結晶の棒状に連なったプシュドブルーカイト(Pseudobrookite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )と白色多角形のマグネタイト(Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )が観察された。X 線回折法による鉱物組成の同定(第 2 図 1)から、この鉄滓はイルメナイト(Ilmenite:  $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、プシュドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )、二酸化硅素( $\text{SiO}_2$ )で構成されているのが判明した。

〈化学組成〉 全鉄分(Total Fe)が 18.32%と少なく、造滓成分が 41.47%と高目の鉄錬滓である。二酸化チタン( $\text{TiO}_2$ )は 21.75%と、Total Fe の 1.2 倍もあり、イルメナイト、プシュドブルーカイトの存在を裏づけている。羽口の溶け込みの影響が大きいと考えられる。

#### 2) MY-2 (図版 10・第 2 表・第 2 図 2)

大きな炉壁の内壁全面についていた鉄滓のうち、炉心に近い部分を切り取ったもので、炉内残留滓である。表皮は全体的に褐色気味だが、金属光沢のする微小部分が認められる。破面は金属光沢をもつ部分と、黒灰色を呈す部分に分かれていて、気孔は少ない。比重は 3.6。

〈鉱物組成〉 検鏡では、白色不定形の金属鉄(M・Fe)とガラス質にはっきり分かれているのが観察された(2-a)。M・Fe の近い部分には白色多角形を呈すマグネタイト( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )が認められ、ガラス質の中には微小な白色板状結晶が連なっているプシュドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )が晶出しているのが認められた(2-a)。X 線回折法ではフェライト(Ferrite:  $\alpha\text{-Fe}$ )、マグネタイト( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )、プシュドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )および、M・Fe の酸化生成物であるヘマタイト(Hematite  $\alpha\text{-Fe}_2\text{O}_3$ )などの鉱物組成が同定された。

〈化学組成〉 Total Fe が 57.64%と多く、M・Fe は 39.44%と非常に高く、第 2 表の S-2 および C 塊に類似している。それに対して、造滓成分は 20.8%と極だつて低目であった。環元期滓と推定される。 $\text{TiO}_2$  は、8.84%と他の鉄滓に比較して低いが、M・Fe のほとんど含有されていないので、造滓成分中のその割合は高いと思われる。

〈金属鉄の組織〉 M・Fe の組織を知るため 3% ナイタルで腐食して検鏡した。図版 10、M-a～M-c がその写真である。M-c、M-d で明らかなように、網目状の細線で囲まれた粒状結晶の集合組織が見ら

れる。フェライト( $\alpha$ -Fe)である。網目状の細線は、勝手な方向に主要結晶軸をもつ各結晶粒と、研磨平面との交線が現われたものである。結晶粒内の黒点は非金属介在物で酸化物であろう。

また、M-a、M-bではフェライトの他にゲーサイト(Goethite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$ )が認められた。環元がかなり進んだ状態のものである。純鉄に近いアームコ鉄(Armco iron)と似ているが、これから造滓成分と分離され、吸炭して鋼になる途中のもので、アームコ鉄になるとは限らない。

マイクロビッカース硬さの測定結果を第3表に示す。組織から予想された通り、Hv=99 と軟かい。成分分析はしていない。

第3表 MY-2中の金属鉄の硬さ

測定点	①	②	③	平均
Hv	112	80	106	99

### 3) MY-3 (図版11・第2表・第2図3)

炉底部から出土した鉄滓で、炉内残留滓である。褐色の表皮はやや粗雑で気孔が見られる。破面は黒褐色を呈し、大きさの異なる気孔が多い。比重は2.2。

〔鉱物組成〕 検鏡では、白色の微小板状結晶の連なりであるプシウドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )と、凝集したフェアライト(Fayalite:  $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、ガラス質から構成される部分(3-b,3-d)と微小なぶどう状のウスタイト(Wustite:  $\text{FeO}$ )とフェアライトから成る部分(3-a)が見られる。さらに、微小なM・Feが認められる。X線回折法によれば、この鉄滓はイルメナイト( $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、フェアライト( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )を主体にした物質から構成されているのが判明した。

〔化学組成〕 全鉄分が27.2%と比較的少ない。それに対して、造滓成分は42.7%と高目で全鉄分の1.5倍にも達している。鉄収率の良好な、造滓期の炉内滓であろう。TiO<sub>2</sub>は15.64%であった。この鉄滓の特徴は、銅(Cu)の含有量が0.035%と高目なことである。

### 4) MY-4 (図版11・第2表・第2図4)

炉床部に粘土と一緒に固められていた鉄滓で、湿気を防ぐため混入されたのであろう。表皮も破面もともに黒色を呈し、無数の小さな気孔が存在して、鉄残存量の少なさを示す。比重は2.8。

〔鉱物組成〕 検鏡した面は、どの個所もほぼ同じ組織といえる。プシウドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )、フェアライト( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )、ガラス質を主体にした顕微鏡写真を提示している。プシウドブルーカイトは、成長した板状結晶と晶出型の微小な結晶の2種類が認められる。X線回折法からは、イルメナイト( $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、フェアライト( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )やプシウドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )などの物質が同定された。

〔化学組成〕 造滓成分は29.8%と余り多くはないが、全鉄分が少ないため、全鉄分の1.35倍に達している。鉄回収率の良好な流出滓であろう。そして、目につくのはTiO<sub>2</sub>が24.6%と非常に高いことで、鉱物組成のイルメナイト、プシウドブルーカイトの存在を裏づけている。

#### 4. 考察

以上、供試鉄滓について、成分と鉱物組成を明らかにした。これらのことから、原鉱として何がつかわれたか、炉内のどのような機構で還元鉄ができ、製錬滓が発生するのか考えてみる。

砂鉄中にイルメナイト( $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )という形で入っている $\text{TiO}_2$ は、炉内で約 1.5~2 倍に濃縮された形で製錬滓の一部を形成する。供試鉄滓が同時にできたわけではないが、同一工人集団が同一個所の砂鉄をつかった可能性が強いので、平均 $\text{TiO}_2$ を計算する。ただし、MY-2では $\text{M} \cdot \text{Fe}$ に $\text{Ti}$ が入り込まないものとして計算した結果、14.6%となった。4つの平均 $\text{TiO}_2$ 量が約 19.0%となるので、砂鉄中の $\text{TiO}_2$ 量は 9.5~12.7%となる。さらに、 $\text{CaO}$ 、 $\text{MgO}$ が多いことから原鉱は、粒形の微細な赤褐色粒の混じった赤目砂鉄(塩基性砂鉄)であるといえる。

つぎに、炉内残留滓であるMY-2、MY-3から、砂鉄の還元と製錬滓の発生のしくみを明らかにしたい<sup>7)</sup>。ここで、MY-2とMY-3は同一炉内で発生したものと扱うことにする。理由は、MY-2の $\text{M} \cdot \text{Fe}$ を除いた造滓部分の成分は、 $\text{FeO}$

第2表 鉄滓の定量分析結果 (大同特殊鋼株式会社中央研究所)

試料	鉄滓の定量分析結果										備考														
	全鉄 total Fe	酸化鉄 第1鉄 $\text{FeO}$	酸化鉄 第2鉄 $\text{Fe}_2\text{O}_3$	金属鉄 $\text{M} \cdot \text{Fe}$	二酸化 ケイ素 $\text{SiO}_2$	酸化 アルミ $\text{Al}_2\text{O}_3$	酸化 マンガン $\text{MnO}$	酸化 マグネシウム $\text{MgO}$	二酸化 チタン $\text{TiO}_2$	銅 Cu		鉛 Pb	錫 Sn	ニッケル Ni	コバルト Co	クロム Cr	マンガン Mn	炭素 C	リン P	シリコン Si	バナジウム V	成分 造滓	造滓成分 total Fe	$\text{TiO}_2$	
MY-1	18.32	9.80	14.68	0.43	25.48	6.68	4.26	5.05	8.83	21.75	0.047	0.016	0.20	0.040	0.024	0.20	0.034	0.024	0.20	0.034	41.47	2.264	1.187		
MY-2	57.64	13.45	11.07	39.44	13.24	3.69	1.75	2.16	0.52	8.84	0.048	0.019	0.23	0.089	0.095	0.23	0.068	0.095	0.23	0.068	20.84	0.362	0.153		
MY-3	27.21	18.25	17.07	0.64	28.28	6.44	2.76	4.60	0.76	15.64	0.020	0.029	0.32	0.025	0.023	0.32	0.032	0.023	0.32	0.032	42.08	1.546	0.575		
MY-4	22.12	16.84	11.62	0.90	16.52	4.40	3.01	5.91	1.09	24.60	0.004	0.017	0.30	0.063	0.003	0.30	0.022	0.003	0.30	0.022	29.84	1.349	1.112		
S-1	32.04	32.54	9.54	0.10	25.30	6.57	—	—	—	17.67	—	—	—	—	—	0.063	—	—	—	—	—	—	0.551	流出滓	
S-8	31.92	31.57	10.34	0.20	24.70	6.41	—	—	—	18.12	—	—	—	—	—	0.070	—	—	—	—	—	—	—	0.586	流出滓
S-2	68.82	20.35	9.12	46.14	7.10	1.74	—	—	—	5.86	—	—	—	—	—	0.096	—	—	—	—	—	—	—	0.085	還元期滓
C塊(高鉄部)	63.07	21.77	—	40.44	13.50	2.56	1.59	—	—	4.99	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.26	17.65	0.280	0.079	造滓過程物
D塊	33.29	32.30	—	1.84	30.89	5.85	5.08	1.47	0.88	4.33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.12	43.29	1.300	0.190	流動化生成滓
通風孔流入滓	35.83	30.45	—	1.56	31.13	5.04	1.76	0.99	0.90	6.38	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.20	38.92	1.086	0.178	—

(※1) 丸山益輝 「鉄滓による(たたら)炉内反応の解析」 昭和52年度たたら研究会大会研究発表資料 1977  
(※2) 長谷川・芹沢・天田 「自然通風炉による古代製鉄還元実験について」 『鉄と鋼』 64 (1978) №3 P.497  
(※3) 備考欄記載の鉄滓区分名は上記(※1・2)の原文に依る。  
(※4) ▼は $\text{V}_2\text{O}_5$ の重量%で、造滓成分は( $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO}$ )である。

22.2%、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 18.3%、 $\text{SiO}_2$ 22.9%、 $\text{Al}_2\text{O}_3$ 6.1%、 $\text{CaO}$ 2.9%、 $\text{MgO}$ 3.6%となり、還元が進んで $\text{FeO}$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 減、 $\text{SiO}_2$ 増となることを考慮すると、MY-3の化学組成とほぼ一致するからである。

まず、砂鉄（一般に $\text{Fe}_3\text{O}_4$ に $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ が混在）が、 $700^\circ\text{C}$ 前後の比較的低温だが $\text{CO}$ ガスの高い雰囲気中で、 $\text{Fe}_3\text{O}_4 + 4\text{CO} \rightarrow 3\text{Fe} + 4\text{CO}_2$ の還元反応を起こす。そのとき、生成物は $\text{FeO}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ 系のスラグ融液をつくって、残りの砂鉄粒子をつつみ、さらに還元がすすむ。砂鉄中の $\text{Ti}$ 分は、徐々に溶け出して含チタンガラスを形成する（図版10、MY-2）。還元鉄は、 $\text{C}$ を殆んど含んでいず、分離後、炉内反応で吸炭して鉬や銑になる。

分離期滓は、フェアライト( $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ )を地にした低融点の流動滓をつくりつつ、流出滓と同組成の造滓期滓をつくる。この冷却過程で、繊細なプシュドブルーカイト( $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{TiO}_2$ )が晶出する。場合によってはマグネタイト( $\text{Fe}_3\text{O}_4$ )も晶出する。

しかし、 $\text{TiO}_2$ の高い砂鉄を原鉱として、MY-3、MY-4のような $\text{T} \cdot \text{Fe}$ の少ない製錬滓を得る（鉄回収率が良好ということ）還元が行われるには、高い炉温を必要としたはずである。そのためには、送風量を多くすることと、炉の構造の工夫をしなければならない。

## 5. まとめ

①. 出土鉄滓は、赤目砂鉄を原鉱とした製錬滓であり、検出された遺構が明らかに製鉄炉であることを裏づけた。

②. 造滓期滓や流出滓の成分組成で、（造滓成分／全鉄量）が高いことから、平安時代の製鉄としては、鉄の回収率が非常に良好であるといえる。

③. 鉄滓の鉱物組成から、炉温が $1300^\circ\text{C}$ を越える部分があるほど高温状態を保てたと推定され、送風量の多い人工送風がなされたと思われる。

④. 炉内残留滓の分析と顕微鏡観察によって、砂鉄が還元されて、鉄と鉄滓が分離されるしくみがある程度明らかにすることができた。

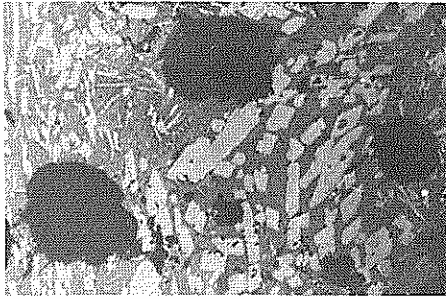
## 謝 辞

本稿作成に当たり、成分分析やX線回折を行って下さいました大同特殊鋼株式会社のご厚意と同社課長小原田真氏、研究員成田正氏はじめスタッフの方々に感謝の意を表わします。

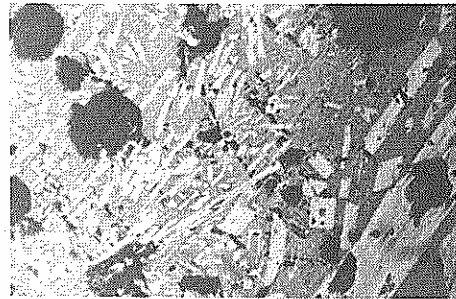
(1982. 2. 9)

## 註

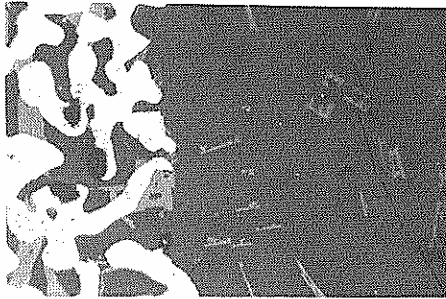
1. 和島誠一「製鉄技術の展開」『日本考古学』VI 河出書店P.502 (1968) 『白石市史』別巻など。
2. 仙台市教育委員会「嶺山C遺跡」『仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第31集P.23 (1981)
3. 三宅・鴫田・桜井「ドウメキ沢製鉄遺跡発掘調査概報」昭和55年度たたら研究会大会研究発表資料 (1981)。
4. 横川清志「復元たたら炉による製鉄について」『たたら研究19・20』(1976)中の第12図を参考に、丸山益輝「鉄滓による「たたら」炉内反応の解析」『たたら研究22』(1978)中の製錬滓の種類を付け加えて作成した。
5. 大澤正巳「大山遺跡を中心とした埼玉県下出土の製鉄関係遺物分析調査」『大山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集(1979)。湊・佐々木「タタラ製鉄鉍滓の鉍物組成と製錬条件について」『たたら研究14』(1970)等各種報告書・論文を参考にした。
6.  $M \cdot Fe_{39.44\%}$ を除いた成分全体を100として算出した。 $TiO_2$ の場合は $8.84 \times 100 / (100 - 39.44) \div 14.5\%$ となる。
7. 前掲4)丸山、5)湊・佐々木の論文を参考にした。



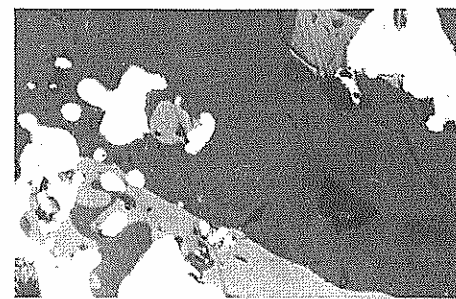
MY-1 (a)



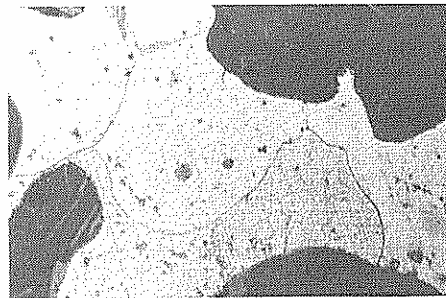
MY-1 (b)



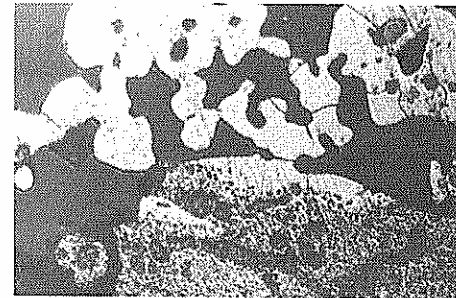
MY-2 (a)



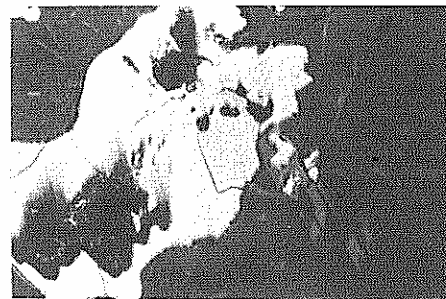
MY-2 (b)



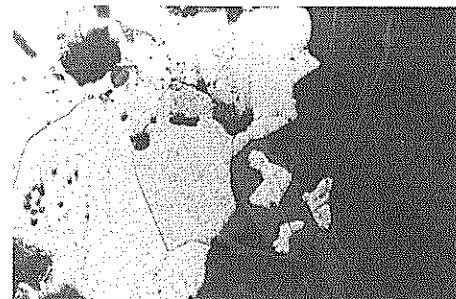
M-a ナイタル腐食×600



M-b×600

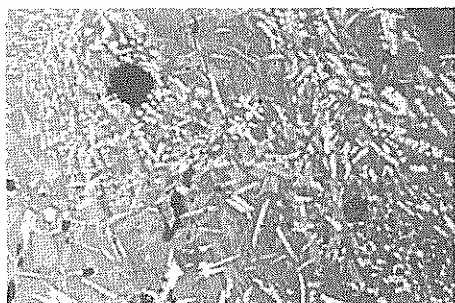


M-c×600

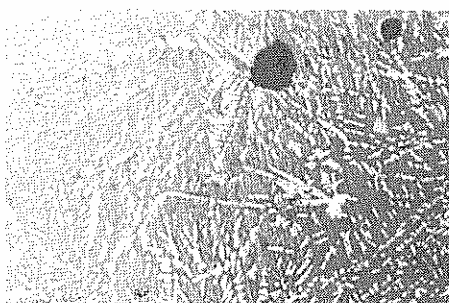


M-e×1200

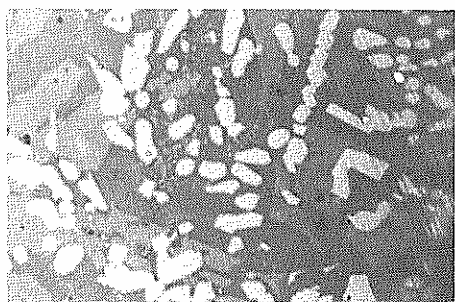
図版10 鉄滓の鉱物組織および還元鉄部の金属組織×300



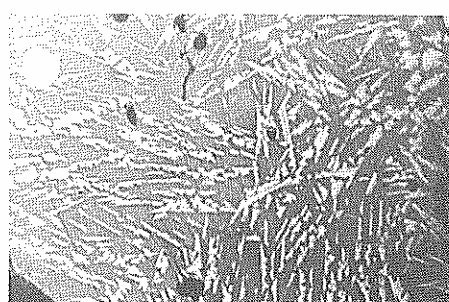
MY-3 (a)



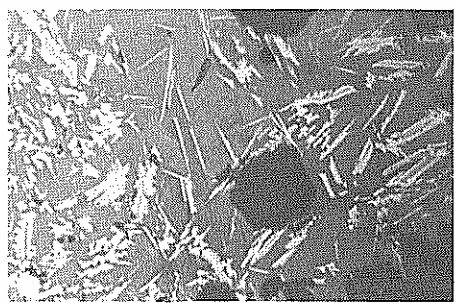
MY-3 (b)



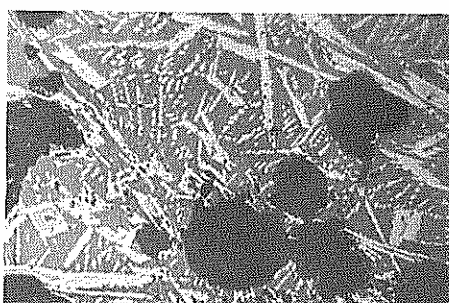
MY-3 (c)



MY-3 (d)



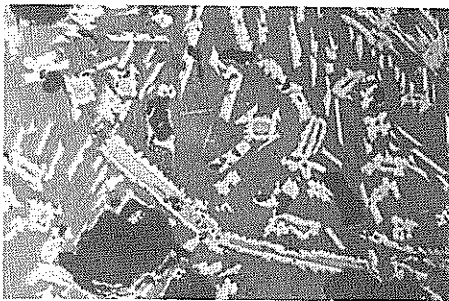
MY-4 (a)



MY-4 (b)



MY-4 (c)



MY-4 (d)

図版11 鉄滓の鉍物組織×300





館山館跡地形全体図